元総社明神遺跡X

土地区画整理事業に先立つ埋蔵文化財発掘調査概報

1992

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

元総社明神遺跡 X

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

巻首図版１　榛名山と元総社明神遺跡周辺

１．31トレンチ全景

２．31トレンチⅠ－４号井戸址出土天目茶碗

序

群馬県前橋市は、関東平野の北西端に位置し水と緑に恵まれた人口28万人を擁する県都であります。市の歴史は大変古く、発掘調査の成果から初めてこの地に人々が住み始めたのは、今から2万年以上も前の旧石器時代であるということが分かっております。前橋の地は長い歴史の中でも特に古代においては「東国の奈良」、近世においては「関東の華」と称され、さらに江戸時代末期から明治・大正時代にかけては日本の生糸貿易を支える養蚕製糸業の中心地として発展した歴史の薫り高い街でもあります。

市の西部に位置する元総社地区は、律令制下における上野国の国府と推定されており、上野国総社神社を始めとする歴史遺産の豊富な地区として広く知られております。

近年、都市基盤整備の必要性が高まり、元総社地区にも土地区画整理が実施されることとなりました。歴史的に重要な地区となっているため、道水路部分を中心として事前の発掘調査を実施することとなり、本年度で第10年次を迎えました。

本年度は、新設道路1箇所、既存道路の拡幅2箇所の調査を実施しました。

限られた範囲の調査でありましたが、蒼海城絵図に記されていない溝址が確認されたり多数の井戸址とそれに伴う天目茶碗等の遺物も発見されております。

最後になりましたが、既存家屋に接する市街地での発掘調査ということで、安全対策等大変神経を使いましたが、元総社第三明神地区区画整理審議委員の方々、区画整理第1課の担当者及び隣接住民の方々、さらに発掘調査・整理作業に従事していただきました作業員の方々の深い御理解と御協力を得まして無事調査を終了することができましたことに対し厚く御礼申し上げます。

本報告書が元総社地区の歴史を解明して行くうえで、少しでも参考になれば幸いと存じます。

平成4年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団長　遠　藤　次　也

例　　言

1．本報告書は、前橋市都市計画事業元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業施工者　前橋市　代表者　前橋市長　藤嶋清多が実施する区画整理事業に係る元総社明神遺跡発掘調査報告書である。

2．遺跡は、群馬県前橋市元総社町3,643番地ほかに所在する。

3．調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団　団長　遠藤次也が施工者　前橋市　代表者　前橋市長藤嶋清多と委託契約を締結し実施した。

調査担当および調査期間は以下の通りである。

発掘・整理担当者　　鈴木雅浩・狩野吉弘（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）

発掘調査期間　　平成３年６月25日～平成３年11月８日

整理・報告書作成期間　　平成３年11月11日～平成４年３月31日

4．本書の原稿執筆・編集は鈴木・狩野が行った。整理作業をはじめ図版作成には、岩木佳代・岩木　操・大田一郎・岸フクエ・住谷文彦・渡木秋子・湯浅たま江・湯浅政夫・湯浅道子の協力があった。

5．下記の専門的分野については、次の機関ならびに方々のお世話になった。（敬称略）

地質・地形：有限会社古環境研究所　　瓦：木津博明（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）

陶　磁　器：井上喜久男（愛知県陶磁資料館）　　蒼海城趾：茂木　渉

石器・石材：飯島静男

6．発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡　　例

1．挿図中に使用した北は座標北である。

2．挿図に建設省国土地理院発行の1/20万地形図（長野・宇都宮）と1/2.5万地形図（前橋）を使用した。

3．本遺跡の略称は３Ａ52である。

4．各遺構の略称は次の通りである。

H…古墳・平安時代の住居址、Ｉ…井戸址、D…土坑、W…溝址

5．遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。

遺構　　住居址・土坑・井戸…1/60、全体図1/200

遺物　　土器・石器…1/3、瓦…1/4、石製品…1/3、1/6

6．スクリーントーンの使用は次の通りである。

遺構断面図　　火山灰…濃点、構築面…斜線

遺物実測図　　黒色処理…網、炭化物…斑、施釉範囲…霙、須恵器断面…黒塗り

灰釉陶器断面…濃点、土器使用痕…細斜線

── 目　　次 ──

序

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地 …… 1
2　歴史的環境 …… 3

Ⅲ　調査の経過

1　調査方針 …… 6
2　調査経過 …… 7

Ⅳ　層　　序 …… 8

Ⅴ　調査区の遺構と遺物

1　28トレンチ …… 9
2　30トレンチ …… 10
3　31トレンチ …… 15

Ⅵ　ま　と　め …… 27

付　　編

元総社明神X遺跡の地質調査報告書（有限会社古環境研究所） …… 34
蒼海城について　　茂　木　　渉 …… 36

図　　版

口 絵　1　榛名山と元総社地区中心地全景
口 絵　2　31トレンチ全景・天目茶碗

PL.　1　28トレンチの遺構
2　30トレンチの遺構（1）
3　30トレンチの遺構（2）
4　30トレンチの遺構（3）
5　31トレンチの遺構（1）
6　31トレンチの遺構（2）
7　31トレンチの遺構（3）
PL.　8　31トレンチの遺構（4）
9　28・30トレンチの遺物
10　30・31トレンチの遺物
11　石臼・五輪塔（1）
12　石臼・五輪塔（2）
13　石器・石製品
14　瓦

挿　　図

頁

Fig.　1　元総社明神遺跡の位置 …… v
2　元総社明神遺跡位置図 …… 2
3　元総社明神遺跡周辺図 …… 4
4　元総社明神遺跡グリッド設定図 … 5
5　元総社明神遺跡調査経過図 …… 6
6　元総社明神遺跡標準土層図 …… 8
7　28トレンチ全体図・遺構図 …… 45
8　30・31トレンチ全体図 …… 46・47
9　30トレンチ遺構図（1）…… 48
10　30トレンチ遺構図（2）…… 49
11　30トレンチ遺構図（3）…… 50
12　30トレンチ遺構図（4）…… 51
13　31トレンチ遺構図（1）…… 52
14　31トレンチ遺構図（2）…… 53
Fig.　15　31トレンチ遺構図（3）…… 54
16　31トレンチ遺構図（4）…… 55
17　31トレンチ遺構図（5）…… 56
18　31トレンチ遺構図（6）…… 57
19　28トレンチ出土遺物 …… 59
20　30トレンチ出土遺物 …… 60
21　30・31トレンチ出土遺物 …… 61
22　31トレンチ出土遺物 …… 62
23　28・30トレンチ石製品・土製品 …… 63
24　31トレンチ石製品 …… 64
25　31トレンチ石製品・石器 …… 65
26　28・30トレンチ瓦 …… 66
27　30・31トレンチ瓦 …… 67
28　31トレンチ瓦 …… 68
29　31トレンチ・表採瓦 …… 69

表

頁

Tab.　1　遺物観察表 …… 42
2　石製品・土製品・石器観察表 …… 43
Tab.　3　瓦観察表 …… 44

付　　図

頁

付 図　1　トレンチ整合図 …… 28・29
2　溝址断面照合図 …… 30
3　近世瀬戸物編年図表 …… 33
付 図　4　W－2号溝址覆土の層序 …… 35
5　蒼海城 …… 38・39
6　江田城 …… 40

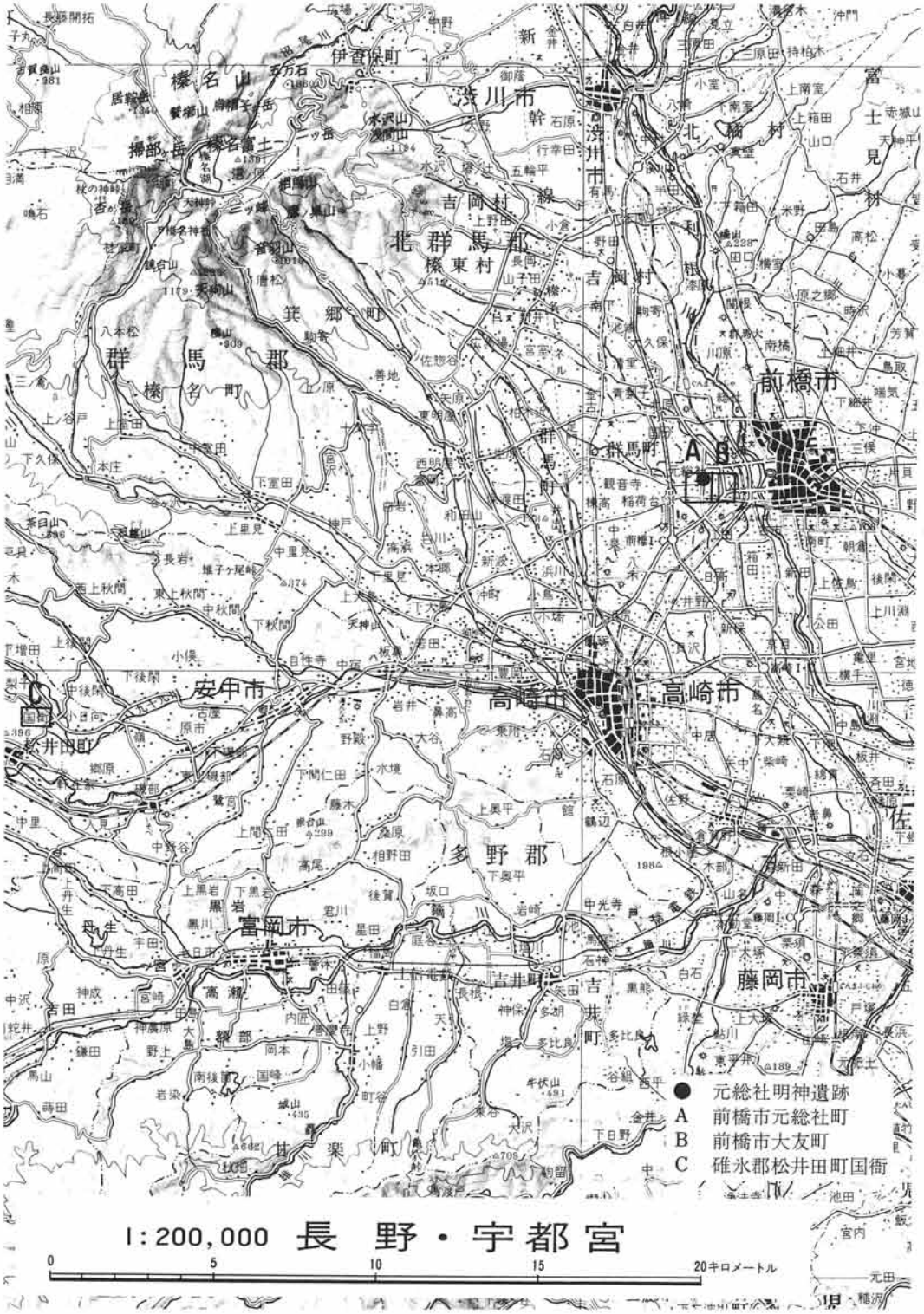


Fig. 1 元総社明神遺跡の位置と上野国府

Ⅰ　調査に至る経緯

昭和48年に計画策定された前橋市都市計画事業元総社地区土地区画整理事業について、事業担当課である区画整理１課と当局の協議が重ねられ、道水路部分を中心に埋蔵文化財の調査を実施することが決定した。

まず、初年度である昭和57年度と58年度の２ヶ年で、前橋市教育委員会が国庫補助金を受けて遺跡範囲確認調査を実施した。その結果、濃密な遺構の分布が認められたことと遺跡地が推定上野国府域に所在することの重要性も鑑みて、再度協議を重ね、昭和59年10月15日付で『元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業に伴う元総社明神遺跡の発掘調査に関する覚書』が代表者前橋市長と前橋市教育委員会教育長との間で締結された。調査は区画整理事業の進捗状況に則して、前橋市教育委員会の組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団で実施することになった。

なお、『元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業に伴う元総社明神遺跡の発掘調査に関する覚書』は、昭和63年４月18日および平成３年１月８日付でその内容を一部変更した。

平成３年度の調査は、委託者から平成３年４月12日付で調査依頼書が提出され、５月１日付で委託契約が締結され事業実施の運びとなった。現地での発掘調査を平成３年６月25日から11月８日まで行い、整理作業は平成３年11月11日から平成４年３月31日までであった。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１　遺跡の立地

前橋市は、利根川が赤城・榛名の両火山の裾合谷を経て関東平野を望むところに位置し、地形・地質の特徴から、大きく北東部の赤城火山斜面、南西部の洪積台地（前橋台地）と両者の地溝状をなす沖積低地（広瀬川低地帯）、及び現利根川氾濫源の４地域に分けられる。

元総社明神遺跡の立地する前橋台地は、約24,000年前に浅間火山爆発によって引き起こされた火山泥流堆積物とそれを被覆するローム層（水成）から成り立っている。西は、前橋市の北西端にあたる清里地域で榛名山麓に広がる相馬ヶ原扇状地と移行部を形成し本遺跡まで及んでいる。

東は、広瀬川低地帯と直線的な崖で画されている。そして、微地形的には多少の起伏をもってはいるがほとんど平坦台地面といえる。前橋台地面の水系をみると、榛名山水系の諸河川が裾野を東南方向に開析し、台地面を刻んで細長い微高地を作り上げている。総社・元総社付近の染谷川や牛池川は、微高地との比高３ｍ～５ｍを測り、段丘崖上は高燥な台地で、桑園を主とした畑地として利用されてきた。またこの台地上は恰好の居住地であったらしく、古墳時代から奈良・

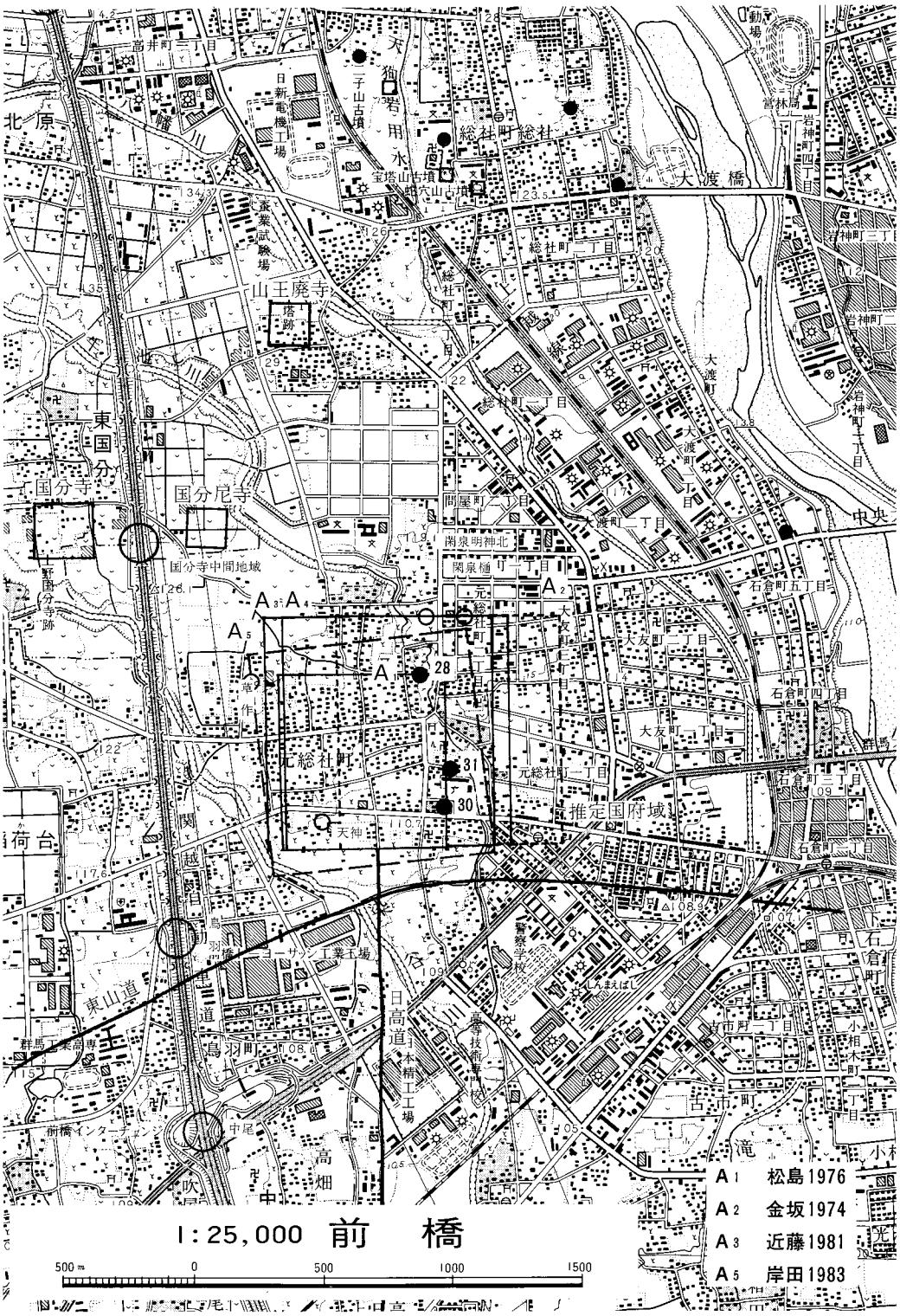


Fig. 2 元総社明神遺跡の調査地点と上野国府学説

平安時代にかけての多くの遺跡が残されている。元総社明神遺跡は、前橋市元総社町に所在し、群馬県庁より西へ約2㎞、ＪＲ上越線新前橋駅北方約2㎞の地点である。遺跡地は、群馬郡群馬町東牛池沼に発し、元総社町南部字落合で染谷川に合流する牛池川の台地上に占地している。この台地の西側は牛池川に向かってゆるやかに傾斜し、その比高は3ｍ～4ｍを測り、右岸の段丘上には総社神社が鎮座し、地域の産土神にもなっている。一方、本遺跡地は、市街地化が進み、幹線道路を中心にオフィスビルや商店が立ち並び、原状を明らかにすることはできないが、標高112ｍ～115ｍの北西から南東へ向かってわずかずつ傾斜している地形が窺える。

2　歴史的環境

今回の調査の結果、検出された遺構は、中世の蒼海城と関連を持つ堀（28トレンチ：Ｗ－1）、奈良・平安時代の住居址と土坑群、そして現在のところ性格不明の溝址（31トレンチ：Ｗ－1）などであり、遺物では中世瀬戸・美濃産と推定される天目および近江産と思われる緑釉の香炉（31トレンチ内）そして奈良・平安および古墳時代の遺物（30トレンチ他）を挙げることができる。

本遺跡地周辺は推定上野国府域として古代史の注目を浴び、さらに中世には蒼海城が築かれた。

それらを含めた状況把握をするためにも、縄文時代から遡って周辺の歴史的環境をみていきたい。縄文時代では、国分寺中間地域遺跡や産業道路東・西遺跡で検出された前期・中期の集落が筆頭に挙げられ、当地域の縄文文化を考える上で重要な資料といえる。その他に下東西遺跡、清里南部遺跡群、清里・陣場遺跡、中島遺跡、長久保遺跡などが挙げられ、時期的には前期から後期初頭といった範囲でおさえられる。

弥生時代の調査例は少なく、中期後半の環濠集落址である清里・庚申塚遺跡と後期の住居が検出された国分寺中間地域遺跡、桜ヶ丘遺跡、下東西遺跡等に散見するだけである。井野川、染谷川流域に比べ格段の差を生ずるのは、本地域が高燥化した土地であることの地形的要因に帰するのであろう。

古墳時代を彩る一大モニュメントとしての古墳が本遺跡地周辺に姿を現すのは、6世紀前半代である。利根川右岸段丘上に、川原石を用いた積石塚である王山古墳が造られる。その後、本遺跡の北約2㎞には、総社古墳群を構成する古墳が連綿と築かれる。まず、国指定史跡で前方部と後円部に石室を有する総社二子山古墳、巨石使用の横穴式石室をもつ愛宕山古墳、主軸70ｍを測る遠見山古墳、また県内最終末期と考えられ仏教文化の影響を強く受けた宝塔山古墳と蛇穴山古墳などが挙げられる。宝塔山古墳の南西約500ｍに所在する山王廃寺にみる石造物群は、宝塔山古墳石棺や蛇穴山古墳石室と同系統の石造技術を駆使して加工されたと考えられている。共通する技法から時代決定の根拠とされ、白鳳期の建立と考えられる山王廃寺を中心にして、総社・元総社周辺では、仏教文化が古墳文化と併存しながら花開いた様子が窺える。しかし、古墳が数多く存在するにもかかわらず、大きな集落は検出されていない。

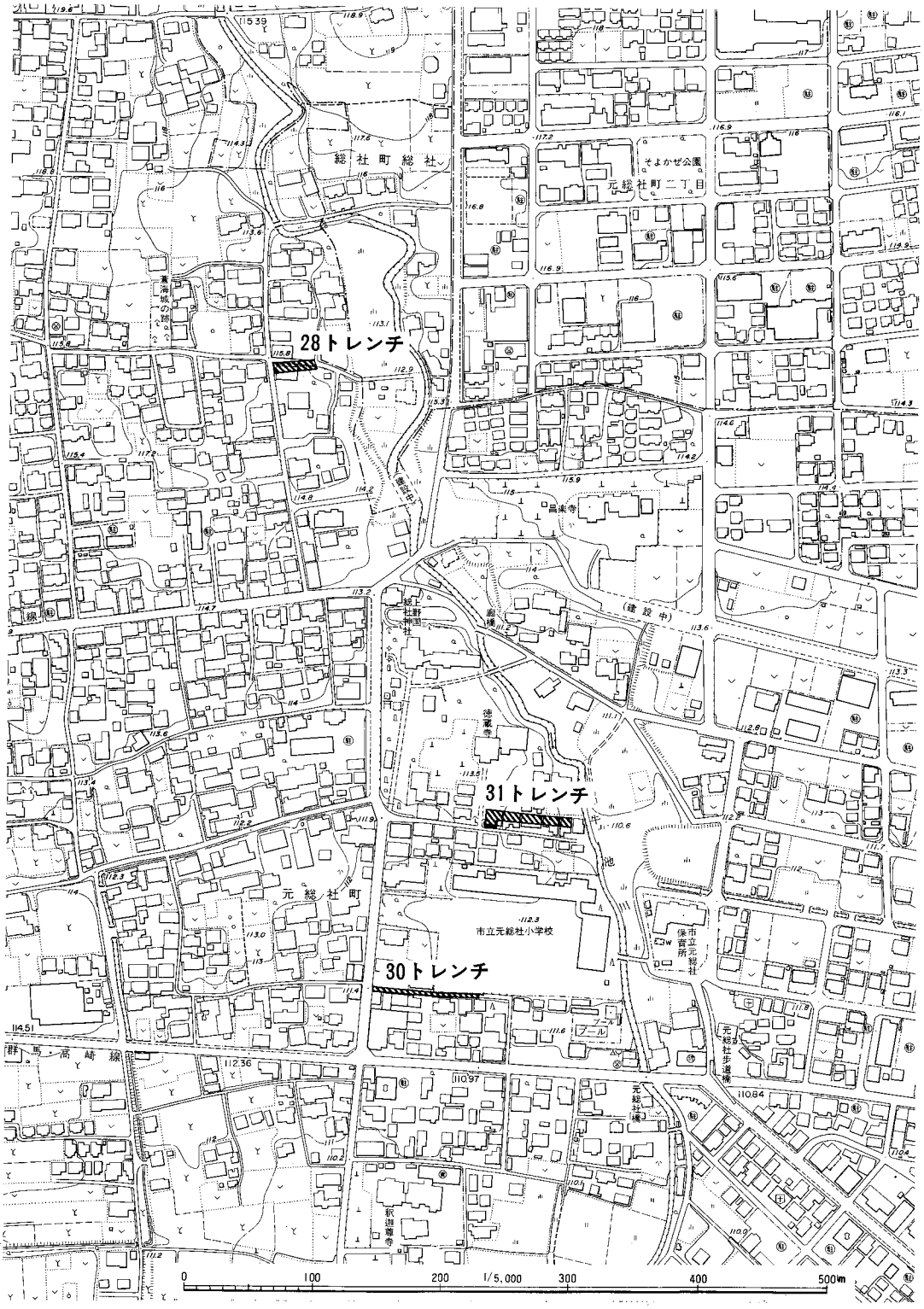


Fig. 3 元総社明神遺跡調査区周辺図

奈良・平安時代に至ると、国府、国分二寺等の建設とあいまって、当地域はいよいよ古代上野の政治的・文化的中心地としての様相を帯びてくる。国府については8年次にわたる発掘調査と戦前からの研究史がある。また国府周辺遺跡では、閑泉樋遺跡、閑泉樋南遺跡、小見遺跡、草作遺跡、大友屋敷遺跡、寺田遺跡、元総社小学校校庭遺跡、天神遺跡、染谷川遺跡、弥勒山遺跡等がある。

国府の成立年代は定かではないが、大化2年（646）の改新の詔の二に「初脩二京師一、置二幾内国司郡司……」（日本書紀巻25）とあり、新国司制度とともに国府の大部分が新設されたものと考えられていることから、奈良時代以前には国府ができていたものと推定される。また、「倭名類聚鈔」によれば「上野国、国府在群馬郡……」とあり、位置として「群馬久留米国分偽東西二群府中間国分」の記述がある。これらの文献及び総社神社の「上野国神名帳」研究等により、当地域に国府があると想定され、地名や地割りから想定案が提出されている（Fig. 1・2参照）。また国分僧寺の発掘調査は昭和55年12月から始まり、それ以降毎年発掘調査が進められ、各種遺構の礎石、築地、堀などが確認されている。国分寺周辺では、この数年関越自動車道建設に伴う発掘調査が進められて、道筋にあたる中尾遺跡、鳥羽遺跡、国分寺中間地域遺跡等がある。これらの遺跡からは、奈良・平安時代の住居址が大量に発掘されている。このことからも、奈良時代から平安時代にかけて当地では爆発的に集落の拡大した様子が窺われる。中世には蒼海城が築かれ（1429）、秋元氏の城下となったようである。現在の街路の祖形は、蒼海城の堀割りが道路と変化したものである。そして蒼海城の縄張り自体も国府跡を利用しいるため、国府解明が一層複雑なものとなっている。

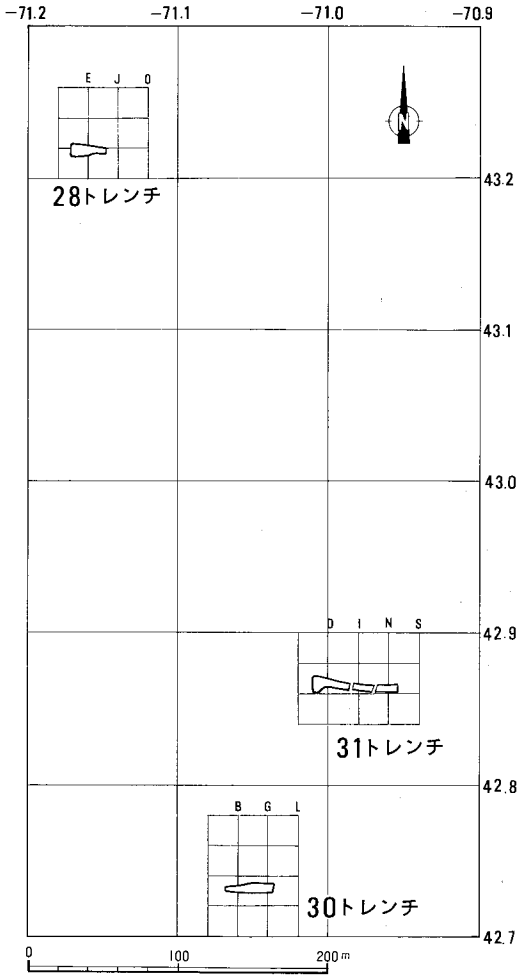


Fig. 4 元総社明神遺跡グリット設定図

Ⅲ 調 査 の 経 過

1 調 査 方 針

昭和57年度から始まった元総社明神遺跡の発掘調査は、今回で10年次を迎えた。調査対象地が道路部分であるため狭長な調査区が多い。昭和57・58年度に実施したトレンチの呼称に追従して、その後も共通な呼称法が採られ、東西調査区を１・２・３トレンチ…、南北調査区をＡ・Ｂ・Ｃトレンチ…と呼んできている。従って、『トレンチ』とは「調査区」の慣用的な呼び方である。

調査方法は、調査対象地に試掘調査を実施し、その結果から発掘調査に移行する方法をとった。

なお、今年度の調査は３ヵ所にわたるため、表土剥ぎや多くの面で土木用機械を使用した。グリッドはすべて公共座標にもとづき、座標北を基準に４ｍ単位で設定した。グリットは西から東へＡ・Ｂ・Ｃ…、北から南へ１・２・３…と番付し、グリッドの呼称は北西杭の名称とし、Ａ－１グリッド（例）と呼んだ。平面座標・水準の移動は区画整理に伴う近接した基点を利用し、委託測量によった。

グリット設定後、プラン確認を行い調査工程を検討し調査を進める。発掘調査にあたっては、遺構は基本的に「使用面」と「掘り方面」に分けた工程で実施した。図面作成は平板・簡易遣り方測量を用い、原則的に1/40の縮尺で、必要に応じて1/10・1/20の縮尺で作成した。遺構の遺物については平面分布図を作成し、台帳に各種記録を採りながら収納した。包含層の遺物は、グリッド単位で層位毎に収納した。ただし、白磁・青磁など重要と判断した遺物は、分布図・遺物台帳

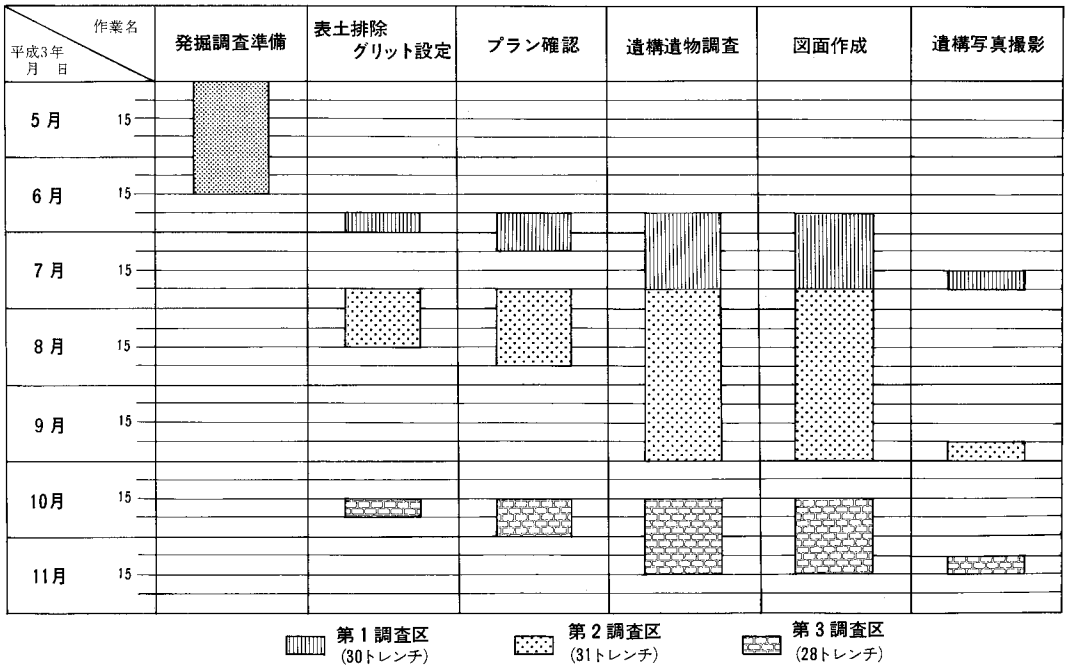


Fig. 5 元総社明神遺跡調査経過図

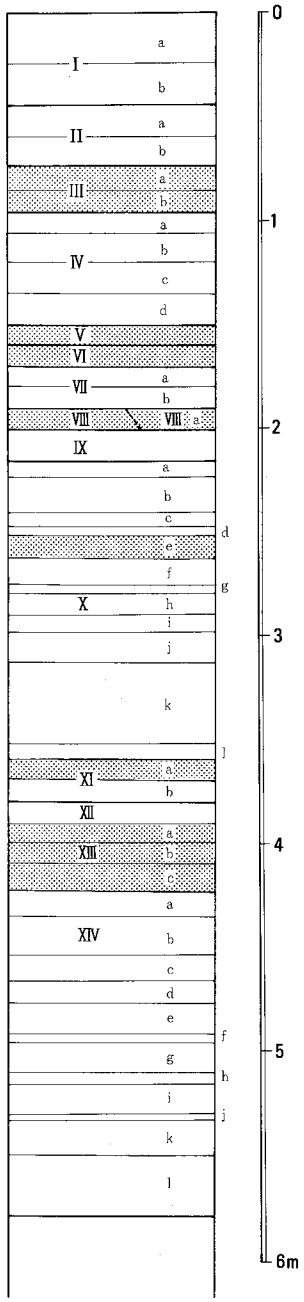
の記載を行い収納した。

2 調 査 経 過

第10年次に当たる今年度の発掘調査は、平成元年6月25日から11月8日までの約4ヶ月にわたり実施された。調査区3ヵ所（第1調査区：30トレンチ、第2調査区：31トレンチ、第3調査区：28トレンチ）、面積1,173㎡である。ただし最初に調査を予定した30トレンチは元総社小学校の校庭に隣接するフェンス部分にあたるため、生徒への配慮や安全対策施設の設置など学校側および区画整理1課との入念な打ち合わせを経て、発掘調査の実施は安全対策施設設置後の6月下旬からと決定した。6月20日より事務所に器材を搬入、周辺地区への挨拶をすませたあと、6月25日より第1調査区の表土掘削を開始した。調査区内東側部分は学校フェンスの基礎が埋設してあったため、地下2m近くまで攪乱を受けており、調査は難航したが、平安時代遺構構築面から住居址2軒と柱穴を検出し、古墳時代遺構構築面からは溝址2条および土坑数基を確認、さらに調査区西側から総社砂層を深く切り込んだ井戸址1基を検出した。7月の下旬には全体写真および埋め戻しを完了、地域住民への調査終了の挨拶をすませ、第2調査区へ移動した。

第2調査区は7月29日の重機による表土掘削を皮きりに調査を開始した。本調査区も住宅密集地であるため第1調査区と同様、安全対策には夜間照明用のチューブ・ライトを使用するなど安全面にはできる限りの配慮を施した。8月中、調査は東西にのびる調査区の西側部分を中心に順調に進んだ。9月からは調査区中央から東側部分にかけての精査に入った。ここは、プラン確認当初みるべき遺構がないとされていた箇所であったが、精査の結果、調査地のほぼ全域が東西に走る大溝と重複していることが判明した。予想外の発見に心躍るものもあったが、その掘り下げに伴う膨大な排土の処理および地域住民への配慮等、住宅密集地での発掘では避けられない問題に直面することになった。しかも、この時期に入り、長雨や度重なる台風の影響を受けたため、その都度ポンプアップによる排水を行い、調査区全体に保護シートを被せるなど、遺構の保護と安全面にも配慮しなければならなかった。そして9月20日、ハイライダーによる遺構全体撮影を行い、9月26日には埋め戻しを完了し、本トレンチの調査を終了した。翌月に入り、ようやく天候も安定してきた10月14日、第3調査区の調査に入ることができた。本調査区は発掘事務所から最も遠いため、現場にプレハブ事務所を設置し、一部発掘器材を搬入しての調査であった。本調査地は、道路建設のためかなりの削平を受けていたが、調査の結果、中世の『蒼海城』関連と思われる溝址1条他を検出できた。これは、昭和62年度に調査した18トレンチのW－4号溝址に接続するものであると推定できる。10月30日、ハイライダーによる遺構全体撮影を実施し、全体測量終了後、11月6日埋め戻しを行い、調査地の引き渡しを行った。そして、地域住民への挨拶をすませ、11月8日、器材の撤収および遺物の運搬を行い、現地での発掘調査をすべて終了した。なお、整理作業は文化財保護課の整理棟で開始し、3月末日には作業を完成させる運びとなった。

Ⅳ　層　　序



Ⅰ　層：a…最近の表・耕作土　b…古い表・耕作土

Ⅱ　層：a…黒褐色粗砂層　b…黒褐色細砂層

Ⅲ　層：Ａｓ－Ｂ　１１０８年

a…火山灰純層　b…軽石純層

Ⅳ　層：平安時代遺構構築面・遺物包含層

a…褐色微砂層　b…褐色細砂層　c…鈍い黄褐色微砂層

d…黒褐色細砂層

Ⅴ　層：Ｈｒ－ＦＰＦ１　鈍い黄褐色粗砂層

Ⅵ　層：Ｈｒ－ＦＡ純層　６世紀初頭　暗灰黄色シルト・砂層

Ⅶ　層：古墳時代遺構構築面・遺物包含層

a…黒褐色細砂層　b…褐色細砂層

Ⅷ　層：Ａｓ－Ｃ純層　４世紀中葉

Ⅷa 層：Ａｓ－Ｃ混土層　黒色微砂層

Ⅸ　層：弥生～縄文時代包含層　黒褐色微砂層

Ⅹ　層：総社砂層　縄文時代に形成

a…鈍い黄橙色シルト層　b…鈍い黄橙色シルト層

c…鈍い黄色粗砂層　d…暗褐色粘土層

e…黒褐色シルト層　セカンダリーのＡｓ－ＹＰを含む

f…鈍い黄色細砂層　g…灰黄色細砂層　h…鈍い黄色粗砂層

i…灰黄色シルト層　j…鈍い黄橙色シルト層　k…暗灰黄色砂層

l…灰黄褐色シルト層

Ⅺ　層：Ａｓ－ｓｊ層　約１１，０００年前

a…暗灰色軽石層　b…黒色粘土層

Ⅻ　層：水性堆積上部ローム層　浅黄色軽石層

XIII 層：Ａｓ－ＹＰ純層　約１３，０００～１４，０００年前

a…鈍い黄橙色軽石層　b…浅黄色粘土層　c…淡黄色軽石層

XIV 層：水性堆積上部ローム層

a…鈍い黄橙色シルト層　b…灰黄色砂・シルト層

c…浅黄色シルト層　d…黄灰色シルト層　e…黄褐色砂層

f…黄灰色シルト層　g…黄褐色細砂層　h…黄灰色シルト層

i…黄褐色細砂層　j…黄灰色シルト層　k…黄褐色粗砂層

l…鈍い黄色粗砂層

Fig. 6　元総社明神遺跡標準土層図

V　調査区の遺構と遺物

1．28トレンチ

（1）概　　観

本トレンチの規模は、南北幅6～10m、東西の長さが約30mで調査面積は約170㎡である。平成元年度に調査したZトレンチの西側に位置し、トレンチ西端より100m程西に行った地点に宮鍋様が所在する。本トレンチは、現況においてすでに大きな削平を受けており総社砂層が露出している状態であったため、この総社砂層を深く掘り込んだ遺構のみの検出にとどまった。そのため確認された遺構は、溝址1条と井戸址1基のみであった。そのうちW－1号溝址は、当初より検出が予想されていたもので、過年度に調査した溝址と接続しさらに西側に延長していくものと思われる。これは長尾氏所有の絵図と照合の結果から『蒼海城』の堀と考えられるものである。

（2）各遺構と遺物

溝　　址

W－1号溝址

位　置　B－1～3G、C－1～3G、D－1～3G、E－1～3G、F－1～3G、G－1～3G、H－1～3G

挿　図　Fig. 7、19、23　　写　真　PL. 1

形状等　本調査区の東西を縦断しており、総延長25mの調査を行った。上部が削平を受けているため、確認面での規模は上幅が最大で2.25m、下幅が最大0.94m、深さは平均1.20m程である。断面形は逆台形を呈する。西から東に向い11cmの比高を持って延びている。

重　複　I－1号井戸址と重複しているが、本溝址の方が先行する。

遺　物　総点数115点程で、図示したものはカワラケ1点、擂鉢1点、土製円盤1点、宝篋印塔1点、内耳鍋1点、瓦5点がある。

備　考　本溝址は、昭和62年度18トレンチ・W－1号溝址、もしくはW－4号溝址、平成元年度25トレンチ・W－1号溝址、同じくZトレンチ・W－1号溝址と接続するものである。蒼海城に関係する溝であると考えられる。

井　戸　址

I－１号井戸址

位　置　C－1、2G　　挿　図　Fig. 7、23　　写　真　PL. 1

形状等　南側の一部分がW－１号溝址を切って作られている。形状はほぼ垂直に掘り込まれており、断面形は円筒状である。確認面からの規模は上幅東西径1.85m、南北径1.92m、下幅東西径1.64m、南北径1.52mでほぼ円形を呈する。確認面からの深さは2.4mで底部に石が敷き詰められている。

遺　物　出土遺物は僅かであったが、覆土中より出土した石臼１点と宝篋印塔２点を図示した。

2．30トレンチ

（1）概　　観

本トレンチは、元総社小学校校庭南側に隣接し、南北幅４m、東西の長さが32m、調査面積は約120㎡である。西側の一部分は地域住民の地下埋設物が付設されている関係上調査は部分的な試掘を行い確認した。また、調査区南側は校庭のフェンスに使用されていた土台が等間隔で埋設されていたため除去した後調査を開始した。その結果住居址２軒、溝址２条、井戸址１基、土坑10基が検出された。D－５号土坑は、建物址の柱跡と思えるが調査範囲が狭いため対応する柱穴は検出できず、今回は単独の土坑として扱った。尚、本トレンチ北側に隣接する『元総社小学校校庭遺跡』は、昭和36年群馬大学の尾崎喜左雄博士を中心に調査され、東西13.20m（桁行５間）、南北６m（梁間２間）の建築遺構が検出され、国府調査の発端となった場所でもある。

（2）各遺構と遺物

住　居　址

H－１号住居址

位　置　H－1G　　標　高　112.45m　　挿　図　Fig. 9

写　真　PL. 2　　調査面積　(2.18)㎡　　方　位　E－10°－S

形　状　本調査区の東端で検出されたが、発掘区域外になるため全体の形状は確認できず、調査は南壁と西壁の一部を行うことになった。そのため確認規模は南壁1.60m、西壁1.62mで調査面積は2.18㎡である。平面形は南壁と西壁の一部が明らかになったにすぎないため推測になるが、両壁とも直線的に掘られ壁はほぼ直角に交わることから、方形のプラ

ンを呈していたと想定できる。確認面からの壁高は平均10㎝で浅い。壁は平均65°の角度をもって立ち上がっている。また、調査区域内には竈が検出されなかったが、東壁側の床面に焼土や炭化物が多くみられることから、調査区域外の東壁に竈を有しているものと思われる。

床　面　床面はほぼ平坦で、比較的柔らかく一部堅い面が検出された。

覆　土　全体で4層に分けられる。1～3層はＡｓ－Ｂ等を含む褐色をした細砂層で、4層は焼土粒と炭化物が多く認められた。

遺　物　総点数96点程で、土師器の小破片が殆どで接合・復元には至らなかった。

Ｈ－2号住居址

位　置　Ｅ－1Ｇ、Ｆ－1Ｇ　標　高　111.50ｍ　挿　図　Fig. 9、20

写　真　ＰＬ. 3　調査面積　(8.19)㎡　方　位　Ｎ－87°－Ｅ

形　状　調査区域外になるため北側部分が検出できなかったが、確認面においての形状は長軸方向が4.20ｍ、短軸方向が2.12ｍである。推測になるが、平面プランは東西に長い長方形、あるいはほぼ正方形を呈していたと思われる。また、東壁の中央より南に偏在して竈を有している。本住居址は確認面においてすでに削平を受けており壁高は平均5㎝足らずしか残存していなかった。

床　面　竈周辺に2～3㎝の貼り床が施され、全体的に床面はほぼ平坦であった。

覆　土　削平を受けているため、Ａｓ－Ｂをわずかに含む黒褐色土が2層確認されたにとどまった。

竈　址　東壁の中央よりやや南に位置し、壁面より外側にある。確認した規模は全長88㎝、幅59㎝、炊き口部幅53㎝である。削平を受けているため残存状況は不良であるが、支柱石と構築材に使用していたと思われる砂質凝灰岩が数点検出された。

掘り方　すでに確認面において、一部貼り床面が破壊されていて、ローム層上面が露出しており、やや不明瞭であったが、南壁隅に2基の土坑を確認した。規模はD_1・長径126㎝×短径98㎝、深さ18㎝、D_2・長径84㎝×短径72㎝、深さ21㎝である。

重　複　Ｄ－3、5号土坑より新しく、6、8、10号土坑より古い。

遺　物　出土総数は172点程で、高台椀2点（うち⑥は内面黒色処理）とカワラケ1点、瓦2点を図示した。

備　考　柱穴、貯蔵穴、周溝等は検出されなかった。

溝　　址

Ｗ－1号溝址

位　置　F－1～2G、G－1～2G　　挿　図　Fig. 10、20、23　　写　真　PL. 2

形状等　本調査区の東側で検出されほぼ南北に走る。規模は上幅が最大で2.43m、下幅が最大2.35m、深さは平均35cm程である。断面形は、全体的にほぼ逆台形を呈する。北から南に向い13cmの比高を持ってのびている。

重　複　W－2号溝址、D－1号土坑と重複するが、いずれも本溝址の方が先行する。

遺　物　総点数45点程で、図示できたものは坏1点と砥石1点、瓦1点がある。

W－2号溝址

位　置　G－1～2G、H－1G　　挿　図　Fig. 10　　写　真　PL. 2

形状等　固い総社砂層を掘り込んで作られており、本調査区の北東際より西に向かって走り、4.50m地点でほぼ直角に南に向かってのびており総延長7.45mの調査ができた。確認面での規模は上幅が平均で0.60～0.45m、下幅も平均して0.30～0.25m、深さは0.34～0.25mで、断面形はきっちりした逆台形を呈している。

重　複　H－1号住居址、D－2号土坑より先行し、W－1号溝址より新しい。

遺　物　出土総数は582点程あるが、土師器の小破片が殆どで図示できたものは瓦1点である。

井　戸　址

I－1号井戸址

位　置　A－1、2G　　挿　図　Fig. 11、20、23　　写　真　PL. 3

形状等　調査区の西側で検出され、一部調査区域外になるため全体の形状は確認できず、調査は北側半分を行うことになった。そのため確認規模は上幅東西径1.75m、南北径0.80mでほぼ円形を呈するものと推定される。断面形は総社砂層をほぼ垂直に掘り込んでおり、底部に幅0.50m程のくぼみが見られる。確認面からの深さは2.4mである。

遺　物　総点数106点で、図示したものは高台椀1点、坏1点、カワラケ1点、砥石1点、瓦3点がある。

土　　坑

D－1号土坑

位　置　F－1、2G

挿　図　Fig. 11　　写　真　PL. 2　　面　積　0.95㎡

形状等　長径1.38m、短径0.84mで長方形を呈しているが、東壁に幅0.50m程の半円状に突出した部分がある。確認面よりの深さは0.25mを測り、床面はほぼ平坦で総社砂層の固い床

が検出された。

D－2号土坑

位　置　G－1G、H－1G

挿　図　Fig. 11　　写　真　PL. 2　　調査面積　(0.92)㎡

形状等　北側部分が調査区域外のため、全体の形状は確認できなかったっが、検出できた規模は、長径1.54m、短径1.04mで、方形を呈するものと推定される。床面は平坦で確認面からの深さは0.14mを測る。

D－3号土坑

位　置　E－1G、F－1G

挿　図　Fig. 11、23　　写　真　PL. 3　　面　積　2.01㎡

形状等　長径1.67m、短径1.22mの楕円形を呈する。断面形はやや斜度を持ちながら掘り込まれており、底部のほぼ中央部にさらに径0.05m程のくぼみが見られる。深さは0.35mである。

重　複　D－5号土坑と重複しており本土坑の方が先行する。

遺　物　総点数140点で、図示したものは土製品1点と瓦1点がある。

D－4号土坑

位　置　H－1G、H－2G

挿　図　Fig. 12　　写　真　PL. 2　　調査面積　(0.24)㎡

形状等　調査区域の東端に位置し、調査は西側半分のみであった。そのため確認規模は長径0.54m、短径0.53mで、ほぼ円形を呈していると思われる。床面は平坦で断面形はほぼ垂直に掘り込まれており、確認面からの深さは0.12mを測る。

D－5号土坑

位　置　E－1G

挿　図　Fig. 12　　写　真　PL. 3　　面　積　0.64㎡

形状等　確認規模は長径0.97m、短径0.82mのほぼ円形を呈している。断面形は、やや斜度を有して掘り込まれており、総社砂層の固い壁が検出された。床面も平坦で、確認面からの深さは0.83mである。

重　複　D－3号土坑と重複しており本土坑の方が新しい。

備　考　全体で6層に分けられ1～2層はAs－Bが多量に検出された。また、本遺構は建物址の柱穴になる可能性がある。

D－6号土坑

位　置　E－1G

挿　図　Fig. 12　　写　真　PL. 4　　調査面積　(0.77)㎡

形状等　調査区域外になるため、南側部分の調査のみを行った。そのため確認規模は長径1.15m、短径0.80mである。ほぼ垂直に掘り込まれており床面はやや丸味を帯びる。確認面からの深さは0.35mを測る。

D－7号土坑

位　置　D－1、2G

挿　図　Fig. 12　　写　真　PL. 4　　面　積　1.88㎡

形状等　楕円形を呈し、長径1.78m、短径1.40mを測る。総社砂層を垂直に掘り込まれて作られている。また、床面には大小2個の円形をしたくぼみが見られる。確認面からの深さは0.35mである。

D－8号土坑

位　置　E－1G

挿　図　Fig. 12　　写　真　PL. 4　　調査面積　(0.21)㎡

形状等　長径0.61m、短径0.43mの円形を呈する。断面形は垂直に掘り込まれている。確認面からの深さは0.20mを測る。

重　複　H－2号住居址と重複している。

D－9号土坑

位　置　B－1G、C－1G

挿　図　Fig. 12、23　　写　真　PL. 4　　調査面積　(0.68)㎡

形状等　平面形はほぼ円形を呈する。長径1.00m、短径0.85mを測る。断面形は複雑に凹凸がみられ、床面においては西側に幅0.40m、深さ0.45mほどのくぼみがある。確認面からの深さは1.28mである。

遺　物　総点数66点程で、図示したものは宝篋印塔2点がある。

D－10号土坑

位　置　F－1G　　挿　図　Fig. 12、21　　写　真　PL. 4　　面　積　1.11㎡

形状等　長径0.81m、短径0.80mの整った円形を呈する。断面形は円筒状でほぼ垂直に掘り込まれている。確認面からの深さは0.17mで、床面もほぼ平坦である。

遺　物　出土した遺物は僅かであったが、図示したものは水瓶1点がある。

3．3 1トレンチ

（1）概　　観

本トレンチの規模は南北幅5～10m、東西の長さ55mで調査面積は約300㎡である。元総社小学校と天台宗徳蔵寺の中間に位置し、北西には総社神社が隣接する。住宅密集地であることから2箇所生活用の通路を確保し調査を進めた。本調査で確認された遺構は住居址1軒、溝址2条、井戸址5基、土坑58基である。調査区ほぼ中央に検出されたⅠ－4号井戸址からは16世紀前半の天目茶碗と香炉が出土した。また、総社砂層を深く掘り込んだW－2号溝址が検出された。本溝址はさらに調査区外に延び、東西に延長していくものと思われその性格は今後の研究課題である。

（2）各遺構と遺物

住　居　址

H－1号住居址

位　置　H－2G　　標　高　112.30m　　挿　図　Fig. 13、21

写　真　PL. 5　　調査面積　(4.46)㎡　　方　位　N－88°－E

形　状　発掘区域外になるため全体の形状は確認できず、調査は南壁側と東壁及び西壁側の一部のみ行うことになった。そのため確認規模は東西方向2.56m、確認できた南北方向で1.65mで調査面積は4.46㎡である。平面形は南壁と東壁、西壁の一部が明らかになったにすぎないため推測になるが、南東コーナー、南西コーナー共に一直線に掘られ壁はほぼ直角に交わることから、方形のプランを呈していたと想定できる。また、確認面からの壁高は平均7㎝程で非常に浅い。また壁は平均65°の角度をもって立ち上がり比較的明瞭に検出できた。

床　面　床面はほぼ平坦で、部分的に堅い面が検出された。また、遺構南西部の床面に2個の礫が埋め込まれた状態で確認された。

覆　土　全体で3層に分けられる。自然堆積で埋没したと考えられるが、上部は攪乱を受けている。土層断面で、1～2層はAs－B等を含む暗褐色をした細砂層で、3層は総社砂層ブロックと炭化物を多く含んでいる。

竈　址　調査区域内には検出されなかったが、東壁部分に少量の灰と炭化物が確認された。

重　複　W－2号溝址と重複関係をもっているが、本住居址の方が先行する。

遺　物　総点数81点程で、図示できたものは甕1点である。

溝　　址

W－1号溝址

位　置　A－2G～B－3G　挿　図　Fig. 13　　写　真　PL. 5、6

形状等　本調査区の西側で検出され、ほぼ南北に走る。規模は上幅が最大で0.70m、狭い所では0.45m程、下幅が最大0.62m、深さは平均0.25mである。断面形は、全体的にほぼ逆台形を呈する。

重　複　I－1号井戸址、D－1、19、22、32、33、34、35、43、52号土坑と重複しているが、いずれも本溝址の方が先行する。

W－2号溝址

位　置　G－2G～N－3G　挿　図　Fig. 8、13、22、25　写　真　PL. 5、7、8

形状等　総社砂層を深く掘り込んで作られており、本調査区の中央部より東側にかけて総延長約30mの長さまで検出できた。上幅は最大で2.7～3.1m、下幅は最大で0.8～1.2m、深さは確認面より深い所で1.9～2.1mで、断面形はきっちりした逆台形を呈している。また、西から東に向い0.60mの比高を持ってのびている。

重　複　H－1号住居址、I－4、5号土坑と重複関係を持っているが本溝址は、H－1号住居址より新しく、I－4、5号土坑に先行する。

遺　物　総点数582点で、図示したものは坏1点、皿1点、敲石1点がある。

井　戸　址

I－1号井戸址

位　置　A－3G　　挿　図　Fig. 14　　写　真　PL. 6

形状等　確認面での平面形は整った円形を呈している。規模は、上幅東西径0.79m、南北径0.80m、下幅東西径0.77m、南北径0.80m、深さ2.16mを測る。断面形はほぼ直線的に落ち込み、円筒状をなし底部には人為的と思われる自然石が敷かれていた。

重　複　W－1号溝址と重複しているが、本井戸址の方が新しい。

遺　物　総点数240点程で、図示したものは覆土中より出土した瓦1点である。

I－2号井戸址

位　置　B－1、2G　　挿　図　Fig. 14、21、25　　写　真　PL. 6

形状等　調査区の最西端で検出され、一部調査区域外になるため全体の形状は確認できず調査は東側半分程を行うことになった。そのため確認規模は上幅南北径2.10mでほぼ円形を呈

すると思われる。断面形は緩やかに斜度を持ちながら総社砂層を掘り込んでいるが、土層崩落等の危険性があるため、地表下2.7mまでしか調査できなかった。

重　複　W－1号溝址と一部重複しているが、本井戸址の方が新しい。

遺　物　総点数157点で、図示できたものはカワラケ1点、土製円盤1点、石臼1点、板碑1点、瓦2点である。

Ⅰ－3号井戸址

位　置　B－2G、C－2G　挿　図　Fig. 14、21、25　　写　真　PL. 6

形状等　確認面での規模は、上幅東西径1.30m、南北径1.07m、下幅東西径1.22m、南北径1.15mで平面形はほぼ円形を呈する。深さは1.80mを測る。断面形はほぼ垂直に落ち込んでいるが、1.1m付近で東側断面にえぐれがみられる。

遺　物　総点数7点で、図示したものは、擂鉢1点、石臼1点が在る。

Ⅰ－4号井戸址

位　置　F－2、3G、G－2、3G

挿　図　Fig. 15、21、22、24、25　　写　真　PL. 7

形状等　調査区域外になるため西側半分のみの調査で、全体の形状は確認できなかったが、検出できた規模は上幅南北径2.80mで、ほぼ円形を呈していたものと推定される。また、断面形は確認面より20cm付近から大きくえぐりこむ形で掘り込まれている。しかし、崩落等の危険性から完掘できなかったため、深さは明らかでない。

遺　物　総点数456点で、図示したものは口絵3の天目茶碗1点、香炉1点、高台皿1点、カワラケ1点、坏4点、石臼1点、砥石2点、敲石2点、板碑1点、打製石斧1点、瓦2点がある。

Ⅰ－5号井戸址

位　置　J－2、3G　　挿　図　Fig. 15、24、25　　写　真　PL. 8

形状等　調査区のほぼ中央部で検出された。確認面での規模は上幅東西径2.4m、南北径2.2m、下幅東西径1.5m、南北径1.9mで平面形はほぼ円形を呈する。総社砂層の固い地盤を掘り抜いて作られており、断面形は緩やかに斜度をもちながら落ち込んでいる。確認面からの深さは2.02mである。

重　複　W－2号溝址と重複しているが、本井戸址の方が新しい。

遺　物　総点数20点程であるが、五輪塔3点（⑫空輪、⑬水輪、㉙空輪）、石臼2点、敲石2点、凹石1点、砥石1点が図示できた。

土　　坑

D－1号土坑

位　置　A－3G　　挿　図　Fig. 16　　写　真　PL. 5　　面　積　0.10㎡

形状等　長軸方向0.40m、短軸方向0.27mの不定形を呈し、確認面よりの深さは0.16mを測る。床面は凹凸がみられ、総社砂層の固い床が検出された。

重　複　W－1号溝址とD－16号土坑と重複している。

D－2号土坑

位　置　E－2G　　挿　図　Fig. 16、22　　写　真　PL. 5　　面　積　0.26㎡

形状等　長径0.65m、短径0.54mの不定形を呈する。床面はほぼ平坦で確認面からの深さは0.26mを測る。

遺　物　図示できたものに、古銭1点がある。

D－3号土坑

位　置　E－2G　　挿　図　Fig. 16　　写　真　PL. 5　　面　積　(0.08)㎡

形状等　長径0.37m、短径0.25mの楕円形を呈する。断面形はやや斜度を持ちながら掘り込まれており、ほぼ15cm付近の中央部にさらに径0.10m程のくぼみが見られる。深さは0.24mである。

D－4号土坑

位　置　E－2G　　挿　図　Fig. 16、22　　写　真　PL. 5　　面　積　0.37㎡

形状等　方形を呈し、長径0.85m、短径0.63mである。床面はほぼ平坦で総社砂層の固い床である。断面形は垂直に掘り込まれており、確認面からの深さは0.35mを測る。

遺　物　出土した遺物は僅かであったが土師坏1点が図示できた。

D－5号土坑

位　置　D－2G　　挿　図　Fig. 16　　写　真　PL. 5　　面　積　0.06㎡

形状等　ほぼ円形を呈し、長径0.33m、短径0.23mである。床面は、円形の掘り込みを有し、確認面からの深さは0.12mである。

D－6号土坑

位　置　D－2G　　挿　図　Fig. 16　　写　真　PL. 5　　面　積　0.07㎡

形状等　長径0.35m、短径0.31mの円形を呈する。ほぼ垂直に掘り込まれており、床面はやや丸みを帯びる。確認面からの深さは0.11mを測る。

D－7号土坑

位　置　D－2G　　挿　図　Fig. 16　　写　真　PL. 5　　面　積　0.10㎡

形状等　ほぼ円形を呈し、長径0.38m、短径0.34mを測る。総社砂層を円筒状に掘り込まれて作られている。確認面からの深さは0.37mである。

D－8号土坑

位　置　D－2G　　挿　図　Fig. 16　　写　真　PL. 5　　面　積　0.12㎡

形状等　長径0.40m、短径0.35mの円形を呈する。断面形は垂直に掘り込まれている。確認面からの深さは0.51mを測る。

重　複　D－45号土坑と重複している。

D－9号土坑

位　置　D－2G　　挿　図　Fig. 16　　写　真　PL. 5　　面　積　0.12㎡

形状等　楕円形を呈する。長径0.46m、短径0.30mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれており、床面には凹凸がみられる。確認面からの深さは0.28mである。

D－10号土坑

位　置　B－1、2G、C－1、2G

挿　図　Fig. 16　　写　真　PL. 5　　面　積　1.10㎡

形状等　長径1.21m、短径0.96mの長方形を呈する。断面形は円筒状で垂直に掘り込まれている。確認面からの深さは0.44mで、床面もほぼ平坦である。

重　複　D－21号土坑と重複している。

D－11号土坑

位　置　B－2G　　挿　図　Fig. 16　　写　真　PL. 5　　面　積　0.10㎡

形状等　長径0.40m、短径0.34mのほぼ円形を呈し、確認面よりの深さは0.63mを測る。円筒状に掘り込まれ、床面も平坦である。

重　複　D－14号土坑と重複している。

D－12号土坑

位　置　B－1、2G

挿　図　Fig. 16　　写　真　PL. 5　　面　積　0.79㎡

形状等　長径1.35m、短径0.67mの隅丸方形を呈する。床面はほぼ平坦で確認面からの深さは0.17mを測る。

重　複　D－53号土坑と重複している。

D－13号土坑

位　置　B－2G　　挿　図　Fig. 16　　写　真　PL. 5　　面　積　0.20㎡

形状等　長径1.25m、短径0.78mの隅丸方形を呈する。断面形はほぼ垂直に掘り込まれ床面は平坦であるが、底部に2箇所径0.20m程の円形の掘り込みがみられる。確認面よりの深さは0.23mである。

D－14号土坑

位　置　B－2G　　挿　図　Fig. 16　　写　真　PL. 5　　面　積　0.16㎡

形状等　不定形を呈し、長径0.62m、短径0.25mである。床面はほぼ平坦で総社砂層の固い床である。断面形は垂直に掘り込まれており、確認面からの深さは0.62mを測る。

重　複　D－11号土坑と重複している。

D－15号土坑

位　置　A－3G　　挿　図　Fig. 16　　写　真　PL. 5　　面　積　0.10㎡

形状等　楕円形を呈し、長径0.48m、短径0.27mである。床面は、凹凸がみられ確認面からの深さは0.12mである。

重　複　D－16号土坑と重複している。

D－16号土坑

位　置　A－3G　　挿　図　Fig. 16　　写　真　PL. 5　　面　積　0.23㎡

形状等　長径0.58m、短径0.55mの整った円形を呈する。ほぼ垂直に掘り込まれており、床面は平坦である。確認面からの深さは0.15mを測る。

重　複　D－1号土坑とD－15号土坑と重複関係にある。

D－17号土坑

位　置　B－3G　　挿　図　Fig. 17　　写　真　PL. 5　　面　積　0.14㎡

形状等　平面形はほぼ円形を呈し、長径0.45m、短径0.40mを測る。床面は凹凸がみられ、確認面からの深さは0.20mである。

D－18号土坑

位　置　B－3G　　挿　図　Fig. 17　　写　真　PL. 5　　面　積　0.12㎡

形状等　長径0.43m、短径0.34mのほぼ円形を呈する。断面形は垂直に掘り込まれているが、床

面は凹凸がある。確認面からの深さは0.16mを測る。

D－19号土坑

位　置　A－2G　　挿　図　Fig. 17　　写　真　PL. 5　　面　積　0.06㎡

形状等　円形を呈する。長径0.29m、短径0.25mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれており、床面もほぼ平坦である。確認面からの深さは0.27mである。

重　複　W－1号土坑と重複している。

D－20号土坑

位　置　B－1、2G

挿　図　Fig. 17　　写　真　PL. 5　　面　積　0.07㎡

形状等　長径0.30m、短径0.27mの円形を呈する。断面形は円筒状で垂直に掘り込まれている。確認面からの深さは0.16mで、床面もほぼ平坦である。

D－21号土坑

位　置　B－1、2G

挿　図　Fig. 17　　写　真　PL. 5　　面　積　1.42㎡

形状等　長径0.40m、短径0.34mのほぼ長方形を呈し、確認面よりの深さは0.41mを測る。緩やかに斜度を持ちながら掘り込まれており、床面も平坦である。

重　複　D－10号土坑と重複している。

D－22号土坑

位　置　B－2G　　挿　図　Fig. 17　　写　真　PL. 5　　面　積　1.12㎡

形状等　長径1.40m、短径1.00mの隅丸方形を呈する。床面は凹凸がみられ、北壁隅にくぼみがみられる。確認面からの深さは0.20mを測る。

重　複　W－1号溝址とD－49号土坑と重複している。

D－23号土坑

位　置　B－2G　　挿　図　Fig. 17　　写　真　PL. 5　　面　積　0.25㎡

形状等　長径0.62m、短径0.52mで平面形は円形を呈する。断面形はほぼ垂直に掘り込まれているが床面は凹凸がみられる。確認面よりの深さは0.17mである。

重　複　D－24号土坑と重複している。

D－24号土坑

位　置　B－2G　　挿　図　Fig. 17　　写　真　PL. 5　　面　積　0.08㎡

形状等　円形を呈し、長径0.32m、短径0.22mである。床面は凹凸がみられ、総社砂層の固い床である。確認面からの深さは0.31mを測る。

重　複　D－23号、25号土坑と重複している。

D－25号土坑

位　置　B－2G　　挿　図　Fig. 17　　写　真　PL. 5　　面　積　0.08㎡

形状等　楕円形を呈し、長径0.38m、短径0.30mである。垂直に掘り込まれ床面も平坦である。断面形は円筒状をなし、確認面からの深さは0.58mである。

重　複　D－24号土坑と重複している。

D－26号土坑

位　置　B－3G　　挿　図　Fig. 17　　写　真　PL. 5　　面　積　0.23㎡

形状等　長径0.59m、短径0.30mの円形を呈する。やや斜度を持ちながら掘り込まれており、床面は平坦である。北壁に凹凸がみられる、確認面からの深さは0.52mを測る。

D－27号土坑

位　置　B－3G　　挿　図　Fig. 17　　写　真　PL. 5　　面　積　0.06㎡

形状等　平面形はほぼ円形を呈し、長径0.27m、短径0.23mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦である。確認面からの深さは0.14mである。

D－28号土坑

位　置　B－3G　　挿　図　Fig. 17　　写　真　PL. 5　　面　積　0.05㎡

形状等　長径0.31m、短径0.24mの楕円形を呈する。断面形はほぼ垂直に掘り込まれており、床面はやや丸味を帯びる。確認面からの深さは0.19mを測る。

D－29号土坑

位　置　B－3G　　挿　図　Fig. 17　　写　真　PL. 5　　面　積　0.09㎡

形状等　ほぼ円形を呈する。長径0.38m、短径0.32mを測る。垂直に掘り込まれており、床面もほぼ平坦である。確認面からの深さは0.42mである。

D－30号土坑

位　置　B－3G　　挿　図　Fig. 17　　写　真　PL. 5　　面　積　0.14㎡

形状等　長径0.60m、短径0.24mの不定形を呈する。床面に凹凸がみられ中央部に段差がある。確認面からの深さは0.10mである。

D－31号土坑

位　置　B－2G　　挿　図　Fig. 17　　写　真　PL. 5　　面　積　0.07㎡

形状等　長径0.31m、短径0.29mの整った円形を呈し、確認面よりの深さは0.18mを測る。緩やかに斜度を持ちながら掘り込まれており、床面に凹凸がみられる。

D－32号土坑

位　置　A－2G、B－2G

挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.19㎡

形状等　長径0.67m、短径0.32mの不定形を呈する。断面形は、北壁側にくびれがみられる。床面はほぼ平坦で、確認面からの深さは0.25mを測る。

重　複　W－1号溝址と重複している。

D－33号土坑

位　置　A－3G　　挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.14㎡

形状等　長径0.52m、短径0.30mで平面形は楕円形を呈する。断面形はD－32号土坑と同様に北壁側にくびれ部分がある。床面は平坦で、確認面よりの深さは0.35mである。

重　複　W－1号溝址と重複している。

D－34号土坑

位　置　B－1G　　挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.05㎡

形状等　ほぼ円形を呈し、長径0.29m、短径0.23mである。垂直に掘り込まれており断面形は円筒状をなす。床面も平坦で確認面からの深さは0.46mを測る。

重　複　W－1号溝址と重複している。

D－35号土坑

位　置　B－1、2G

挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.05㎡

形状等　円形を呈し、長径0.28m、短径0.22mである。垂直に掘り込まれ床面も平坦である。断面形は円筒状をなし、確認面からの深さは0.66mである。

重　複　W－1号溝址と重複している。

D－36号土坑

位　置　A－2G　　挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.17㎡

形状等　長径0.65m、短径0.40mの不定形を呈する。やや斜度を持ちながら掘り込まれており、床面はほぼ平坦である。確認面からの深さは0.23mを測る。

重　複　東壁部分にD－37号土坑が重複している。

D－37号土坑

位　置　A－2G　　挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.06㎡

形状等　平面形はほぼ円形を呈し、長径0.35m、短径0.24mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれている。床面はやや丸味を帯びている。確認面からの深さは0.45mである。

重　複　D－36号土坑と重複している。

D－38号土坑

位　置　D－2G　　挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.10㎡

形状等　長径0.42m、短径0.17mの不定形を呈する。床面は凹凸がみられる。確認面からの深さは0.16mを測る。

D－39号土坑

位　置　D－2G　　挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.12㎡

形状等　ほぼ円形を呈する。長径0.42m、短径0.38mを測る。断面形は北壁側に段差がみられ、床面はやや丸味を帯びている。確認面からの深さは0.19mである。

D－40号土坑

位　置　C－2G　　挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.06㎡

形状等　長径0.30m、短径0.29mの整った円形を呈する。垂直に掘り込まれており、断面形は円筒状をなす。床面も平坦である。確認面からの深さは0.35mである。

D－41号土坑

位　置　C－2G　　挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.05㎡

形状等　長径0.27m、短径0.22mのほぼ円形を呈し、確認面よりの深さは0.18mを測る。垂直に掘り込まれており、床面は平坦である。

D－42号土坑

位　置　B－2G　　挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.05㎡

形状等　長径0.30m、短径0.23mのほぼ円形を呈する。断面形は垂直に掘り込まれており、円筒状である。床面もほぼ平坦で、確認面からの深さは0.43mを測る。

D－43号土坑

位　置　A－2G　　挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.06㎡

形状等　長径0.30m、短径0.25mで平面形は円形を呈する。ほぼ垂直に掘り込まれている。床面は平坦で、確認面よりの深さは0.38mである。

重　複　W－1号溝址と重複している。

D－44号土坑

位　置　C－2G　　挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.05㎡

形状等　楕円形を呈し、長径0.40m、短径0.25mである。垂直に掘り込まれており断面形は円筒状をなす。床面も平坦で確認面からの深さは0.16mを測る。

D－45号土坑

位　置　D－2G　　挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.09㎡

形状等　不定形を呈し、長径0.42m、短径0.22mである。ほぼ垂直に掘り込まれ床面が丸味を帯びる。確認面からの深さは0.24mである。

重　複　D－8号土坑と重複している。

D－46号土坑

位　置　C－2G　　挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.05㎡

形状等　長径0.28m、短径0.22mの楕円形を呈する。やや斜度を持ちながら掘り込まれており、床面はほぼ平坦である。確認面からの深さは0.08mを測る。

D－47号土坑

位　置　D－2、3G

挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.05㎡

形状等　平面形は楕円形を呈し、長径0.29m、短径0.21mを測る。床面はやや丸味を帯びており、断面形も弧を描いている。確認面からの深さは0.15mである。

D－48号土坑

位　置　C－2G　　挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.08㎡

形状等　長径0.35m、短径0.28mのほぼ円形を呈する。断面形は円筒状をなし、ほぼ垂直に掘り

込まれている。確認面からの深さは0.52mを測る。

D－49号土坑

位　置　B－2G　　挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.11㎡

形状等　ほぼ円形を呈する。長径0.43m、短径0.38mを測る。ほぼ垂直に作られており、断面形は円筒状である。床面も平坦である。また、確認面からの深さは0.35mである。

重　複　D－22号土坑と重複している。

D－50号土坑

位　置　B－2G　　挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.09㎡

形状等　長径0.44m、短径0.24mの楕円形を呈する。緩やかに斜度を持って掘り込まれており、床面はほぼ平坦である。確認面からの深さは0.55mである。

D－51号土坑

位　置　B－2G　　挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.07㎡

形状等　長径0.32m、短径0.30mの整った円形を呈し、確認面よりの深さは0.50mを測る。ほぼ垂直に掘り込まれており、床面も平坦で断面形は円筒状である。

D－52号土坑

位　置　A－3G、B－3G

挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.07㎡

形状等　長径0.38m、短径0.25mのほぼ円形を呈する。断面形は南壁は垂直に掘り込まれているが、北壁側にえぐれが見られる。床面も凹凸があり、確認面からの深さは0.48mを測る。

重　複　W－1号溝址と重複している。

D－53号土坑

位　置　A－2G、B－2G

挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.08㎡

形状等　長径0.35m、短径0.30mで平面形はほぼ円形を呈する。ほぼ垂直に掘り込まれているが、床面はやや段差が見られる。確認面よりの深さは0.50mである。

重　複　D－12号土坑と重複している。

D－54号土坑

位　置　C－2G　　挿　図Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.04㎡

形状等　円形を呈し、長径0.25m、短径0.22mである。ほぼ垂直に掘り込まれており床面も平坦である。確認面からの深さは0.22mを測る。

D－55号土坑

位　置　C－2G　　挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.06㎡

形状等　楕円形を呈し、長径0.42m、短径0.22mである。D－54号土坑と同様にほぼ垂直に掘り込まれており、床面も平坦である。確認面からの深さは0.30mである。

D－56号土坑

位　置　C－2G　　挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.07㎡

形状等　長径0.34m、短径0.24mの楕円形を呈する。やや斜度を持ちながら掘り込まれており、床面は丸味を帯びている。確認面からの深さは0.51mを測る。

D－57号土坑

位　置　A－3G　　挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.11㎡

形状等　調査区域外になるため全体の形状は確認できなかったが、ほぼ円形を呈すると思われる。床面は平坦で、やや斜度を持って掘り込まれている。確認面からの深さは0.58mである。

D－58号土坑

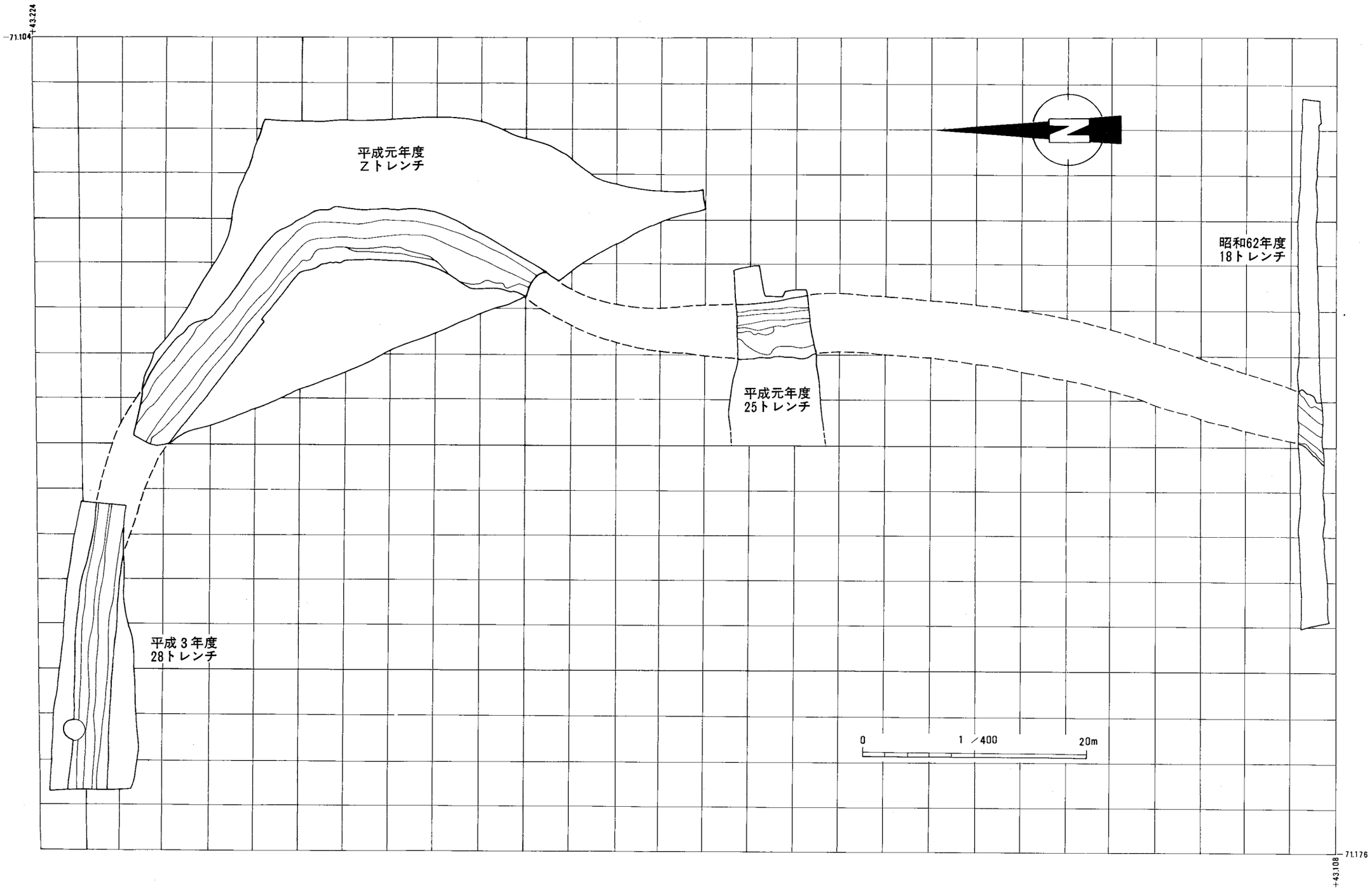
位　置　M－3G、N－3G

挿　図　Fig. 18　　写　真　PL. 5　　面　積　0.29㎡

形状等　長径0.63m、短径0.58mのほぼ円形を呈する。床面は平坦で、西壁よりに幅0.20mの一段下がった円形の掘り込みが見られる。確認面からの深さは0.32mを測る。

Ⅵ　ま　と　め

本遺跡地周辺は推定上野国府域として古代上野の政治的・文化的中心地として注目を浴び、中世にはこの国府跡を利用して蒼海城が築かれている。すでに数多くの遺跡が発掘調査され、しだいに地域の歴史が明らかになりつつある。元総社明神遺跡第10年次の調査では南北1㎞の間に散在する3ケ所のトレンチを調査した。その結果、蒼海城と関連をもつと思われる溝址、井戸址、平安時代の住居址、土坑等が検出され、先人の生活の営みを知るうえで貴重な資料が得られた。以下、各トレンチごとに若干の所見を述べ本報告書のまとめとしたい。



付図１　元総社明神遺跡18・25・Ｚ・28トレンチ整合図

1．２８トレンチ：W－１号溝址について

『元総社明神遺跡Ⅷ』で蒼海城に関連する溝として平成元年度に検出された25トレンチW－１号溝址及びZトレンチW－１号溝址、昭和62年度18トレンチW－１号溝址もしくはW－４号溝址に接続していくと述べられている。ここではさらに本調査区で検出された28トレンチW－１号溝址もそれまでに検出された溝址と接続関係を有し同一のものであるのか比較し考えてみたい。まず各トレンチの全体図を整合し（付図．１）座標から関連する溝の位置関係を調べてみると、18トレンチW－１号溝址を基点にするとほぼ北に向かい25トレンチW－１号溝址、ZトレンチW－１号溝址へと接続し、X＝＋43.200、Y＝－71.120の地点で北西に向きを変え本トレンチW－１号溝址へと続いて行くのが解る。図面整合による位置関係からは本溝址の接続関係も自然で同一の遺構であるように思える。また、図面上において本溝址は方位をN－86°－Eにとりほぼ東西に走ることから、さらに西側に延長して行くものと推定される。次に各溝址の形状と覆土を調べてみると（付図．２）、各調査区共、削平の程度でそれぞれ確認面が異なるため上幅と深さは一様でないが、下幅を計測すると18トレンチW－１号溝址86cm、25トレンチW－１号溝址が84cm、ZトレンチW－１号溝址が91cm、そして本溝址が85cmで近似しており断面も総て逆台形を呈し形状も酷似している。覆土からは堆積状況は類似しているが、純層の示標テフラが存在しないため一概に相

0　1:80　4m

付図２　18、25、28 トレンチ１号溝址断面図

関関係を言及することはここでは避けたい。また、開削時期について25トレンチW－1号溝址では開削土がAs－Bに乗っていたことから開削時期がAs－B降下以降であることが報告されている。しかし、本溝址は総社砂層を掘り込んで底面は第XⅣf層まで達していたが、上部が削平を受けていたため確認した面がすでに基本層序第X層で開削土も存在しないため同時期に開削されたものであるかどうか判断し難い。

出土遺物に関しては、18トレンチW－1号溝址から五輪塔、石臼、灰釉菊皿等で、25トレンチW－1号溝址からはカワラケ、土製円盤、Zトレンチからは瓦、漆器椀、灰釉椀、内耳鍋が出土している。そして本溝址からもカワラケ、擂鉢、土製円盤、宝篋印塔等が出土しており、18トレンチで出土した灰釉菊皿は美濃産のもので15～16世紀に比定されることなど、各溝址から出土した遺物の下限時期はほぼ同一時期で関連する溝址が埋没した時期をある程度推定できると考える。

以上、発掘調査の結果から各溝址は一連の遺構である可能性が高い。そこで、最後にこの溝址が同一のものだと仮定して蒼海城に関連する溝であるのかどうか『群馬県古城塁址の研究』の蒼海城絵図、長尾氏所有の『蒼海城絵図』、さらに群馬県埋蔵文化財調査事業団作成の『元総社地区遺跡地周辺旧状想定図』の各資料により該当する溝を調べてみた。照合の結果、『群馬県古城塁址の研究』、『元総社地区遺跡地周辺旧状想定図』には該等する溝は見当たらないが、長尾氏所有の『蒼海城絵図』に惣社明神の西側を通り北に延びていく溝が見いだせた。しかし、絵図によると三番橋を過ぎてまもなくの地点でさらに北側に延びていく溝と西側に向かって曲がっていく2本に分かれる。今回の各トレンチの図面整合による溝は宮鍋様の南側に延びて行くと推定されることから絵図とは若干異なる。そこで絵図により該等する溝は三番橋を過ぎた地点で、讃岐屋敷、瀬下屋敷の東側を南北に走る溝に接続し宮鍋様の南に延びていく溝がもう一本あったのではなかろうか。この点については、今後の慎重なる検討を要しよう。

2．30トレンチ：D－5号土坑について

本調査区は国府調査の発端となった元総社小学校校庭南側に隣接している。昭和36年群馬大学の尾崎喜左雄博士を中心に元総社小学校校庭遺跡の調査が行われ、東西13.20m（桁行5間）、南北6m（梁間2間）と梁間4間、桁間2間で、西寄りに中柱を1本もつ二つの建築遺構が確認されている。この建築遺構は8世紀頃のものと推定され礎石を持たず四角な掘り方に丸柱を置いてその根を粘土で固めた掘立柱建物である。当時の国衙は掘立柱建物が一般的で中心建物などには礎石建物がみられる。

今回の調査により検出されたD－5号土坑は、確認規模で長径0.97m、短径0.82m、深さが0.83mでほぼ円形を呈するものである。本土坑の覆土はレンズ状の自然堆積がみられ全体で6層に分けられる。1、2層にはAs－Bが多量に検出されており、特に1層は純層のAs－Bであることから、この土坑の構築時期はB軽石降下前のもので、推定国府の外郭線として研究されてきてい

る大溝にも同様にAs－Bがみられ興味深い。本土坑からは遺物は出土していないためその点からの検証は不可能である。また、狭い調査区内のため本土坑に対応する柱穴が検出できなかったため本報告書では単独の土坑として扱ったが、今後規則性を持つ柱穴が検出された場合には掘立柱の柱穴に変わる可能性が大いにあると思われる。

３．３１トレンチ：Ｉ－４号井戸址出土天目茶碗について

本調査区では、巻首図版に掲載したＩ－４号井戸址よりほぼ完形の状態で出土した天目茶碗があるが、時代背景を踏まえこの茶陶について考えてみたい。

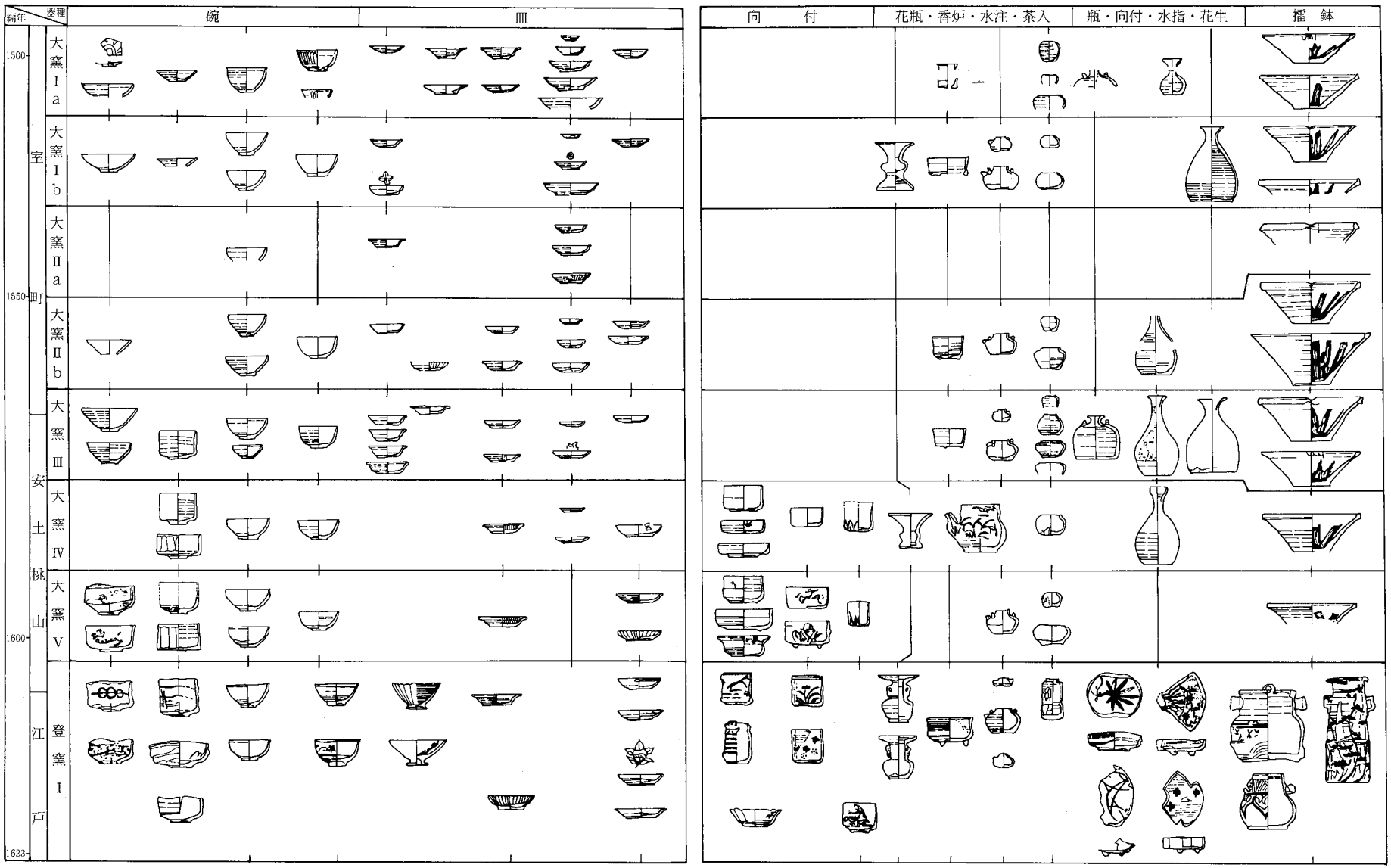
まず本遺構より出土した天目茶碗は、愛知県陶磁資料館主任学芸員井上喜久男氏の鑑定により瀬戸産の16世紀前半大窯Ｉｂ期（付図．３）に比定されるものであることが判明している。

一般的に日常雑器として主に使用されてきた焼物が正式の器皿としてふさわしい働きをすることを発見したのは「侘」の美意識のもとに揺るがぬ主張を掲げた茶の湯の茶人たちであったと言われる。後に、侘茶の祖とされる村田珠光が活動しはじめたとされる15世紀末～16世紀の室町時代後期が焼物にとって価値転換の時期であったっと考えられる。この村田珠光が提唱した「冷え枯れた美」を具体物を持って具現化し、実践して行ったのが経済力を有する京都や堺、奈良などの商人や町人、つまりは茶人であった。この時代の茶陶のみごとさはこうした茶人たちの指導力によるところが大きかったと思われる。したがって、注文を出す茶人たちの創意が先導し窯場を経営する陶工や周囲の関係者たちが協力して茶人の意にかなうような焼物を完成させてきたのである。茶陶を注文する需要者が生産者の具体像に直接かかわり、その生命と言うべき形や意匠にまで関与し創られていったのである。侘茶の流行は我国在来の、そして新興の窯に与えた影響は計り知れないと思う。

さらに、技術史的には16世紀はじめ頃より瀬戸焼とそれにつづく美濃焼が半地上式二等辺三角形の大窯という新形式の窯を考案し、施釉技術を改良して輸入陶器である中国明代の陶磁器の模倣を大々的に繰り広げ、併せて本調査区より出土した天目茶碗のような茶陶を焼いて新工夫を取り入れたのである。その後、この時代は中央文化に敏感で無釉の焼き締め陶を貫く備前焼と中国陶磁との関連を持つ美濃焼が茶陶の双璧として名を馳せることになる。

最後に本調査区は蒼海城内、徳蔵寺と齊木の薬師の中間に位置している。前述したような時代背景を考えるとＩ－４号井戸址より出土した天目茶碗は蒼海城関係者あるいは経済力を有する人物の手で持ち込まれてきた可能性が否定できない。

付図3　近世瀬戸物編年図表



元総社明神X遺跡の地質調査報告書

古環境研究所

Ⅰ．はじめに

元総社明神X遺跡における発掘調査では、構築年代が不明な31トレンチW－2号溝址（以下、W－2号溝址）が検出された。ここでは、W－2号溝址覆土の層序を述べるとともに、テフラ検出分析を行い、指標テフラとの層位関係から構築年代に関する資料を得ることを試みる。

Ⅱ．W－2号溝址覆土の層序

W－2号溝址覆土の層序を、図1に示す。覆土は、黒味の濃い腐植質土壌と、それより若干色調の薄い土壌の互層からなる。覆土の下部には、流水によって堆積したと思われる成層した黒色砂層が認められる。また上部には、総社砂層に由来するシルト・ブロックの濃集層が認められる。野外調査の際には、テフラの一次堆積層を確認することはできなかった。

Ⅲ．テフラ検出分析結果

（1）分析試料と分析方法

テフラ検出分析は、図1に示した3点の試料を対象とした。以下、分析手順を述べる。

1）試料15ｇを秤量。

2）超音波洗浄装置により、泥分を除去。

3）80℃で恒温乾燥。

4）実体顕微鏡下で観察。

（2）分析結果

分析結果を、表1に示す。試料番号1～3のいずれの試料にも軽石が認められた。軽石には、淡褐色の軽石が多く、ほかに少量の白色軽石が認められた。各々の軽石は、その特徴から異なる2層のテフラに由来することが考えられた。淡褐色軽石は最大径3.9㎜、比較的発泡は良く、斜方輝石の斑晶が認められる。一方、白色軽石は最大径2.4㎜、斑晶として角閃石が認められる。

いずれの軽石も、検出される量は少ない。

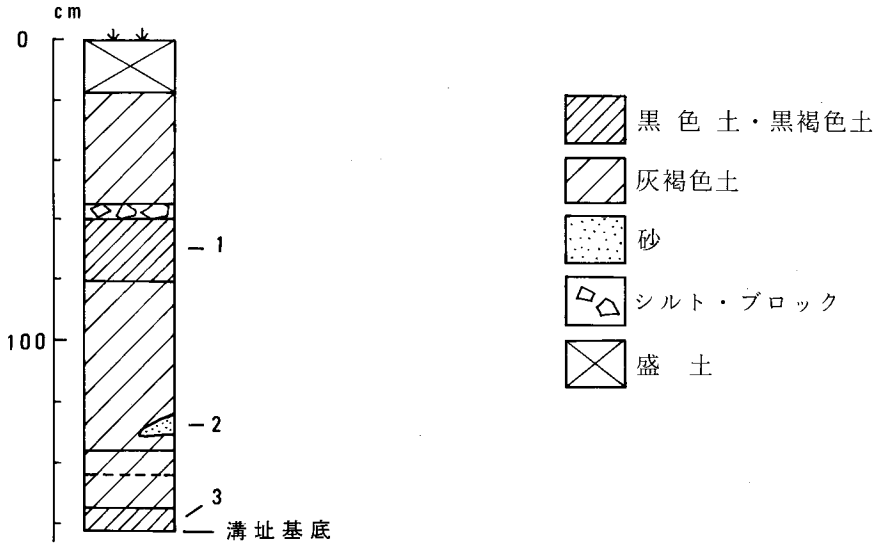
Ⅳ．考　察　W－2号溝址の構築年代

検出された特徴の異なる軽石のうち、淡褐色軽石はその特徴から1108（天仁元）年に浅間火山から噴火した浅間Bテフラ（As-B, 新井, 1979）に由来する可能性が大きいと考えられる。また、白色軽石は6世紀に榛名火山から噴出した榛名－渋川テフラ層（Hr-S, 早田, 1989）、または榛名－伊香保テフラ層（早田, 1989）に由来する可能性が大きい。しかし、今回検出された軽石の量は少ないことから、遺構の構築年代に関して詳細な考察を展開することは難しい。

表　1　W－2号溝址のテフラ検出分析の結果

試料番号	軽石の色調	軽石の量	軽石の最大径（mm）
1	淡褐，白	淡褐：++ 白　：+	淡褐：2．3 白　：1．1
2	淡褐，白	淡褐：++ 白　：+	淡褐：3．9 白　：2．4
3	淡褐，白	淡褐：++ 白　：+	淡褐：3．8 白　：0．9

++++：特に多い，　+++：多い，　++：中程度，　+：少ない，　－：認められない，



付図4　W－2号溝址覆土の層序
数字は，分析試料番号．

文　献

新井　房夫　(1979) 関東平野北西部の縄文時代以降の指標テフラ層．考古学ジャーナル，no.157，p．41－52.

早田　　勉　(1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害．第四紀研究，27，p．297－312.

蒼海城について

茂木　渉

はじめに

蒼海（おおみ）城は、前橋市元総社町に存在し、その城域は上野国府跡と重なり合い、かつては府中として、又守護代長尾氏の城下町として栄えていた。つい30年ほど前までは各所に濠址などを残していたが、現在ではほとんどが失われてしまい、本丸付近にわずかにかつての面影をとどめているにすぎない。この失われてしまった城郭について、その歴史及び構造についてすこし考察してみたい。

1．蒼海城と国府

蒼海城がいつ築城されたかははっきりしない。良質の資料ではないが、江戸時代に釈迦尊寺住職釈泰亮の著した「上毛伝説雑記拾遺」(注1）の中の『総社記、下』に「長元元戊辰年六月、上総介平忠常下総国より引移らる。其嫡子下総介常重、其の長子千葉介常胤、此の時城鎮護の為に、五智の如来を城の四方に数箇寺を建立有って安置す。或は再造営有り。」とあり、長元元年（1028）に平忠常が下総国から移り、その子常重と孫の常胤が「城」鎮護の為に数寺建立したり再建したりしている。

江戸時代の資料なので「城」といっているが、これは城郭というより「館」の可能性が高い。或いは、国府を城としてとらえていたのであろうか。(注2）

上総介の一族は栄えていたが、治承四年九月十三日源頼朝からの加勢の依頼により一族を率いて鎌倉へ赴いた。その隙をついて、平家方の足利俊綱（藤姓）が足利よりここまで来襲し府中の民家を焼き払った。吾妻鏡治承四年九月三十日の条に「（前略）足利太郎俊綱為平家方人、焼払同国府中民居、是源家輩令居住之故也」とあるが、この時国庁や館も焼かれた可能性がある。

建久三年（1192）七月、上総介一族は加勢の功により下総国へ移ったが、一部はこの付近に土着していった。建久五年（1195）十二月一日、安達盛長が上野国奉行になったが、高崎市八幡原町に館を構えたので蒼海の地はそれほど大きな変化がなかったであろう。安達氏は、弘安八年（1285）の霜月騒動で滅亡するまで八幡原に居住し、蒼海には進出しなかったようだ。鎌倉幕府滅亡時の上野守護は長崎孫四郎左衛門尉だったが、どこに居住したかは不明。

2．長尾氏の登場

鎌倉幕府が滅亡し、南北朝、室町幕府と移っていく中で、長尾氏が上杉氏の家宰として、又上野国守護代として登場してくる。長尾氏がいつ上野へ入部したかは定かではないが、建武四年（1337）足利直義が上杉憲顕に上野国に向うよう命じた時、(注3）上杉氏に従って来たといわれている。

観応二年（1351）十二月、観応の擾乱の笠懸野、那波庄の合戦には、足利直義方の桃井直常の先鋒として長尾孫六忠房と同平三（忠房の弟）、長尾左衛門の名が見えるので（太平記）この頃には蒼海に入部していたと考えてよいだろう。貞治二年（1363）に上杉憲顕が関東管領に還補（直義方だった為、一時宇都宮氏綱が補任されていた）され、上野、武蔵、越後の守護職も兼務したが、長尾氏も上野、越後の守護代となった。この時の長尾氏は景忠で、これ以降上野長尾、越後長尾に分かれる。上野長尾はさらに総社長尾と白井長尾に分かれ、前者は蒼海城、後者は白井城を拠点としていく。総社長尾氏は、上野守護代はもとより武蔵守護代に任じられた者もあり、又上杉氏の家宰をつとめている者も多く大いに栄えた。(注4）

3．蒼海築城

さて、蒼海城の築城はいつであろうか。蒼海城主として初めて記録に出てくるのは景行（この名は長尾系図にはない）で「永享元年蒼海城へ移る。時に城郭を修造す。同十年子息忠房後[後弥]昌奉行にて、平井の城を修造す」（総社記）とある。この記述で注目すべきことは、景行が永享元年（1429）蒼海城へ移ったということで、既に築城されていた城へ移ったと解釈できる。つまり、永享元年には城が存在していたということだ。

室町幕府になってからも関東では戦乱が続いたので、有力な武士は簡単な城（或いは強化された館）を築いたと考えられる。とくに総社長尾氏は、上野武士の中心的存在であり、府中に居を構えていたので国府の一部を屋敷（館）化し、それを集合して城郭としたのであろう。

長尾忠房は、当時太田道灌とならんで築城家の双璧とされ、平井城、白井城等は彼の手になるものといわれている。永享元年（1429）の蒼海城の修造も彼が手を加えたと思われる。修造の目的は、蒼海城の防衛力を強化することが目的で、染谷川と牛池川をそれぞれ何箇所かづつ堰き止め水を湛え、立地条件の悪さを補おうとした。このような川を堰き止めて要害とする手法は、平井城や多比良新堀城（吉井町）に今でも痕跡を見ることができるが、それ等は山内上杉氏の勢力下にあり長尾氏が指導したものであろう。

永享十年（1438）足利持氏が永享の乱を起こし、それが結城合戦（永享十二年）へと続いていくが、これ等の戦闘を通して、とくに結城城の攻防を体験した武士は、長期戦に堪えうる城郭の必要性を認識し「関東における築城の一時代」（山崎一氏）を出現させた。この築城技術の急速な発展の中で、蒼海城の改修の限界を認識した忠房は、石倉城（厩橋城の前身）を築いていく。理由としては「永享の頃より蒼海に用水不足故、是非なく城を石倉に移し」（総社記）と用水不足をあげている。しかし、修造してそれ程経っていないにもかかわらず太田道灌を招き石倉（利根川左岸）に築城していったのは何故か。

その理由としては、

（1）染谷川と牛池川の水が涸れ始めた。蒼海城は両川を土俵で堰き止め水を湛えて防御を強化しているが、それが唯一の要害といってよく、これが無くなれば平地の城なので攻められればひとたまりもない。生

活用水も不足したであろう。

（2）永享の頃には国衙（国府）は有名無実化していて、ここに居住する意味が無くなってしまった。それよりも水運等を考え石倉の方が交通の要衝になりうる（石倉城はそのため運河まで開削した）。

（3）城郭の急速な発展の中で、旧式の縄張りの弱点がさらけ出されてしまい、もはや改修する意味のない城になってしまった。等々考えられる。

総社長尾氏は、忠房－忠綱－忠政－景棟－忠景－顕忠－顕方と続き、石倉長尾氏は忠房の子の景道から景善－景忠（賢忠）と続く。石倉城は、亨禄から天文の頃の利根川の相次ぐ氾濫や流路変更で大部分が崩壊していき、賢忠は残った三の丸を基礎に新しい石倉城を築いた。これが後の厩橋城で、その後長野氏が城主となっていく。

4．蒼海城の攻防

さて、忠房は石倉城を築いて移っていったが、総社長尾氏は引続き蒼海城にとどまっていた。

文明十八年（1486）の堯恵の北国紀行(注5)に「神無月廿日あまりに。彼国府長野の陣所に至る時。哺時になれり。此野は秋の霜を争ひし戦場未だ払はずして。軍兵野にみてり枯れたる萩われもかうなど引き結びて夜を重ねぬ。定昌の指南によりて。藤原顕定関東管領の旅。哀の心ありて。旅宿を東陣にうつされし後は。厳霜もをだやかなり。平顕忠長尾景忠。陣所にて会。」とあり、長野氏が国府（蒼海）へ出陣し、(注6)それに対し長尾氏は越後守護上杉定昌、上野、武蔵の守護で関東管領の上杉顕定を恃み対陣しているのがよくわかる。すでに長尾氏単独では長野氏に対抗できる力はなくなっていた。

翌長亨元年（1487）十一月には長尾兵五（定明）は越後勢とともに勧農城（足利市）を攻撃しているので、(注7)長野氏とは和睦したのであろう。又、守護代として大永二年（1522）室田長年寺の禁制も出している。(注8)

しかし、その状態は長く続かなかったようで、大永五年（1525）長尾顕方が北条氏に通じた為、再び長野氏に攻められることになった。大永7年（1527）には厩橋城主長野方業（厩橋宮内大夫）が東から攻めたので、東西両側から挟み撃ちにあうこととなり「長野左衛門大夫色々廻計儀、顕景一類以可為滅亡分」(注9)という状況で、越後の長尾為景に白井の長尾景誠がそれに添えた書状の中で「総社要害可乗取行」、「来春有御越山被引立候者」(注10)とを懇願している。

亨禄三年（1530）長野左衛門大夫信業（憲業）は吾妻で戦死し、業政の代になり山内上杉氏の家宰は長野氏に移った。その後も総社長尾氏は、蒼海城とともに存続していくが、(注11)永禄の頃になると武田氏が西上野へ侵攻して来るようになり、その脅威にさらされることとなる。永禄五年九月十八日信玄が宇都宮広綱に送った書状に「今度上州へ及行箕輪惣社倉賀野郷村悉撃砕」(注12)とあり、蒼海城も攻撃目標にしているのがわかる。

永禄七年六月には倉賀野が落城した。(注13)蒼海落城がいつかは明らかではないが、信玄の意図は倉賀野城を落とし箕輪と厩橋との間を分断するため蒼海城を攻略する必要があるので、箕輪落城以前ということになる。　永禄八年二月に信玄は、諏訪上社に捧げた祈願文の中で再度惣社攻略を祈願し、(注14)同年同月蒼海城の北五キロの三ノ宮に進出した。そして漆原城に駐兵し、(注15)利根川の渡河点を押さえた。永禄日記によると「昨廿五者三ノ宮陣ヲ払、惣社口へ敵相動ト委書シマス」(注16)とあり、蒼海城攻撃に向かったと考えられる。

この後、蒼海城関係についての記録が無いので落城の時期は明らかではないが、ほどなくして落城したのであろう。落城時に長尾氏の家臣の瀬下豊後守（瀬下屋敷に居住していたのであろうか）は、武田方に内通している。(注17)

5．その後の蒼海城

武田氏は、蒼海城を利用せず厩橋城への押さえとして新たに石倉砦（利根川右岸）を築いた。以後、この付近の歴史は厩橋城と石倉城の攻防になっていく。

その後、北条氏(注18)を経て天正十八年（1590）十一月、諏訪頼忠が蒼海に封ぜられたが、この城を改修せず東北部に長屋を建てて居住した。諏訪氏が高島城（諏訪市）に移ってから慶長六年上総国より秋元長朝が封ぜられたが、秋元氏もこの城の改修を断念し、牛池川の東に八日市場城を築いて仮住いしながら総社城を築き移り、その後蒼海城は廃墟となった。

6．蒼海城の構造

次に蒼海城の構造（縄張り）について、すこし見ていこう。

蒼海城は、県内に多数存在する城郭の中にあって、きわめて特異な構造をしている。ほとんどの城郭は戦国期に築かれたり改修されたりしているが、この城の中心部はあまり改修されていず城郭の古い形態を残し、築城史を考える上で有効な資料を提供してくれる。蒼海城は、染谷川と牛池川とに挟まれた所に占地し、両川に幾つかの堰止めを築き（古図には一番俵、二番俵等表記してある）水を湛えて最外防衛線とした。その中に、縦横の濠が碁盤目状に走っている。本丸は北に偏し、その南に二の丸が並びその周辺の各郭には松井屋敷、瀬下屋敷、鎌田屋敷、讃岐屋敷等の名称が残っている。これら各郭が縦横に配置されているので、山崎一氏はこういう形式を「列郭式」と呼んでいる。(注19)この城を注意して観察してみると、戦国期の城郭のように本丸を中心として各郭を有機的に配置していくような形と異なり、郭配置に統一性が感じられない。例えば城の西側に沼があるが、この外側（西）に清徳寺と讃岐屋敷があり各郭から孤立している。こういう

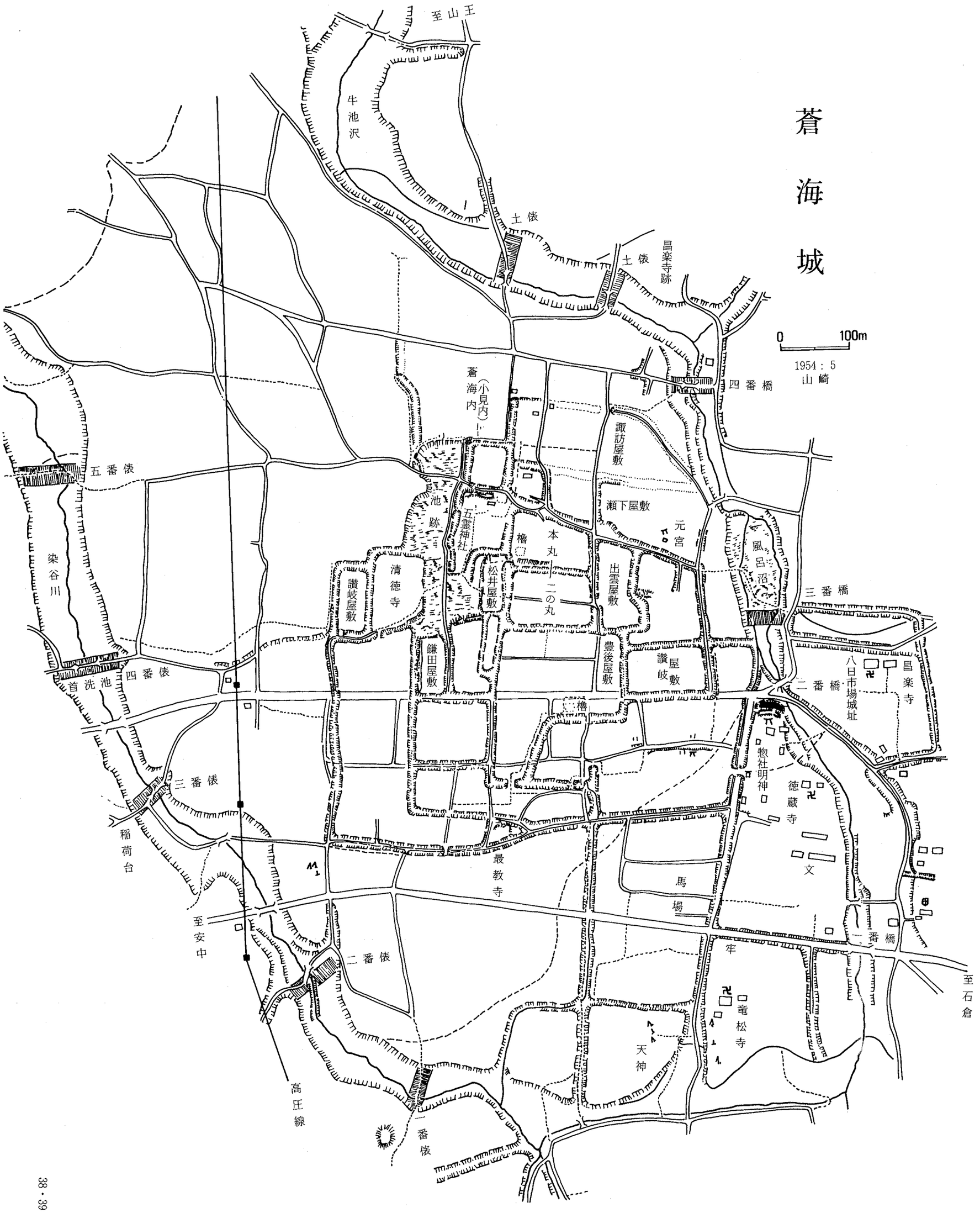


図1　蒼海城　　山崎諏氏提供

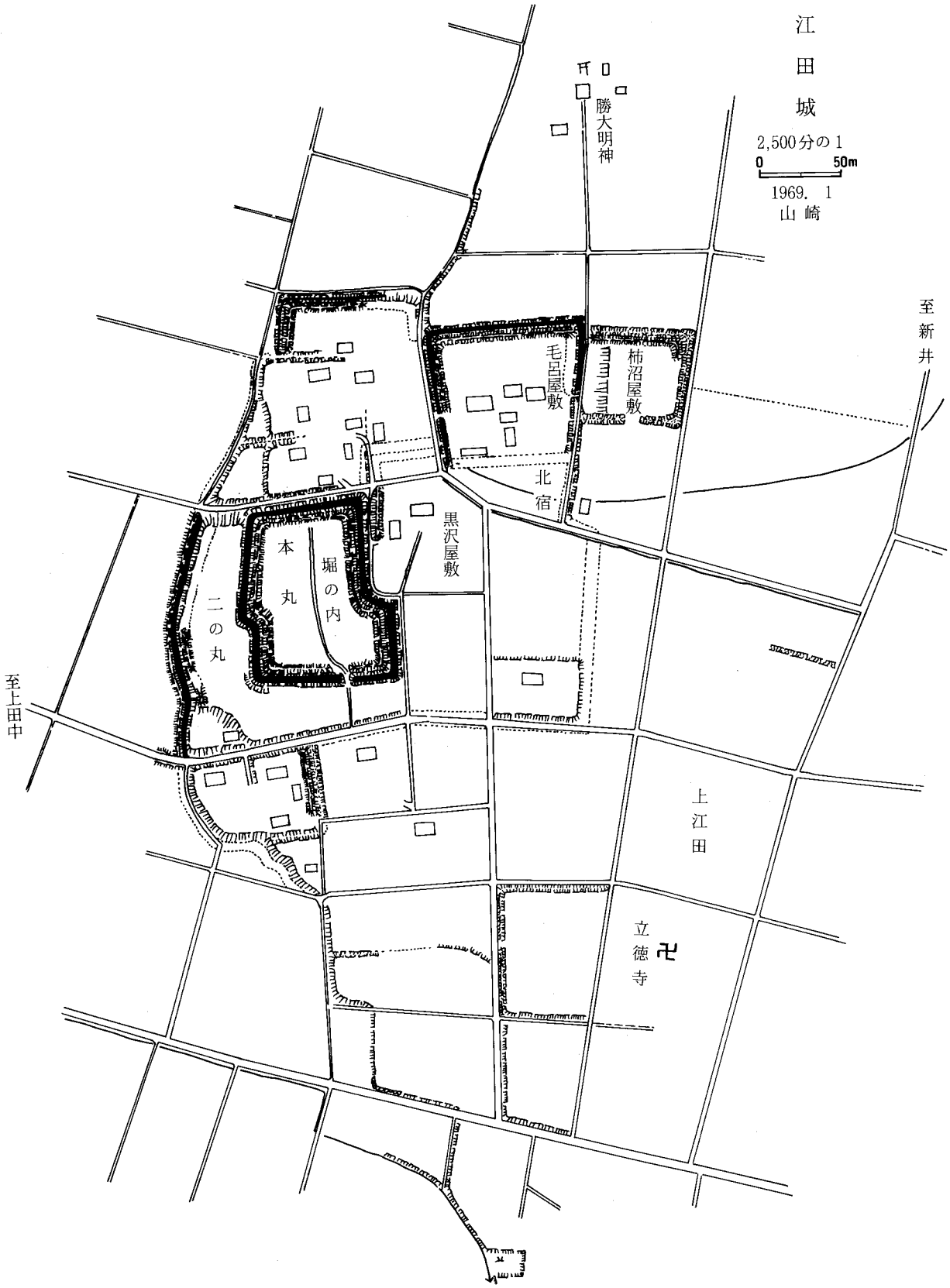


図2　江田城　　山崎誠氏提供

配置は、かえって敵に占領され易く、それが攻城軍の足がかりとなってしまい、弱点を形成してしまう。また北西方面には工事が少なく、外部との遮断が不十分である。

長尾氏は上野守護代であったから、付近には一族、郎党、被官が集住していたはずだが、(注20) 数個の武家屋敷（館）の密集した所ではそれ等を濠をもって連ね自然発生的に城郭を形成していった。当然、城郭化していく時にはそれなりの計画的な工事もしていく。永享元年（1429）に景行が城を修造したというのは、こういったことであったろう。各郭が○○屋敷と呼ばれているのは、そのことを表している。本丸は長尾氏当主の屋敷（館）であったろう。

このような例を、新田町の江田城にも見ることができる。この城にも各郭に黒沢屋敷や毛呂屋敷等の名称が残っている。特に本丸東側にある黒沢屋敷の土居は、本丸堀を挟んで本丸土居と相対していて、この城の性格をよく表している。蒼海城のように碁盤目状の郭配置でないのは、ここが国府ではなかったからである。

蒼海城は方形の屋敷を連ねているので碁盤目状の濠となるが、城郭の堀は決して交点が十文字にはならずT字形になっている。これは相互の側防を考慮してのことである。城郭は時代が下がるほど本丸を中心に各郭を配置し、有機的にそれを結びつける構成となっていくが、列郭式の城郭は、各屋敷の集合のため各郭（屋敷）の独立性が高く、一部が敵に占拠されても他への影響が少ないという利点をもつ反面、各郭の連絡が容易でなく又主従があいまいで兵力の転用や重点的配置が困難なため、守備に大兵力を必要としたり各郭間相互支援が出来にくい等不利な面が大である。つまり、こういう形式の城郭は籠城戦の効果を半減させてしまうことになる。

この形式の城郭は、早い時期に築かれたもので、戦国期の比較的早い時期に勢力をもっていた長尾氏、那波氏、岩松氏等の勢力下にその類似をみることができる。急速に発展していく城郭の中で蒼海城は旧式化していき、それが石倉城の築城となっていく。

おわりに

蒼海城についてふれてみたが、まだまだ不明な部分が多い。そして、それが解明されないうちに遺構がほとんど消滅してしまった。残念というほかない。しかし、近年の数度にわたる発掘調査により、いくつかの中世の遺構が出土していて少しずつ資料も増えている。これ等の新発見によってさらに蒼海城の研究が深まれば幸いである。

注

（1）上野志料集成収録
（2）近年の発掘調査によると、推定国府域の北と東を限る堀が出土しているが検討を要する。
　　又、吾妻鑑では城と館を使い分けている。
　　前橋市教育委員会　昭61、閑泉明神北遺跡、昭58、閑泉樋遺跡、寺田遺跡
（3）群馬県史　資料編6　中世2 No.768　足利直義書状、上杉家文書
（4）財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団　上野国分僧寺尼寺中間地域
　　この調査で長尾家関連のものと思われる三ヵ所の館址や寺院址が出土。
　　また、応永一七年（1410）銘の妙見寺梵鐘も「長尾左金吾平朝臣憲明」の銘がある。
（5）群書類従　巻第三三九
（6）長野氏が出陣した理由は、扇ヶ谷、山の内両上杉の内紛により山の内方だった総社長尾氏と闘うため。
（7）群馬県史　資料編7　中世3　No.1789～1792　赤堀文書
（8）同　　上　資料編7　中世3　No.1939　平某禁制写　長年寺文書
（9）同　　上　資料編7　中世3　No.1958　長尾顕景書状　上杉文書
（10）同　　上　資料編7　中世3　No.1959　長尾景誠書状　上杉家文書
（11）同　　上　資料編7　中世3　No.2122　関東幕注文の中に「惣社衆」がみえる
（12）同　　上　資料編7　中世3　No.2173　武田信玄書状
（13）井上文書　（吉井町　井上氏蔵）
　　黒沢文書　（藤岡市下日野黒沢氏蔵）ともに永禄七年六月二日付信玄からの感状である。
（14）群馬県史　資料編7　中世3　No.2270　武田信玄願文
（15）漆原文書　年号が入っていないが、この時ここに原胤重を置いたと考えられる。
　　定　　漆原之地其方□□境目之事候之
　　間其表為指引給直判候弥可抽忠節者也
　　仍如件
　　永禄□年三月廿八日
　　原　孫次郎殿
（16）群馬県史　資料編5　中世1　永禄日記
（17）群馬県史　資料編7　中世3　No.2362
（18）上毛故城墨記には「下野の榎本の城主近藤出羽介実方之を領す。」とある。
（19）群馬県古城墨址の研究　上　昭46　山崎　一 著
（20）同　　上　には蒼海周辺にいくつか城館が載っている。
　　又、国分僧寺・尼寺の中間地域の発掘で城館が出土している。

Tab. 1 遺物観察表

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・胴部	成・整形方法 底部	備考	挿図 (Fig)
1	28トレW−1	内耳土器	(29.0)	(14.0)	①細粒 ②良好 ③緑黒 ④1/10	外傾。轆轤。欠損。			19
2	28トレW−1	瓦器擂鉢	(29.6)	12.3	①中粒 ②良好 ③オリーブ灰 ④1/3	逆『ハ』の字に外反。轆轤。		5本歯×10組。	19
3	28トレW−1	土製円盤	《 長さ 4.0	幅 5.1	厚さ 0.5 重さ12.0 》	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④ほぼ完形			19
4	28トレW−1	土製円盤	《 長さ 3.9	幅 4.8	厚さ 0.6 重さ11.5 》	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④ほぼ完形			19
5	28トレW−1	カワラケ	8.7	1.8	①細粒②良好③にぶい黄橙④ほぼ完形	外傾。轆轤。	右回転糸切痕。	全体に歪んでいる。	19
6	30トレH−2	高台椀	(9.8)	4.1	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④1/2	端部外反。轆轤。	回転糸切後撫調整。	内面、黒色処理。	20
7	30トレH−2	高台椀	(13.2)	5.7	①細粒 ②良好 ③浅黄橙 ④1/4	整美。轆轤。	回転糸切後撫調整。		20
8	30トレH−2	カワラケ	9.4	2.3	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④2/3	外傾。轆轤。	右回転糸切痕。		20
9	30トレI−1	高台椀	(16.6)	5.7	①細粒 ②極良 ③橙 ④1/4	端部外反。轆轤。	回転糸切後撫調整。		20
10	30トレI−3	椀	(16.4)	4.9	①細粒 ②良好 ③灰赤 ④1/3	直線的に外傾。轆轤。	回転糸切後撫調整。		20
11	30トレI−1	カワラケ	(8.4)	2.2	①細粒 ②不良 ③にぶい黄橙 ④1/4	端部外反。轆轤。	右回転糸切痕。		20
12	30トレW−1	坏	(10.6)	3.6	①中粒 ②良好 ③暗灰黄 ④2/3	内湾、端部外反。轆轤。	右回転糸切痕。		20
13	30トレフク土	カワラケ	(8.8)	2.7	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④1/5	短く外傾。轆轤。	回転糸切痕。		20
14	30トレE-1G	カワラケ	(9.4)	2.1	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/2	外傾。端部外反。	右回転糸切痕。		20
15	30トレF-1G	カワラケ	(7.8)	2.6	①細粒 ②不良 ③明褐 ④1/5	内湾。轆轤。	糸切痕。		20
16	30トレW−2	カワラケ	(10.4)	2.9	①細粒 ②良好 ③灰白 ④1/2	外傾。轆轤。	糸切後調整。		20
17	30トレF-1G	カワラケ	8.6	2.3	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④完形	外傾。端部外反。	右回転糸切痕。		20
18	30トレE-1G	須恵蓋	(10.4)	2.7	①細粒 ②良好 ③灰 ④1/6	内湾。外稜を有す。	−		20
19	30トレF-1G	坏	10.4	2.2	①細粒 ②極良 ③赤褐 ④2/3	外傾。轆轤。	回転糸切後調整。		20
20	30トレG-1G	甕	12.6	11.8	①中粒 ②不良 ③明赤褐 ④4/5	口縁部外反。篦削り。	平底。篦削り。		21
21	30トレD-10	水瓶	(8.4)	[8.0]	①中粒 ②極良 ③灰白 ④頸部のみ	円筒状。口唇部は有段。	欠損。		21
22	31トレH−1	土師甕	(19.0)	[7.0]	①細粒 ②良好 ③にぶい褐 ④1/10	『く』の字状口縁。篦削り。	欠損。		21
23	31トレI−2	土製円盤	《 長さ 5.2	幅 5.2	厚さ 0.8 重さ24.2 》 ①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④ほぼ完形。 土師質土器の底部を利用。				21
24	31トレI−2	カワラケ	(8.6)	2.3	①細粒 ②良好 ③にぶい橙 ④1/2	短く外傾。轆轤。	回転糸切痕。		21
25	31トレI−3	擂鉢	(31.3)	14.7	①中粒 ②良好 ③明赤褐 ④1/6	逆『は』の字に外反。轆轤。		5本歯。	21
26	31トレI−4	坏	(10.8)	3.0	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/2	口縁部やや外反。轆轤。	左回転糸切痕。		21
27	31トレI−4	カワラケ	8.8	2.6	①細粒 ②良好 ③にぶい黄橙 ④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切痕。		21
28	31トレI−4	高台皿	9.9	3.1	①細粒 ②極良 ③橙 ④2/3	短く外傾。轆轤。	回転糸切後調整。	高台後付け。	21
29	31トレI−4	天目茶碗	11.8	6.3	①細粒 ②良好 ③黒褐 ④完形	内湾ぎみに立ち上がり端部わずかに外反。高台部を除き全面に施釉。			22
30	31トレI−4	坏	(11.2)	3.0	①細粒 ②不良 ③橙 ④1/3	外傾。轆轤。	回転糸切痕。		22
31	31トレI−4	香炉	(11.6)	6.5	①細粒 ②極良 ③オリーブ黄 ④1/2	胴部くびれぎみ。轆轤。	脚を後付け。	内外面緑釉浸しがけ。	22
32	31トレI−4	土師坏	(11.8)	3.4	①細粒 ②良好 ③灰褐 ④1/3	横撫で。稜有す。	篦削り。	底部丸底。	22
33	31トレI−4	土師坏	(13.2)	(3.5)	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/8	横撫で。稜有す。	篦削り。	底部丸底。	22
34	31トレW−2	カワラケ	(9.6)	2.3	①細粒 ②良好 ③にぶい赤褐 ④1/5	端部外反。轆轤。	回転糸切痕。		22
35	31トレW−2	土師坏	(10.6)	2.2	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/6	端部内反。篦削り。	篦削り。	底部丸底。	22
36	31トレフク土	土師坏	(11.0)	−	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/8	横撫で。横撫で。	欠損。	底部欠損。	22
37	31トレフク土	土師坏	(12.2)	[3.2]	①細粒 ②良好 ③橙 ④1/5	外傾。横撫で。稜有す。	篦削り。		22
38	31トレD−4	土師坏	(14.4)	4.6	①中粒 ②良好 ③赤褐 ④1/3	端部外反。横撫で。	篦削り。	内面に暗紋状磨き。	22
39	31トレフク土	土錘	《 長さ [2.6]	幅 1.7	厚さ 1.6 重さ [7.6] 》 ①細粒 ②不良 ③橙 ④−				22
40	31トレフク土	鉄釘	《 長さ [4.3]	直径 0.6	重さ [7.9] 》				22
41	31トレフク土	鉄釘	《 長さ [5.3]	直径 0.6	重さ [7.4] 》				22
42	31トレW−2	古銭	《 ①元祐通宝 ②銅 ③北宋 ④1086年 ⑤廻 ⑥行 ⑦2.24 ⑧1.86 ⑨2.5 》						22
43	31トレI−4	古銭	《 ①熙寧元宝 ②銅 ③熙寧元年 ④1068年 ⑤廻 ⑥行 ⑦2.22 ⑧1.68 ⑨2.7 》						22
44	31トレD−2	古銭	《 ①不明 ②銅 ③不明 ④不明 ⑤不明 ⑥不明 ⑦2.62 ⑧不明 ⑨1.8 》 残 1/2						22
45	31トレフク土	古銭	《 ①不明 ②銅 ③不明 ④不明 ⑤不明 ⑥不明 ⑦不明 ⑧不明 ⑨1.6 》 残 1/2						22

Tab. 2 石製品・土製品・石器観察表

番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	色調	石材	備考	Fig
1	28トレⅠ－1	石臼	[15.5]	28.3	9.1	[4,500.0]	浅黄	牛伏砂岩		23
2	28トレⅠ－1	宝篋印塔	[27.1]	[33.3]	[17.6]	[14,500.0]	オリーブ灰	粗粒安山岩		23
3	28トレⅠ－1	宝篋印塔	[17.2]	18.8	[20.9]	[6,000.0]	にぶい黄橙	角閃石安山岩		23
4	28トレW－1	宝篋印塔	[17.2]	18.8	[20.9]	[1,000.0]	灰	粗粒安山岩		23
5	30トレD－9	宝篋印塔	[20.9]	[15.3]	[17.2]	[5,000.0]	オリーブ灰	粗粒安山岩		23
6	30トレD－9	宝篋印塔	[21.9]	22.7	14.7	[6,000.0]	緑灰	粗粒安山岩		23
7	30トレⅠ－1	砥石	[7.2]	4.1	1.7	[84.8]	灰白	変質流紋岩		23
8	30トレD－3	土製品	1.9	2.0	0.8	2.2	橙	－		23
9	30トレフク土	土製品	1.9	2.0	0.8	2.2	橙	－		23
10	30トレW－1	砥石	[5.9]	[2.7]	1.7	[33.6]	灰褐色	砥沢石		23
11	31トレⅠ－4	砥石	[11.4]	3.6	3.8	[180.4]	褐灰	砥沢石		24
12	31トレⅠ－5	五輪塔	14.1	14.3	[8.6]	[1,400.0]	黄灰	粗粒安山岩	空輪	24
13	31トレⅠ－5	五輪塔	[12.0]	22.9	13.2	[3,300.0]	オリーブ灰	粗粒安山岩	水輪	24
14	31トレⅠ－5	凹石	9.4	8.6	5.1	1,400.0	黄褐	粗粒安山岩		24
15	31トレⅠ－5	敲石	[12.0]	5.3	4.7	[475.0]	灰黄	粗粒安山岩		24
16	31トレⅠ－5	砥石	[12.2]	3.8	3.3	[205.1]	褐灰	砥沢石		24
17	31トレⅠ－5	敲石	[6.7]	5.8	3.4	[259.7]	灰黄褐	ひん岩		24
18	31トレⅠ－5	石臼	[16.8]	[15.8]	8.1	[1,400.0]	青灰	粗粒安山岩		24
19	31トレⅠ－4	砥石	[6.7]	4.0	3.6	[177.7]	にぶい黄橙	変質流紋岩		24
20	31トレⅠ－5	五輪塔	[12.5]	22.1	10.5	[1,500.0]	浅黄	二ツ岳軽石	水輪	24
21	31トレW－2	敲石	[11.4]	7.4	6.1	[825.0]	褐灰	粗粒安山岩		25
22	31トレⅠ－2	板碑	[28.1]	[11.1]	2.3	[1,600.0]	緑灰	緑色片岩		25
23	31トレⅠ－2	石臼	[13.7]	[15.4]	11.2	[2,000.0]	青灰	粗粒安山岩		25
24	31トレⅠ－5	石臼	[18.8]	[8.1]	11.0	[2,000.0]	緑灰	粗粒安山岩		25
25	31トレⅠ－4	石臼	[14.5]	[10.5]	8.2	[1,700.0]	灰オリーブ	粗粒安山岩		25
26	31トレⅠ－4	砥石	[7.1]	[3.6]	[2.6]	[80.0]	褐灰	砥沢石		25
27	31トレⅠ－4	敲石	9.7	4.6	2.8	180.9	オリーブ灰	珪質頁岩		25
28	31トレⅠ－4	打製石斧	14.2	7.1	3.7	490.0	灰	黒色頁岩		25
29	31トレⅠ－5	五輪塔	7.9	8.1	[6.5]	[389.0]	灰褐	粗粒安山岩	空輪	25
30	31トレⅠ－4	板碑	[5.6]	[12.9]	1.4	[177.4]	緑灰	緑色片岩		25

観察表　註）表の記載は以下の基準で行った。

1．胎土は細粒（0.9㎜以下）、中粒（1.0～1.9㎜）、粗粒（2.0㎜以上）とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載。
2．焼成は極良・良好・不良の三段階評価。
3．色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖（小山・竹原1976）によった。
4．大きさ、重さの単位はそれぞれ㎝・gであり、現存値を[ ]、復元値を( )で示した。
5．古銭は①銭名②材質③時代④初鋳年代⑤読み方⑥字体⑦外輪⑧内輪⑨重さの順で記載。

Teb. 3 瓦観察表

No.	出土地	瓦の種別	厚さ	胎土		焼成		成形技法							整形技法					摘要	Fig
				素地	夾雑物	焼き上り	色調	粘土版面取 凹面	粘土版面取 凸面	作り	桶寄木痕	粘土版合せ目	布の合せ目	叩目	轆轤痕	篦削	布の擦消 凹面	布の擦消 凸面	側部面取		
1	28トレ・W－1	女瓦	2.1	密	少	締	灰	○	－	桶巻	○	－	－	縄密	－	未調	－	－	3	乗附	26
2	28トレ・W－1	男瓦	1.5	並	少	軟	灰黄	－	－	半載	－	－	○	－	○		－	－	3	吉井	26
3	28トレ・W－1	女瓦	2.0	並	並	締	灰	○	－	一か	－	－	－	－	－	縦撫	－	－	－	吉井	26
4	28トレ・W－1	女瓦	1.9	並	並	軟	灰	－	－	一か	－	－	－	縄密	－	未調	－	－	－	乗附	26
5	28トレ・W－1	女瓦	1.7	粗	含	並	黄橙	－	○	桶巻	○	－	－	－	○	－	－	－	2	吉井	26
6	30トレ・H－2	女瓦	1.5	並	多	硬	暗灰	○	－	桶巻	○	－		縄密	－	未調	－	－	－	乗附	26
7	30トレ・H-2カマド	男瓦	1.4	並	含	硬	暗灰	－	－	半か	－	－	－	－	－	縦撫	－	－	－	笠懸	26
8	30トレ・W－1	男瓦	1.5	並	多	硬	暗灰	－	－	半か	－	－	－	－	－	縦撫	－	－	－	吉井	26
9	30トレ・W－2	男瓦	1.3+α	並	並	硬	暗灰	－	－	半か	－	－	－	－		?	－	－	2+α	笠懸	26

10	30トレ・W－2	女瓦	1.2	粗	並	硬	鈍橙	－	－	一作	－	－	－	－		?	－	－	1	吉井	26
11	30トレ・I－1	女瓦	1.6	粗	並	硬	灰	－	－	一か	○	－	－	縄密	－	未調	－	－	－	吉井	26
12	30トレ・I－1	女瓦	1.2	並	多	硬	暗灰	－	－	一か	－	－	－	縄密	－	未調	－	－	－	乗附	26
13	30トレ・I－1	女瓦	1.8	並	少	硬	暗灰	－	－	桶巻	－	－	－	－	○		－	－	－	乗附	26
14	30トレ・D－3	女瓦	1.8	粗	並	硬	灰	－	－	一か	－	－	－	－	－	縦撫	－	－	1	乗附	27
15	30トレ・E－1G	女瓦	1.5	並	少	硬	暗灰	－	－	一か	○	－	－	縄密	－	自釉	－	－	－	乗附	27
16	30トレ・E－1G	男瓦	1.4	粗	少	硬	暗灰	－	－	半か	－	－	－	－	○		－	－	－	笠懸	27
17	30トレ・E－1G	男瓦	1.8	粗	少	軟	暗灰	－	－	半載	－	－	－	－	－	○？	－	－	1	笠懸	27
18	30トレ・G－1G	女瓦	1.0	並	並	硬	暗灰	－	－	一か	○	－	－	縄密	－	自釉	－	－	1	乗附	27
19	30トレ・G－1G	女瓦	1.9	並	並	硬	灰	－	○	一か	－	－	－	－	－	未調	－	－	－	吉井	27
20	30トレ・H－1G	女瓦	2.0	並	少	硬	灰白	○	－	一作	－	－	－	－	－	縦撫	－	－	2	吉井	27
21	30トレ・フク土	男瓦	1.2	並	微	締	暗灰	－	－	一か	○	－	－	－	○？	縦撫	－	－	4	秋間	27
22	31トレ・W－2	女瓦	2.2	粗	少	軟	灰黄	－	－	一作	－	－	－	縄密	－	未調	－	－	1	秋間	27
23	31トレ・W－2	男瓦	1.9	粗	少	並	灰黄	－	－	半載	－	－	－	－	－	縦撫	－	－	1	笠懸	27
24	31トレ・W－2	女瓦	1.7	密	微	締	暗灰	○	○	桶か	－	－	－	－	－	未調	－	－	－	乗附	27
25	31トレ・W－2	女瓦	1.5	並	少	硬	黄橙	○	○	一作	－	－	－	－	－	木目	○	－	2+α	笠懸	27
26	31トレ・W－2	女瓦	2.3+α	並	微	軟	灰黄	－	－	一作	－	－	－	－		不祥	－	－	3	秋間	28
27	31トレ・W－2	男瓦	1.7	粗	含	硬	灰黄	－	－	半載	－	－	－	－	○	－	－	－	－	東毛	28
28	31トレ・W－2	女瓦	2.0	粗	少	硬	灰黄	－	－	一作	－	－	－	－	－	縦撫	－	－	－	笠懸	28
29	31トレ・W－2	女瓦	1.7	並	含	並	黄橙	○	－	一作	－	－	－	－	－	縦撫	－	－	1	吉井	28
30	31トレ・W－2	男瓦	1.6	密	微	締	灰	○	－	半載	－	－	－	－	○	－	－	－	－	秋間	28
31	31トレ・W－2	女瓦	1.9	並	微	硬	灰白	－	－	一作	○	－	－	縄密	－	未調	－	－	－	秋間	28
32	31トレ・I－1	男瓦	2.3	並	少	硬	灰	○	－	半載	－	Z	－	正格	－		－	－	2	笠懸	28
33	31トレ・I－2	男瓦	1.0	粗	含	並	灰	－	－	半載	－	－	－	－	－	縦撫	－	－	1	吉井	28
34	31トレ・I－2	女瓦	1.5	並	少	締	灰	－	－	一か	○	－	－	縄密	－	未調	－	－	－	秋間	28
35	31トレ・I－2	女瓦	1.5	並	少	並	灰黄	－	－	一か	－	－	－	縄密	－	未調	－	－	－	秋間	28
36	31トレ・I－2	女瓦	2.5	並	含	並	鈍橙	○	－	一か	－	－	－	－	－	縦撫	－	－	－	笠懸	28
37	31トレ・I－4	男瓦	1.5	並	含	並	灰	－	－	半載	－	－	－	－	○	－	－	－	－	乗附	29
38	31トレ・I－4	女瓦	2.6	密	並	締	暗灰	－	－	桶か	○	－	－	－	－	縦撫	－	－	3	吉井	29
39	31トレ・I－4	女瓦	1.6	並	含	硬	鈍橙	－	－	一か	－	－	－	－	－	斜撫	－	－	－	吉井	29
40	31トレ・I－4	女瓦	3.1	密	多	締	暗灰	－	－	桶か	○	－	－	－	－	縦撫	－	－	3	吉井	29
41	31トレ・I－4	女瓦	3.3	密	含	締	暗灰	－	－	一か	－	－	－	－	－	縦撫	－	－	－	吉井	29
42	31トレ・I－4	男瓦	1.7	並	含	硬	黄橙	○	－	半載	－	－	－	－	○	－	－	－	3	吉井	29
43	31トレ・フク土	男瓦	1.9	並	少	並	黄橙	－	－	不祥	－	－	－	－	－	－	－	－	－	吉井	29
44	31トレ・フク土	女瓦	1.3	並	少	並	暗灰	－	－	半か	－	－	－	－	－	縦撫	－	－	－	吉井	29
45	31トレ・フク土	女瓦	1.6	粗	含	並	暗灰	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	桟瓦	29
46	31トレ・I－4	女瓦	1.6	粗	少	硬	暗灰	－	－	一作	－	－	－	－	－	縦撫	○	－	－	笠懸	29
47	30トレ・F－1G	女瓦	1.5	粗	微	軟	黄灰	－	－	一か	－	－	－	－	－	縦撫	－	－	－	吉井	29
48	30トレ・F－1G	男瓦	0.8	並	少	硬	暗灰	－	－	半載	－	－	－	－	○	－	－	－	－	笠懸	29
49	30トレ・F－1G	女瓦	1.5	並	少	硬	灰	－	－	一か	○	－	－	縄密	－	未調	－	－	－	秋間	29
50	30トレ・F－1G	女瓦	0.9+α	並	少	軟	黄灰	－	－	不祥	－	－	－	－	－	－	－	－	2+α	吉井	29
51	30トレ・F－1G	女瓦	1.7+α	並	少	硬	灰	－	－	不祥	－	－	－	－	－	－	－	－	－	笠懸	29

瓦の観察にあたって

木　津　博　明

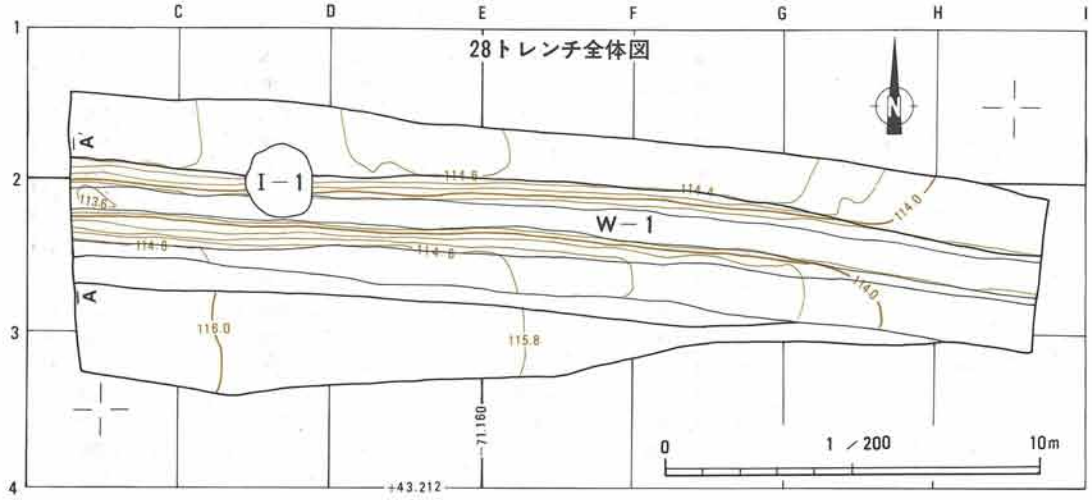
前橋市元総社地区、所謂推定国府域は、近年の発掘調査により次第にその姿を現しつつある。この中で、瓦類の出土は、各地点毎に少量ながらもあり、国府の瓦も年を追う毎に明らかになりつつある。

推定国府域出土の瓦類に就いては、従前に於いて、大江正行氏による詳細に及ぶ観察が行われている。今回の調査で出土した瓦類は、頭初、大江氏が観察すべきところであったが、諸般の都合により、従前の経緯を踏まえ、大江氏と同一視点で観察の可能な筆者が当った。観察に当っては、大江氏と同一の項目に対記述を行ったが、成形技法に就いて一目で判別できるようにした。尚、観察した瓦の数量は51点である。

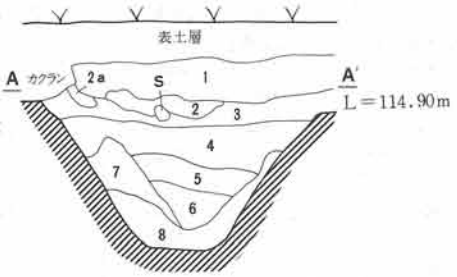
観察の結果は別表のとおりである。この結果から特筆し得る点等は、全体をとおして行わなければならない為、後日に期したい。ただ、瓦の年代観は、8世紀後半から9世紀前半代と推定される。この根拠として、国分寺中間地域出土の瓦様相との比較である。

おわりに

成・整形の技法等、詳細部の説明が出来なかった。この点について、『国分境遺跡』『研究紀要8』『新田郡笠懸町山際窯跡採集遺物』（共に、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）等を御参照いただければ幸いである。



W－1号溝址

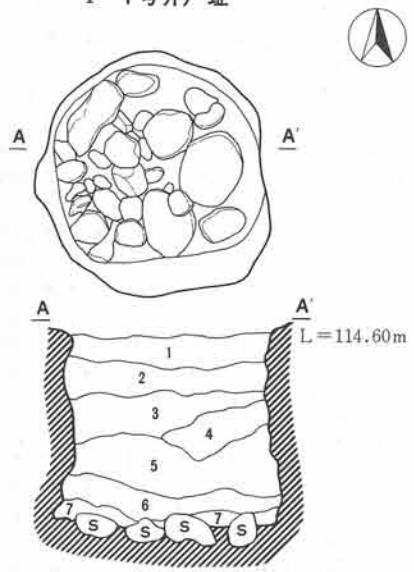


２８トレンチ：W－１号溝址

1　層：黒褐色土層　粗砂＋細砂　径10㎜の総社砂層ブロック５％、炭化物粒若干含む。締り有り、粘性やや有り。
2　層：にぶい黄褐色土層　粗砂＋細砂　川砂を主体に総社砂層ブロックを若干含む。締り、粘性ともになし。
2a　層：明黄褐色土層　粗砂＋細砂　総社砂層ブロック。
3　層：にぶい褐色土層　粗砂＋細砂　径５㎜の総社砂層ブロック10％、径10㎜の軽石を若干含む。締り、粘性ともにやや有り。
4　層：灰褐色土層　粗砂＋細砂　径５㎜の軽石10％に川砂、総社砂層ブロックを若干含む。締り、粘性ともにやや有り。
5　層：褐色土層　粗砂＋細砂　総社砂層30％、炭化物を若干含む。締り、粘性ともにやや有り。
6　層：灰褐色土層　粗砂＋細砂　総社砂層10％、川砂20％含む。締りなし、粘性やや有り。
7　層：浅黄色土層　粗砂　川砂70％以上。締り、粘性ともになし。
8　層：灰黄色土層　微砂　シルト層。締り有り、粘性強い。

0　1：60　2m

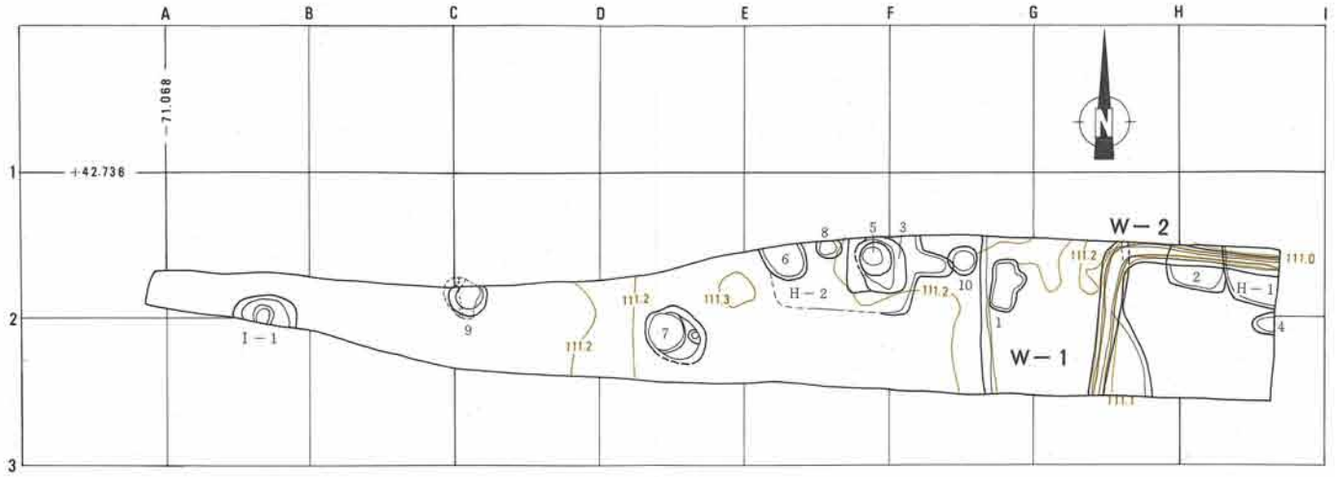
I－1号井戸址



２８トレンチ：I－１号井戸址

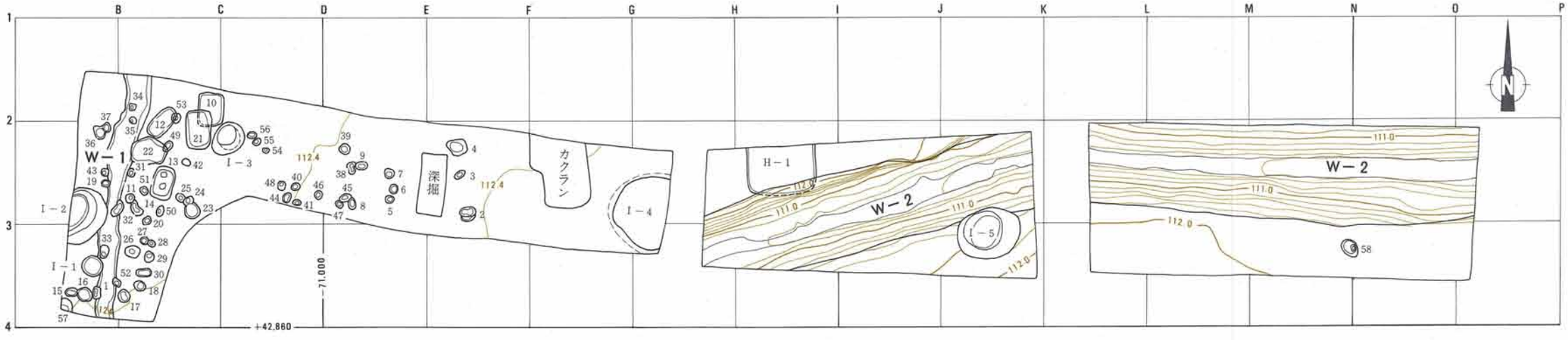
1　層：灰褐色土層　微砂　酸化鉄を全面に含む。締り、粘性ともに有り。
2　層：黒褐色土層　微砂　締り、粘性ともに有り。
3　層：黒褐色土層　微砂　径10㎜の炭化物を少量含む。締り、粘性ともに有り。
4　層：褐色土層　微砂　径２㎜の鉄屑全面に含む。締り、粘性ともに有り。
5　層：灰褐色土層　微砂　植物の繊維質と思われるものが多量に含まれる。締りなし、粘性有り。
6　層：褐色土層　微砂＋粘土質（シルト）　締りなし、粘性有り。
7　層：灰白色土層　シルト　締りなし、粘性有り。水分多量に含む。

Fig. 7　元総社明神遺跡28トレンチ全体図及び遺構図



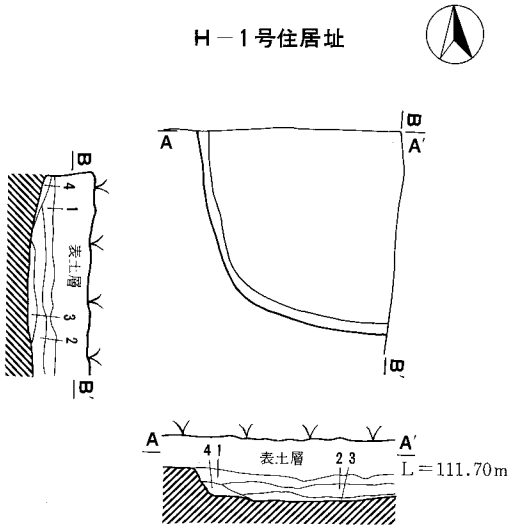
註）土抗については、記載上繁雑になるため（D－）を省略した。

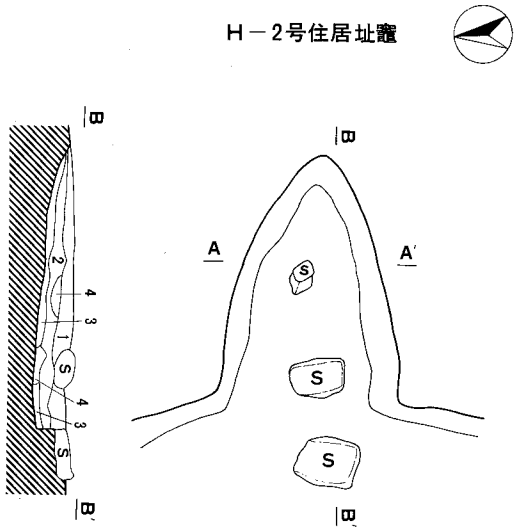
0　1／200　10m

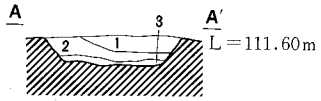


0　1／200　10m

Fig. 8　元総社明神遺跡30・31トレンチ全体図







30トレンチ：H－1号住居址

1　層：にぶい褐色土層　細砂　As－B　5％含む。締り有り、粘性やや有り。
2　層：褐色土層　細砂　Hr－FP1若干含む。締り、粘性ともにやや有り。
3　層：黒褐色土層　細砂　径2～3㎜のCP20%、FP10%含む。締り、粘性ともにやや有り。
4　層：暗褐色土層　細砂　焼土粒若干含む。締り、粘性ともにやや有り。

30トレンチ：H－2号住居址竈

1　層：褐灰色土層　細砂　焼土粒10%、粘土粒多量に含む。締り、粘性ともにやや有り。
2　層：灰褐色土層　細砂　焼土粒、炭化物粒若干含む。締り、粘性ともにやや有り。
3　層：にぶい赤褐色土層　細砂　焼土を主体に炭化物多量に含む。締り、粘性ともにやや有り。
4　層：赤褐色土層　細砂　焼土。

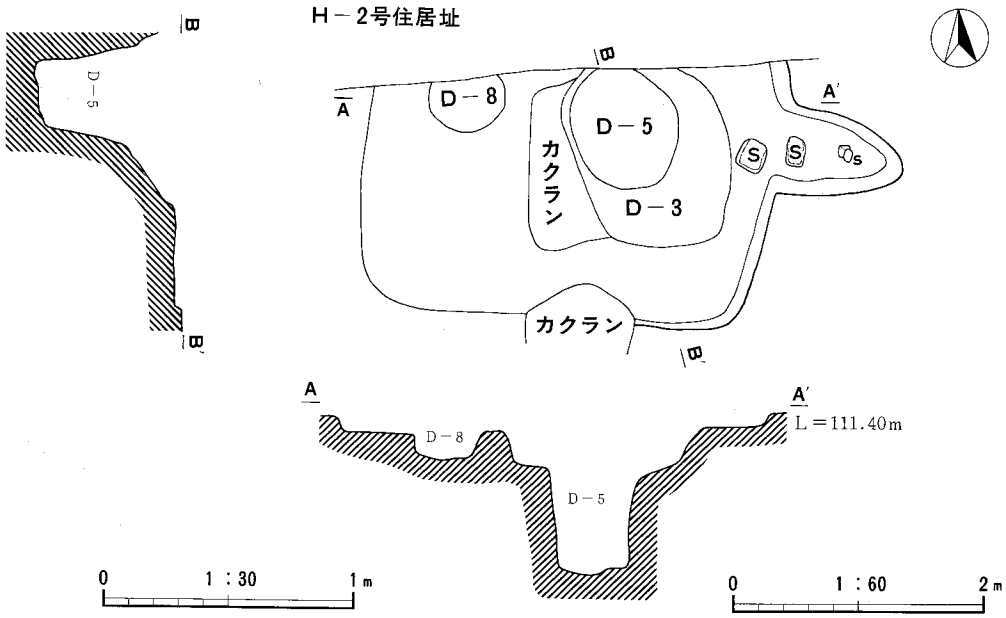
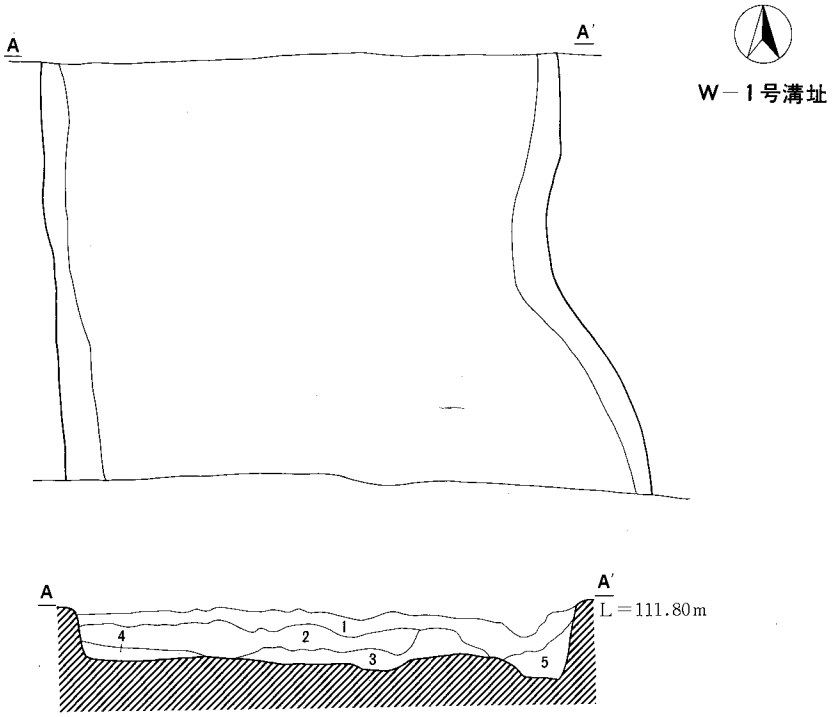
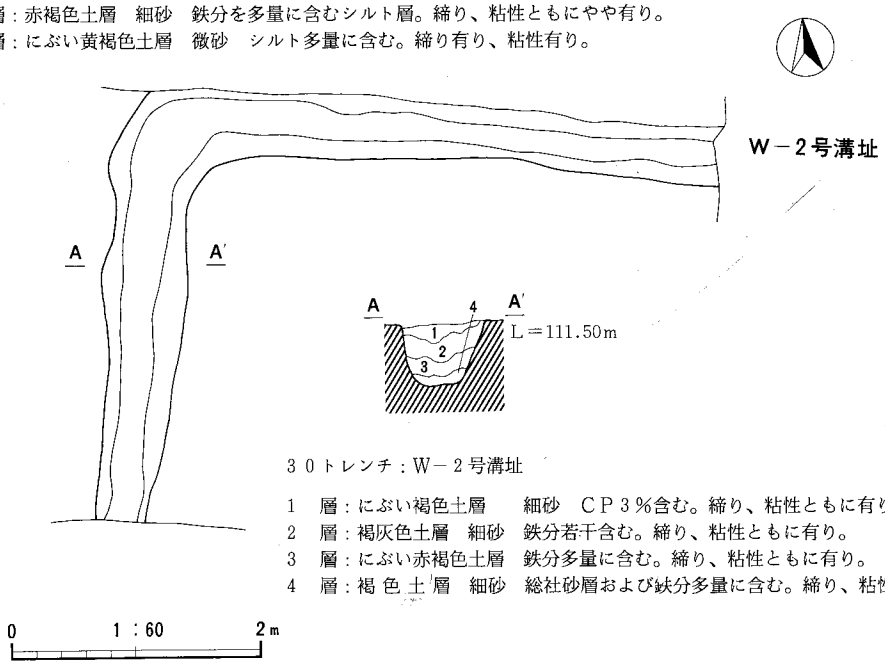


Fig. 9　30トレンチ遺構図(1)



３０トレンチ：W－１号溝址

1　層：褐色土層　細砂　Ａｓ－Ｂ５％、炭化物粒若干含む。締り、粘性ともにやや有り。
2　層：にぶい褐色土層　細砂　Ａｓ－Ｂ10％、炭化物粒若干含む。締り、粘性ともにやや有り。
3　層：褐色土層　細砂　Ａｓ－Ｂ20％、鉄分、炭化物若干含む。締り、粘性ともにやや有り。
4　層：赤褐色土層　細砂　鉄分を多量に含むシルト層。締り、粘性ともにやや有り。
5　層：にぶい黄褐色土層　微砂　シルト多量に含む。締り有り、粘性有り。

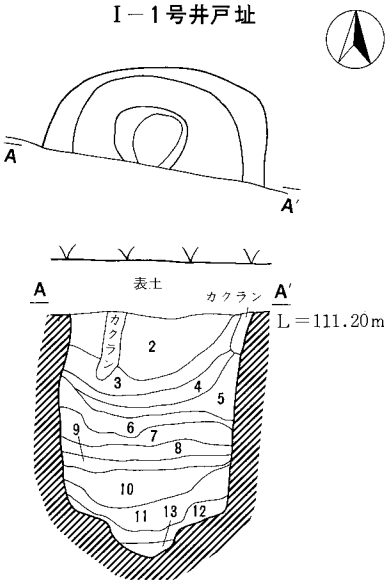


３０トレンチ：W－２号溝址

1　層：にぶい褐色土層　細砂　ＣＰ３％含む。締り、粘性ともに有り。
2　層：褐灰色土層　細砂　鉄分若干含む。締り、粘性ともに有り。
3　層：にぶい赤褐色土層　鉄分多量に含む。締り、粘性ともに有り。
4　層：褐色土層　細砂　総社砂層および鉄分多量に含む。締り、粘性ともに有り。

Fig.10　30トレンチ遺構図(2)

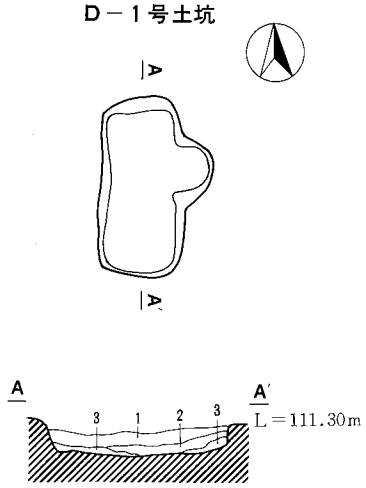
Ｉ－１号井戸址



３０トレンチ：Ｉ－１号井戸址

1　層：表土
2　層：灰褐色土層　微砂　酸化鉄を全面に含む。締り、粘性ともに有り。
3　層：黒褐色土層　微砂　締り、粘性ともに有り。
4　層：灰褐色土層　微砂　締り、粘性ともに有り。
5　層：黒褐色土層　微砂　径10㎜の炭化物を少量含む。締り、粘性ともに有り。
6　層：褐色土層　微砂　径２㎜の鉄屑全面に含む。締り、粘性ともに有り。
7　層：黒褐色土層　微砂　植物の繊維質と思われるものが含まれる。締り、粘性ともに有り。
8　層：灰褐色土層　微砂　植物の繊維質と思われるものが５％含まれる。締りなし、粘性有り。
9　層：黒色土層　微砂　植物の繊維質と思われるものが５％含まれる。締り、粘性ともになし。水分多量に含む。
10　層：黒褐色土層　微砂　植物の繊維質と思われるものが70％以上含まれる。締り、粘性ともになし。水分多量に含む。
11　層：褐色土層　微砂＋粘土質（シルト）　径１㎜の鉄屑含む。締りなし、粘性有り。
12　層：灰褐色土層　微砂＋粘土質（シルト）　径１㎜の礫を含む。締りなし、粘性強い。
13　層：灰白色土層　シルト　締りなし、粘性有り。水分多量に含む。

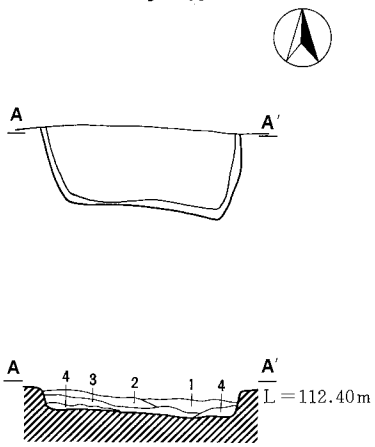
Ｄ－１号土坑



３０トレンチ：Ｄ－１号土坑

1　層：にぶい褐色土層　細砂　Ａｓ－Ｂを若干含む。締り、粘性ともに有り。
2　層：褐灰色土層　細砂　鉄分若干含む。締り、粘性ともに有り。
3　層：黒褐色土層　微砂　径10㎜の炭化物を少量含む。締り、粘性ともに有り。

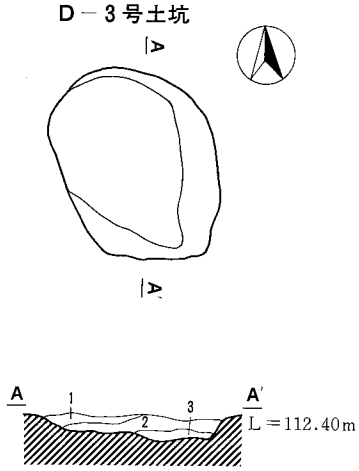
Ｄ－２号土坑



３０トレンチ：Ｄ－２号土坑

1　層：褐色土層　細砂　Ａｓ－Ｂ５％、炭化物粒若干含む。締り、粘性ともにやや有り。
2　層：褐色土層　細砂　二次堆積のＡｓ－Ｂを30％含む。締り、粘性ともになし。
3　層：黒褐色土層　細砂　Ａｓ－Ｂ30％含む。締り、粘性ともになし。
4　層：にぶい黄褐色土層　微砂　シルト多量に含む。締り、粘性ともに有り。

Ｄ－３号土坑

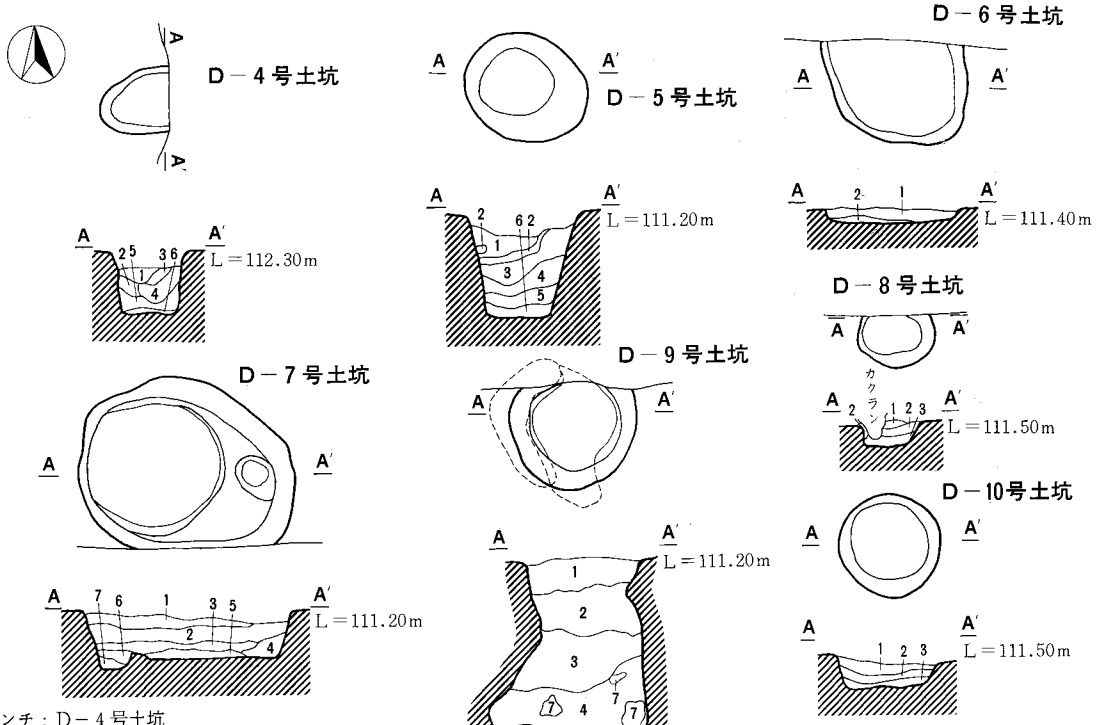


３０トレンチ：Ｄ－３号土坑

1　層：にぶい黄褐色土層　細砂　Ａｓ－Ｂを10％含む。締り、粘性ともにやや有り。
2　層：褐色土層　細砂　二次堆積のＡｓ－Ｂを30％含む。締り、粘性ともになし。
3　層：黒褐色土層　細砂　Ａｓ－Ｂ40％含む。締り、粘性ともになし。

0　1：60　2m

Fig.11　30トレンチ遺構図(3)



30トレンチ：D－4号土坑

1　層：黒褐色土層　細砂　As－B5％含む。締り、粘性ともになし。
2　層：褐灰色土層　細砂　As－B30％含む。締り、粘性ともにやや有り。
3　層：にぶい褐色土層　細砂　炭化物若干含む。締り、粘性ともにやや有り。
4　層：灰褐色土層　微砂を主体にシルト10％含む。締り、粘性ともに有り。
5　層：褐灰色土層　微砂＋シルト混土層。締り、粘性ともに有り。
6　層：黒褐色土層　シルト層。締り、粘性ともに強い。

30トレンチ：D－5号土坑

1　層：灰黄褐色土層　細砂　黄褐色の粘土質をブロック状に含む。締り、粘性ともに有り。
2　層：黒色土層　微砂　締りなし、粘性有り。水分多量に含む。
3　層：褐灰色土層　細砂　焼土ブロック含む。締り、粘性ともに有り。
4　層：灰褐色土層　微砂を主体にシルト10％含む。植物繊維含む。締り、粘性強い。
5　層：褐灰色土層　微砂＋シルト混土層。植物繊維含む。締り、粘性強い。
6　層：黒褐色土層　シルト層。締り、粘性ともに強い。

30トレンチ：D－6号土坑

1　層：にぶい褐色土層　細砂　As－C10％、焼土粒若干含む。締り、粘性ともにやや有り。
2　層：灰褐色土層　細砂　炭化物若干含む。締り、粘性ともにやや有り。

30トレンチ：D－7号土坑

1　層：にぶい褐色土層　細砂　As－B5％、炭化物粒若干含む。締り、粘性ともになし。
2　層：灰黄褐色土層　細砂　灰黄褐色の粘土質をブロック状に含む。
3　層：灰褐色土層　細砂　As－B30％含む。締り、粘性ともにやや有り。
4　層：褐灰色土層　細砂　炭化物若干含む。締り、粘性ともにやや有り。
5　層：灰褐色土層　微砂を主体にシルト10％含む。締り、粘性ともに有り。
6　層：褐灰色土層　微砂＋シルト混土層。締り、粘性ともに有り。
7　層：黒褐色土層　シルト層。締り、粘性ともに強い。

30トレンチ：D－8号土坑

1　層：灰褐色土層　細砂　鉄分凝結質若干含む。締り、粘性ともに有り。
2　層：褐色土層　細砂　部分的に径50㎜の鉄屑含む。締り、粘性ともに有り。
3　層：褐色土層　細砂　鉄分凝結質若干含む。締り、粘性ともに有り。

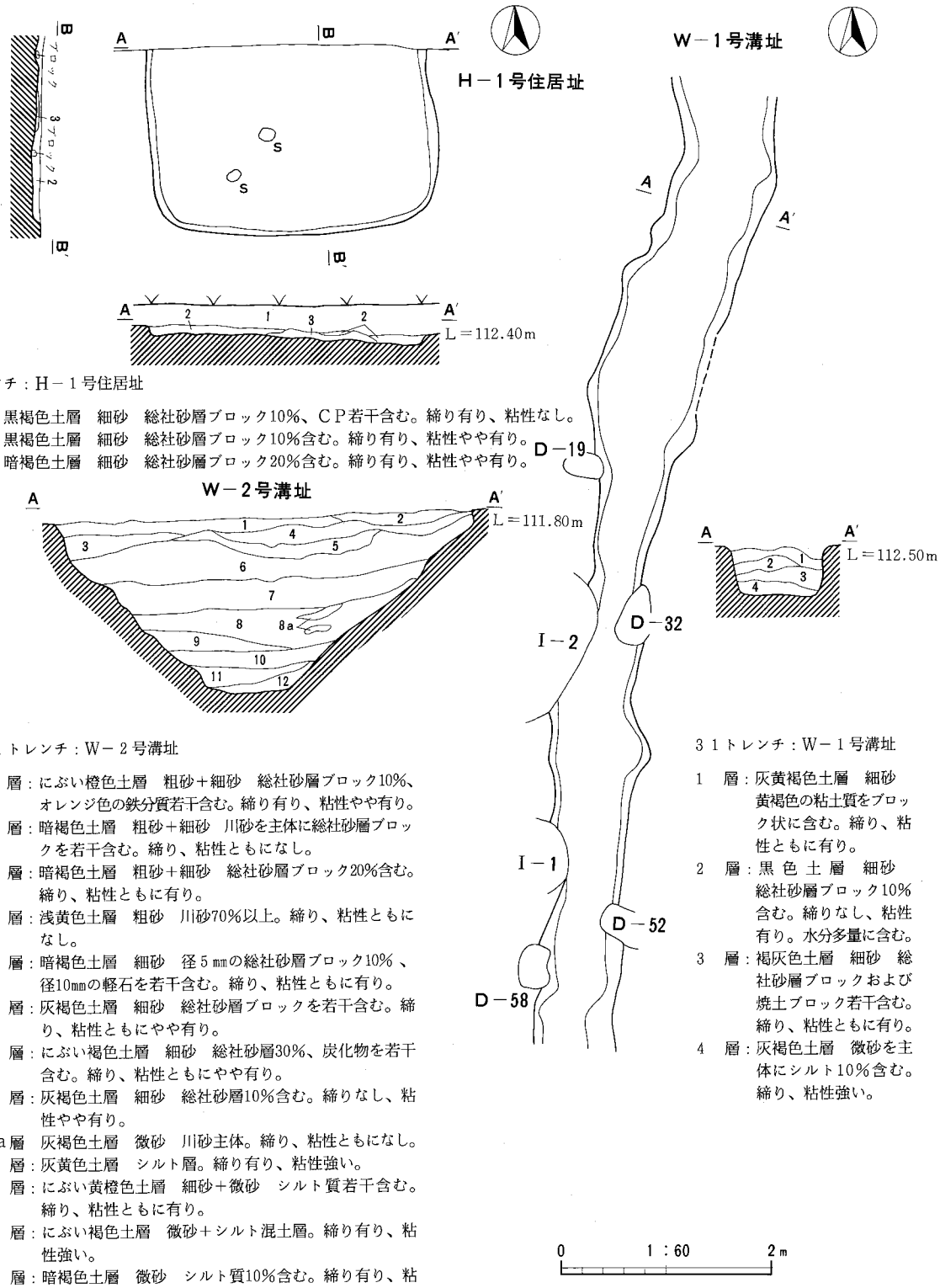
30トレンチ：D－9号土坑

1　層：にぶい黄褐色土層　細砂　As－Bを10％含む。締り、粘性ともにやや有り。
2　層：褐色土層　細砂　二次堆積のAs－Bを10％含む。締り、粘性ともになし。
3　層：黒褐色土層　細砂　As－B40％含む。締り、粘性ともになし。
4　層：灰褐色土層　微砂を主体にシルト若干含む。締り、粘性強い。
5　層：褐灰色土層　微砂＋シルト混土層。植物繊維含む。締り、粘性強い。
6　層：灰褐色土層　微砂＋粘土質（シルト）径1㎜の礫を含む。締りなし、粘性強い。
7　層：黒褐色土層　シルト層。締り、粘性ともに強い。

30トレンチ：D－10号土坑

1　層：褐色土層　細砂　ブロック状に鉄分の塊を含む。締り、粘性ともにやや有り。
2　層：黒褐色土層　細砂　総社砂層ブロック。鉄分少量含む。締り、粘性ともに有り。
3　層：灰褐色土層　細砂　総社砂層ブロック多量に含む。締り、粘性ともに有り。

Fig.12　30トレンチ遺構図(4)



31トレンチ：H－1号住居址

1　層：黒褐色土層　細砂　総社砂層ブロック10%、CP若干含む。締り有り、粘性なし。
2　層：黒褐色土層　細砂　総社砂層ブロック10%含む。締り有り、粘性やや有り。
3　層：暗褐色土層　細砂　総社砂層ブロック20%含む。締り有り、粘性やや有り。

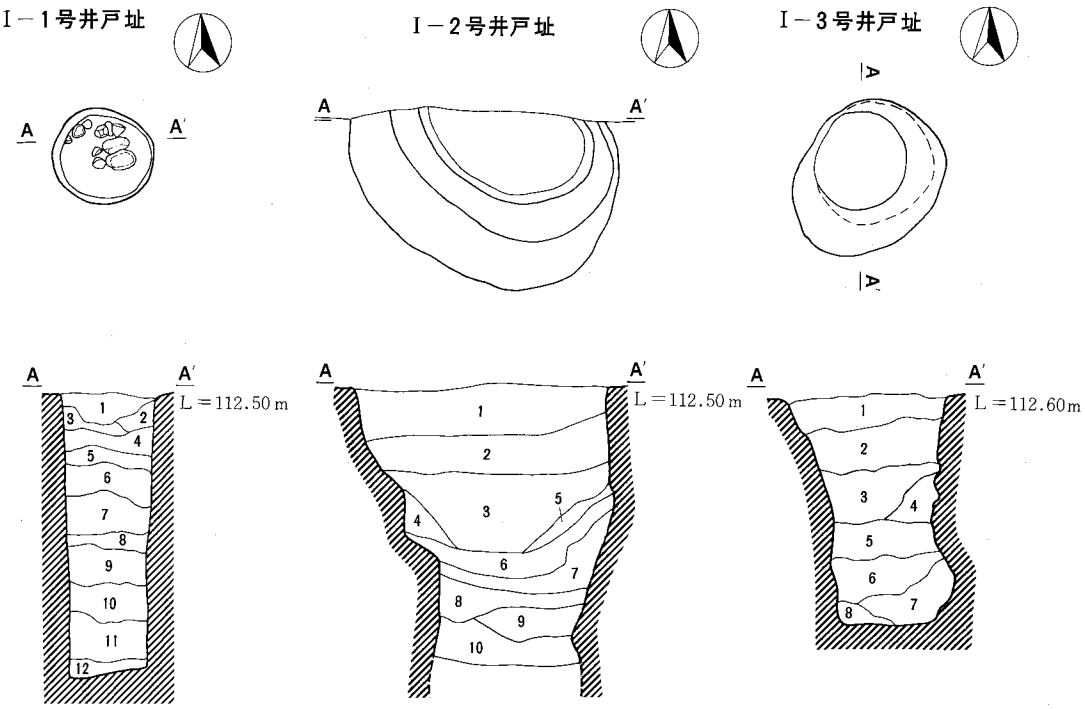
31トレンチ：W－2号溝址

1　層：にぶい橙色土層　粗砂＋細砂　総社砂層ブロック10%、オレンジ色の鉄分質若干含む。締り有り、粘性やや有り。
2　層：暗褐色土層　粗砂＋細砂　川砂を主体に総社砂層ブロックを若干含む。締り、粘性ともになし。
3　層：暗褐色土層　粗砂＋細砂　総社砂層ブロック20%含む。締り、粘性ともに有り。
4　層：浅黄色土層　粗砂　川砂70%以上。締り、粘性ともになし。
5　層：暗褐色土層　細砂　径5㎜の総社砂層ブロック10%、径10㎜の軽石を若干含む。締り、粘性ともに有り。
6　層：灰褐色土層　細砂　総社砂層ブロックを若干含む。締り、粘性ともにやや有り。
7　層：にぶい褐色土層　細砂　総社砂層30%、炭化物を若干含む。締り、粘性ともにやや有り。
8　層：灰褐色土層　細砂　総社砂層10%含む。締りなし、粘性やや有り。
8a層　灰褐色土層　微砂　川砂主体。締り、粘性ともになし。
9　層：灰黄色土層　シルト層。締り有り、粘性強い。
10　層：にぶい黄橙色土層　細砂＋微砂　シルト質若干含む。締り、粘性ともに有り。
11　層：にぶい褐色土層　微砂＋シルト混土層。締り有り、粘性強い。
12　層：暗褐色土層　微砂　シルト質10%含む。締り有り、粘性強い。

31トレンチ：W－1号溝址

1　層：灰黄褐色土層　細砂　黄褐色の粘土質をブロック状に含む。締り、粘性ともに有り。
2　層：黒色土層　細砂　総社砂層ブロック10%含む。締りなし、粘性有り。水分多量に含む。
3　層：褐灰色土層　細砂　総社砂層ブロックおよび焼土ブロック若干含む。締り、粘性ともに有り。
4　層：灰褐色土層　微砂を主体にシルト10%含む。締り、粘性強い。

Fig.13　31トレンチ遺構図(1)



31トレンチ：Ⅰ－1号井戸址

1　層：褐色土層　細砂　総社砂層ブロック10%含む。締り、粘性ともに有り。
2　層：黒褐色土層　細砂　総社砂層ブロックおよび炭化物若干含む。締り、粘性ともに有り。
3　層：灰黄褐色土層　微砂　総社砂層ブロック30%含む。締り、粘性ともに有り。
4　層：黒褐色土層　細砂　径10㎜の炭化物を少量含む。締り、粘性ともに有り。
5　層：褐色土層　微砂　径2㎜の礫を全面に含む。締り、粘性ともに有り。
6　層：にぶい褐色土層　微砂　締り、粘性ともに有り。
7　層：褐灰色土層　微砂　植物の繊維質を5%含む。締りなし、粘性有り。
8　層：黒色土層　微砂　植物の繊維質を70%以上含む。締り、粘性なし。水分多量に含む。
9　層：黒褐色土層　微砂　植物の繊維質を10%含む。締り、粘性ともになし。
10　層：灰黄褐色土層　微砂＋シルト　径1㎜の鉄屑含む。締りなし、粘性有り。
11　層：灰褐色土層　微砂＋シルト　径1㎜の礫を含む。締りなし、粘性強い。
12　層：灰白色土層　シルト　締りなし、粘性有り。水分多量に含む。

31トレンチ：Ⅰ－2号井戸址

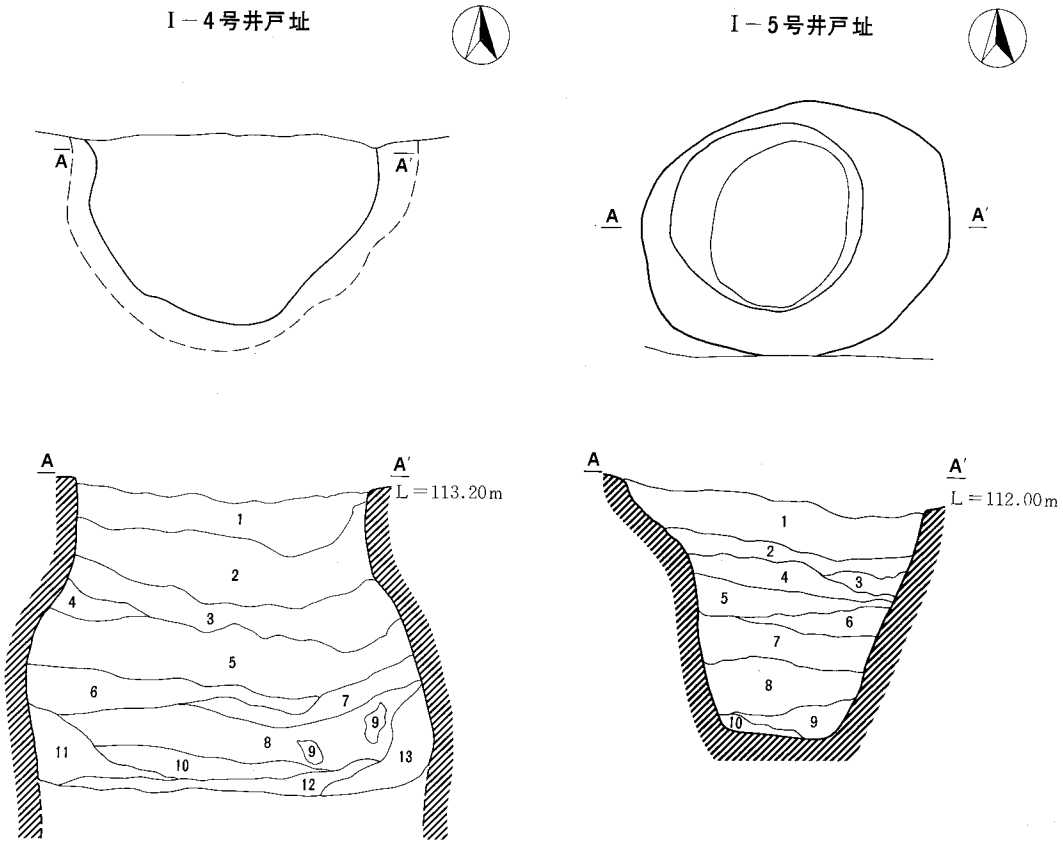
1　層：にぶい橙色土層　細砂　オレンジ色の鉄分質若干含む。締り、粘性ともに有り。
2　層：褐色土層　細砂　炭化物、総社砂層ブロックを若干含む。締り、粘性ともに有り。
3　層：にぶい褐色土層　細砂　径2㎜の礫30%含む。締り、粘性ともに有り。
4　層：暗褐色土層　微砂　総社砂層ブロックを若干含む。締り、粘性ともに有り。
5　層：にぶい褐色土層　微砂　径5㎜の炭化物粒10%含む。締り、粘性ともに有り。
6　層：黒色土層　微砂　径10㎜の炭化物粒若干含む。締りなし、粘性有り。
7　層：灰褐色土層　微砂　径2㎜の礫を30%含む。締り、粘性なし。
8　層：にぶい橙色土層　微砂　締り、粘性ともに有り。
9　層：灰褐色土層　微砂＋シルト　締りなし、粘性強い。
10　層：灰白色土層　シルト　締りなし、粘性有り。水分多量に含む。

31トレンチ：Ⅰ－3号井戸址

1　層：明褐色土層　細砂　径5㎜の炭化物粒10%含む。締り、粘性ともに有り。
2　層：にぶい赤褐色土層　微砂　オレンジ色の鉄分質を全面に含む。締り、粘性ともにやや有り。
3　層：にぶい褐色土層　細砂　径30㎜の総社砂層ブロック30%含む。締り、粘性ともに有り。
4　層：暗褐色土層　微砂　総社砂層ブロックを若干含む。締り、粘性ともに有り。
5　層：灰黄褐色土層　細砂＋微砂　径10㎜の総社砂層ブロック全面に含む。締り、粘性ともに有り。
6　層：灰褐色土層　微砂　径2㎜の礫を10%含む。締り、粘性なし。
7　層：黒色土層　シルト層。締り有り、粘性強い。
8　層：にぶい橙色土層　シルト層。締り、粘性ともに有り。水分を多量に含む。

0　1：60　2m

Fig.14　31トレンチ遺構図(2)



31トレンチ：Ⅰ－4号井戸址

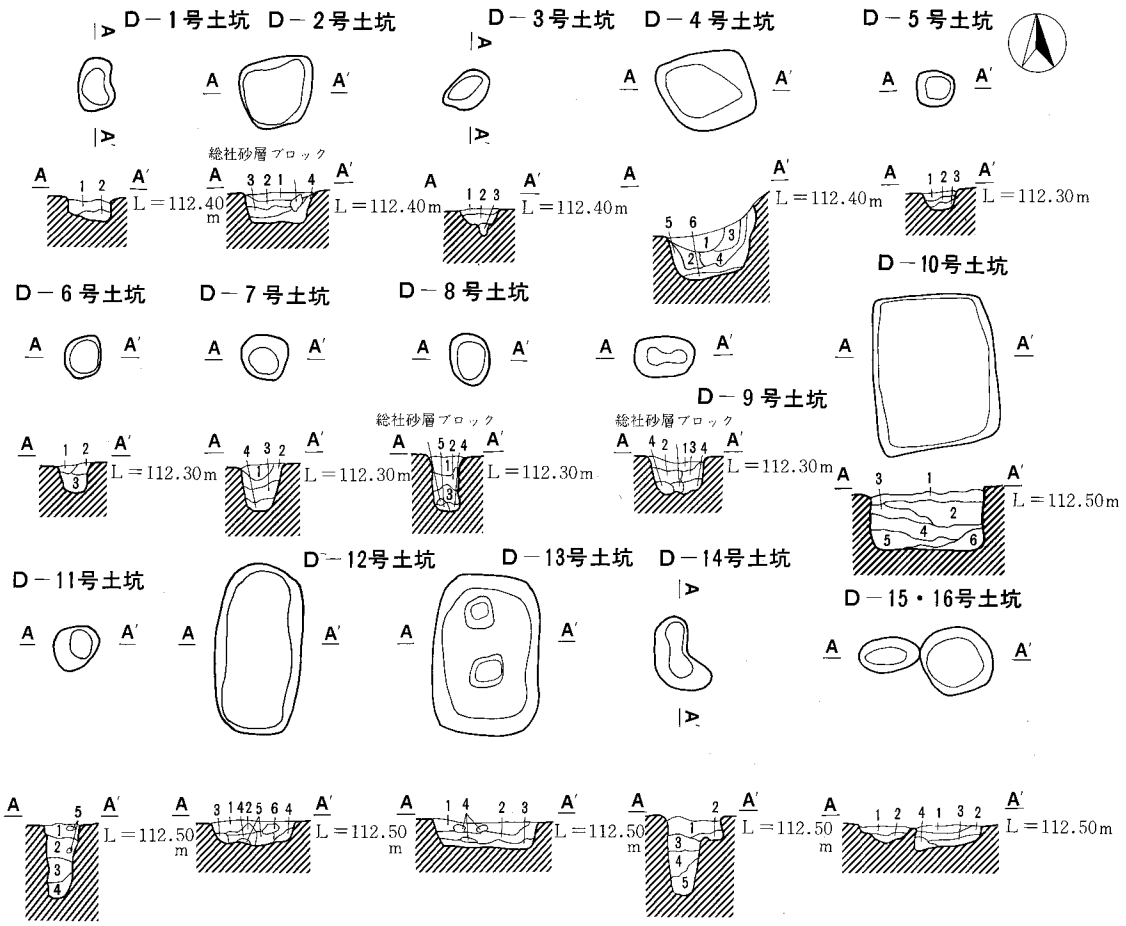
1　層：にぶい黄褐色土層　細砂　径10㎜の炭化物を若干含む。
2　層：暗褐色土層　細砂　総社砂層ブロック若干含む。締り、粘性ともに有り。
3　層：灰白色土層　粗砂　径2㎜の礫層。締り、粘性ともになし。
4　層：褐色土層　微砂　総社砂層をブロック状に30％含む。締り、粘性ともに有り。
5　層：にぶい褐色土層　微砂　径1㎜の鉄分質全面に含む。締り、粘性ともに有り。
6　層：灰黄褐色土層　シルト　締り、粘性ともに有り。
7　層：灰褐色土層　シルト　締り、粘性ともに有り。
8　層：明褐色土層　シルト　締りなし、粘性有り。
9　層：黒色土層　シルト　径5㎜の炭化物10％含む。締り、粘性なし。
10　層：オリーブ灰色土層　シルト　植物性繊維質が主体。締り、粘性ともになし。水分多量に含む。
11　層：黒褐色土層　シルト　締りなし、粘性有り。
12　層：灰褐色土層　シルト　締りなし、粘性強い。
13　層：灰白色土層　シルト　締りなし、粘性有り。水分多量に含む。

31トレンチ：Ⅰ－5号井戸址

1　層：にぶい橙色土層　細砂　総社砂層ブロックを全面に含む。
2　層：にぶい赤褐色土層　微砂　径10㎜の鉄屑および鉄分質を多量に含む。締り有り、粘性やや有り。
3　層：褐灰色土層　粗砂　径2㎜の砂層。
4　層：暗褐色土層　微砂　径10㎜の総社砂層ブロックを全面に含む。締り有り、粘性やや有り。
5　層：黒褐色土層　シルト　締り、粘性ともに有り。
6　層：灰白色土層　シルト　締り有り、粘性なし。
7　層：灰褐色土層　微砂　総社砂層ブロック10％、炭化物粒10％含む。締り、粘性ともに有り。
8　層：暗褐色土層　微砂＋シルト　水分を多量に含む。締りなし、粘性有り。
9　層：にぶい褐色土層　シルト　締りなし、粘性強い。
10　層：黒褐色土層　シルト　締りなし、粘性有り。

0　1：60　2m

Fig.15　31トレンチ遺構図(3)



3 1トレンチ：D－1号土坑

1　層：にぶい赤褐色土層　細砂
2　層：にぶい褐色土層　細砂

3 1トレンチ：D－2号土坑

1　層：にぶい橙色土層　細砂
2　層：にぶい褐色土層　細砂
3　層：暗褐色土層　細砂
4　層：褐色土層　細砂

3 1トレンチ：D－3号土坑

1　層：にぶい橙色土層　細砂
2　層：にぶい褐色土層　細砂
3　層：灰褐色土層　微砂

3 1トレンチ：D－4号土坑

1　層：褐灰色土層　細砂
2　層：黒褐色土層　細砂
3　層：褐灰色土層　細砂
4　層：暗褐色土層　細砂
5　層：にぶい橙色土層　細砂
6　層：淡い橙色土層　細砂

3 1トレンチ：D－5号土坑

1　層：にぶい褐色土層　細砂
2　層：褐色土層　細砂
3　層：明褐色土層　細砂

3 1トレンチ：D－6号土坑

1　層：にぶい褐色土層　細砂
2　層：にぶい褐色土層　細砂
3　層：褐色土層　細砂

3 1トレンチ：D－7号土坑

1　層：にぶい褐色土層　細砂
2　層：にぶい褐色土層　細砂
3　層：灰褐色土層　細砂
4　層：橙色土層　細砂

3 1トレンチ：D－8号土坑

1　層：にぶい褐色土層　細砂
2　層：にぶい橙色土層　細砂
3　層：にぶい橙色土層　細砂
4　層：褐色土層　細砂
5　層：褐色土層　細砂

3 1トレンチ：D－9号土坑

1　層：にぶい褐色土層　細砂
2　層：にぶい褐色土層　細砂
3　層：褐色土層　細砂
4　層：にぶい褐色土層　細砂

3 1トレンチ：D－10号土坑

1　層：暗赤褐色土層　細砂
2　層：にぶい橙色土層　細砂
3　層：灰褐色土層　細砂
4　層：暗褐色土層　細砂＋微砂
5　層：灰黄褐色土層　微砂
6　層：暗褐色土層　微砂

3 1トレンチ：D－11号土坑

1　層：褐色土層　細砂
2　層：暗褐色土層　細砂
3　層：黒褐色土層　細砂
4　層：褐色土層　細砂
5　層：灰白色土層　粗砂

3 1トレンチ：D－12号土坑

1　層：黒褐色土層　細砂
2　層：黒色土層　細砂
3　層：にぶい黄褐色土層　細砂
4　層：灰褐色土層　シルト
5　層：褐灰色土層　細砂
6　層：にぶい黄橙色土層　細砂

3 1トレンチ：D－13号土坑

1　層：にぶい褐色土層　細砂
2　層：褐色土層　細砂
3　層：にぶい褐色土層　細砂
4　層：にぶい黄褐色土層　細砂

3 1トレンチ：D－14号土坑

1　層：黒褐色土層　細砂
2　層：黒色土層　細砂
3　層：にぶい黄褐色土層　細砂
4　層：灰褐色土層　シルト
5　層：褐灰色土層　シルト

3 1トレンチ：D－15号土坑

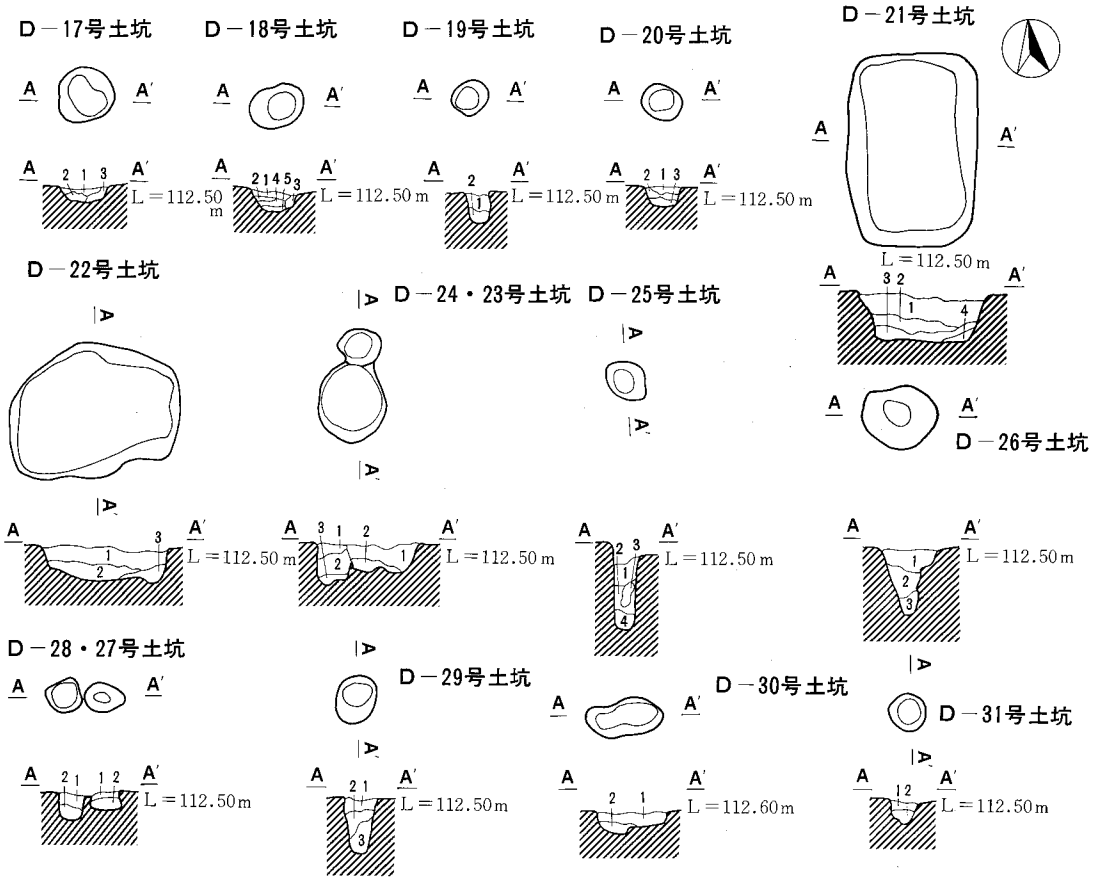
1　層：褐色土層　細砂
2　層：にぶい黄褐色土層　細砂

3 1トレンチ：D－16号土坑

1　層：褐色土層　細砂
2　層：にぶい褐色土層　細砂
3　層：暗褐色土層　細砂
4　層：灰褐色土層　細砂

0　1：60　2m

Fig. 16　31トレンチ遺構図(4)



31トレンチ：D－17号土坑

1　層：にぶい黄褐色土層　細砂
2　層：灰黄褐色土層　細砂
3　層：暗褐色土層　細砂

31トレンチ：D－18号土坑

1　層：にぶい黄褐色土層　細砂
2　層：黒色土層　細砂
3　層：褐色土層　細砂
4　層：灰褐色土層　細砂
5　層：褐灰色土層　細砂

31トレンチ：D－19号土坑

1　層：褐色土層　細砂
2　層：黒褐色土層　細砂

31トレンチ：D－20号土坑

1　層：にぶい黄褐色土層　細砂
2　層：褐色土層　細砂
3　層：暗褐色土層　細砂

31トレンチ：D－21号土坑

1　層：にぶい橙色土層　細砂
2　層：黒色土層　細砂
3　層：褐色土層　細砂
4　層：灰褐色土層　細砂

31トレンチ：D－22号土坑

1　層：褐色土層　細砂
2　層：黒色土層　細砂
3　層：黄褐色土層　細砂＋シルト

31トレンチ：D－23号土坑

1　層：にぶい褐色土層　細砂
2　層：暗褐色土層　細砂

31トレンチ：D－24号土坑

1　層：にぶい褐色土層　細砂
2　層：暗褐色土層　細砂
3　層：灰褐色土層　微砂

31トレンチ：D－25号土坑

1　層：褐色土層　細砂
2　層：黒色土層　細砂
3　層：褐灰色土層　粗砂
4　層：灰褐色土層　細砂

31トレンチ：D－26号土坑

1　層：にぶい褐色土層　細砂
2　層：暗褐色土層　粗砂
3　層：褐灰色土層　細砂

31トレンチ：D－27号土坑

1　層：黒色土層　細砂
2　層：黄褐色土層　細砂＋シルト

31トレンチ：D－28号土坑

1　層：黒色土層　細砂
2　層：黄褐色土層　細砂＋シルト

31トレンチ：D－29号土坑

1　層：にぶい褐色土層　細砂
2　層：にぶい褐色土層　細砂
3　層：褐色土層　細砂

31トレンチ：D－30号土坑

1　層：にぶい褐色土層　細砂
2　層：褐色土層　細砂

31トレンチ：D－31号土坑

1　層：にぶい褐色土層　細砂
2　層：暗褐色土層　細砂

Fig. 17　31トレンチ遺構図(5)

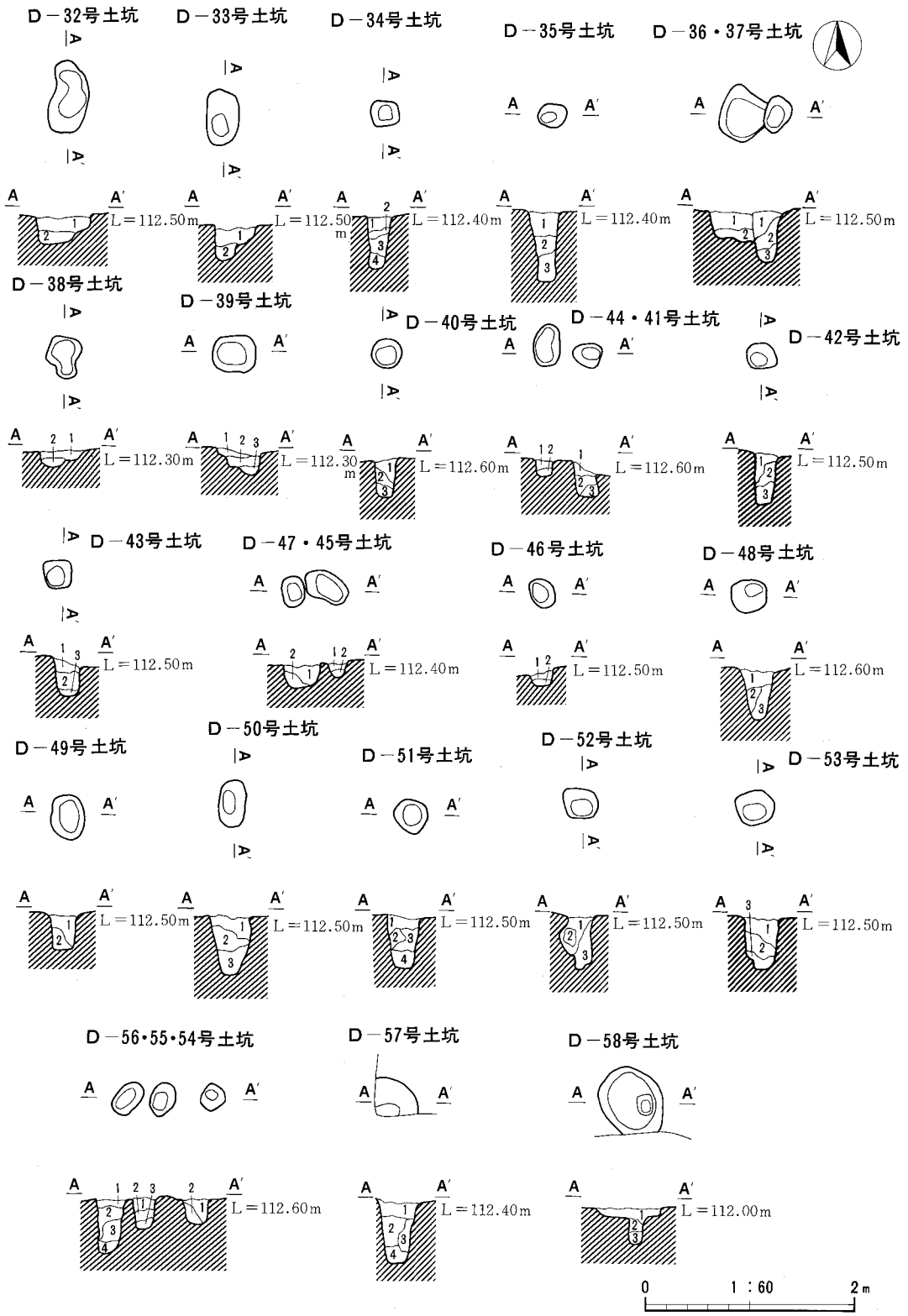


Fig. 18　31トレンチ遺構図(6)

３１トレンチ：Ｄ－32号土坑

1　層：灰褐色土層　細砂
2　層：にぶい黄褐色土層　細砂

３１トレンチ：Ｄ－33号土坑

1　層：黒 色 土 層　細砂
2　層：黄褐色土層　細砂＋シルト

３１トレンチ：Ｄ－34号土坑

1　層：にぶい褐色土層　細砂
2　層：黒 色 土 層　細砂
3　層：褐灰色土層　細砂
4　層：灰褐色土層　細砂

３１トレンチ：Ｄ－35号土坑

1　層：暗褐色土層　細砂
2　層：褐 色 土 層　細砂
3　層：灰褐色土層　微砂

３１トレンチ：Ｄ－36号土坑

1　層：暗褐色土層　細砂
2　層：褐 色 土 層　粗砂＋細砂

３１トレンチ：Ｄ－37号土坑

1　層：暗褐色土層　細砂
2　層：褐 色 土 層　粗砂＋細砂
3　層：灰褐色土層　細砂

３１トレンチ：Ｄ－38号土坑

1　層：にぶい褐色土層　細砂
2　層：暗褐色土層　細砂

３１トレンチ：Ｄ－39号土坑

1　層：褐 色 土 層　細砂
2　層：黒 色 土 層　細砂
3　層：灰褐色土層　細砂

３１トレンチ：Ｄ－40号土坑

1　層：にぶい黄褐色土層　細砂
2　層：褐 色 土 層　粗砂＋細砂
3　層：灰褐色土層　細砂

３１トレンチ：Ｄ－41号土坑

1　層：暗褐色土層　細砂
2　層：褐 色 土 層　細砂
3　層：灰褐色土層　細砂

３１トレンチ：Ｄ－42号土坑

1　層：にぶい黄褐色土層　細砂
2　層：にぶい褐色土層　細砂
3　層：灰褐色土層　細砂

３１トレンチ：Ｄ－43号土坑

1　層：黒 色 土 層　細砂
2　層：褐 色 土 層　細砂
3　層：黄褐色土層　細砂＋シルト

３１トレンチ：Ｄ－44号土坑

1　層：暗褐色土層　細砂
2　層：褐 色 土 層　細砂

３１トレンチ：Ｄ－45号土坑

1　層：褐 色 土 層　細砂
2　層：黒 色 土 層　細砂

３１トレンチ：Ｄ－46号土坑

1　層：褐 色 土 層　細砂
2　層：黒 色 土 層　細砂

３１トレンチ：Ｄ－47号土坑

1　層：褐 色 土 層　細砂
2　層：黒 色 土 層　細砂

３１トレンチ：Ｄ－48号土坑

1　層：にぶい褐色土層　細砂
2　層：褐 色 土 層　細砂
3　層：灰褐色土層　細砂

３１トレンチ：Ｄ－49号土坑

1　層：灰黄褐色土層　細砂
2　層：黒 色 土 層　細砂

３１トレンチ：Ｄ－50号土坑

1　層：にぶい褐色土層　細砂
2　層：褐 色 土 層　細砂
3　層：灰褐色土層　微砂

３１トレンチ：Ｄ－51号土坑

1　層：黄褐色土層　細砂
2　層：褐 色 土 層　細砂
3　層：にぶい橙色土層　細砂
4　層：灰褐色土層　細砂

３１トレンチ：Ｄ－52号土坑

1　層：にぶい黄褐色土層　細砂
2　層：褐白色土層　粗砂
3　層：にぶい橙色土層　細砂

３１トレンチ：Ｄ－53号土坑

1　層：にぶい褐色土層　細砂
2　層：褐 色 土 層　細砂
3　層：灰褐色土層　細砂

３１トレンチ：Ｄ－54号土坑

1　層：にぶい赤褐色土層　細砂
2　層：にぶい褐色土層　細砂

３１トレンチ：Ｄ－55号土坑

1　層：にぶい赤褐色土層　細砂
2　層：暗褐色土層　細砂
3　層：褐灰色土層　細砂

３１トレンチ：Ｄ－56号土坑

1　層：にぶい赤褐色土層　細砂
2　層：暗褐色土層　細砂
3　層：褐灰色土層　細砂
4　層：灰褐色土層　細砂

３１トレンチ：Ｄ－57号土坑

1　層：灰褐色土層　細砂
2　層：にぶい橙色土層　細砂
3　層：にぶい褐色土層　細砂
4　層：黄褐色土層　細砂＋シルト

３１トレンチ：Ｄ－58号土坑

1　層：にぶい赤褐色土層　細砂
2　層：黄褐色土層　細砂
3　層：褐灰色土層　細砂

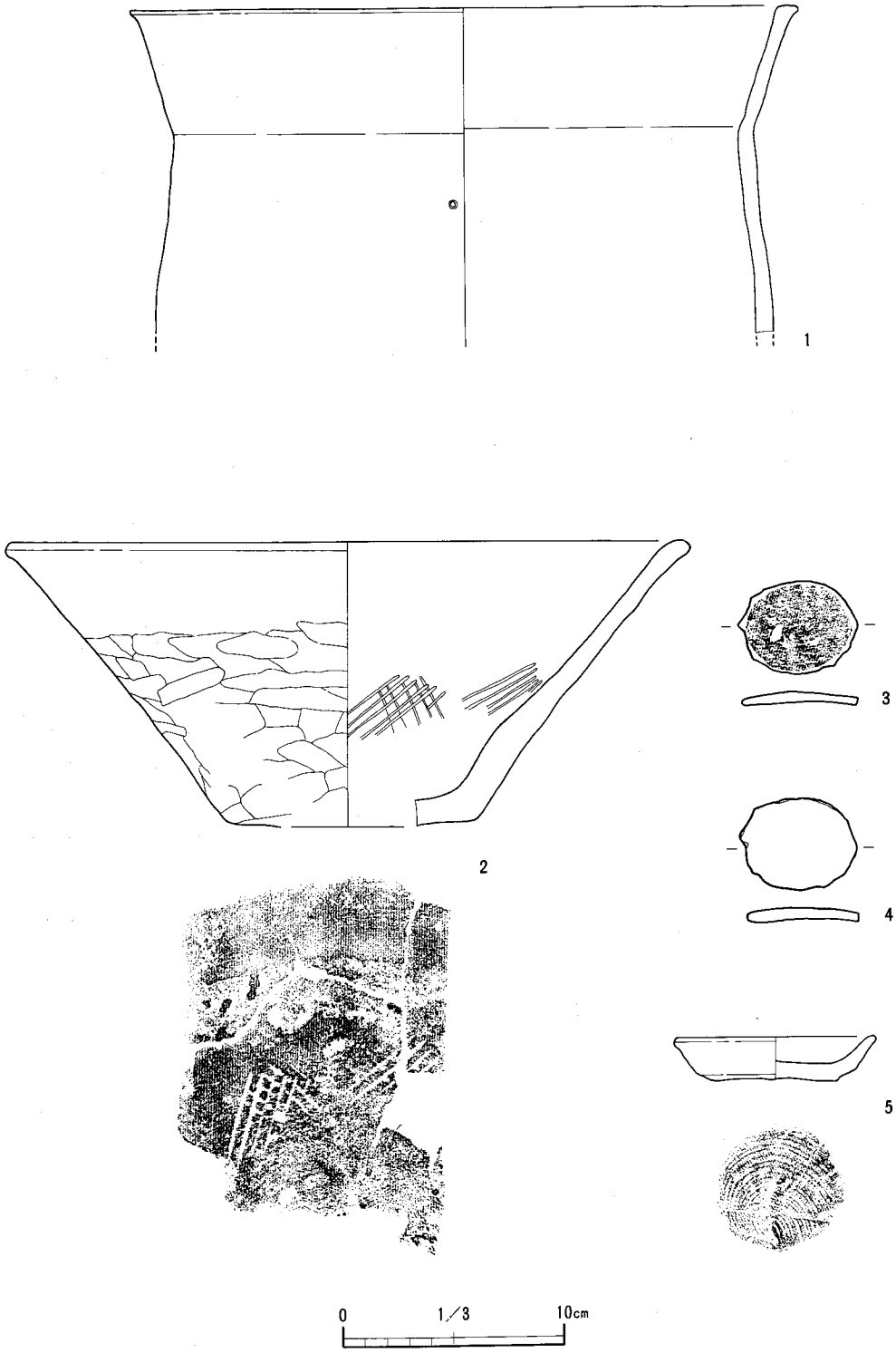


Fig.19　28トレンチ出土遺物

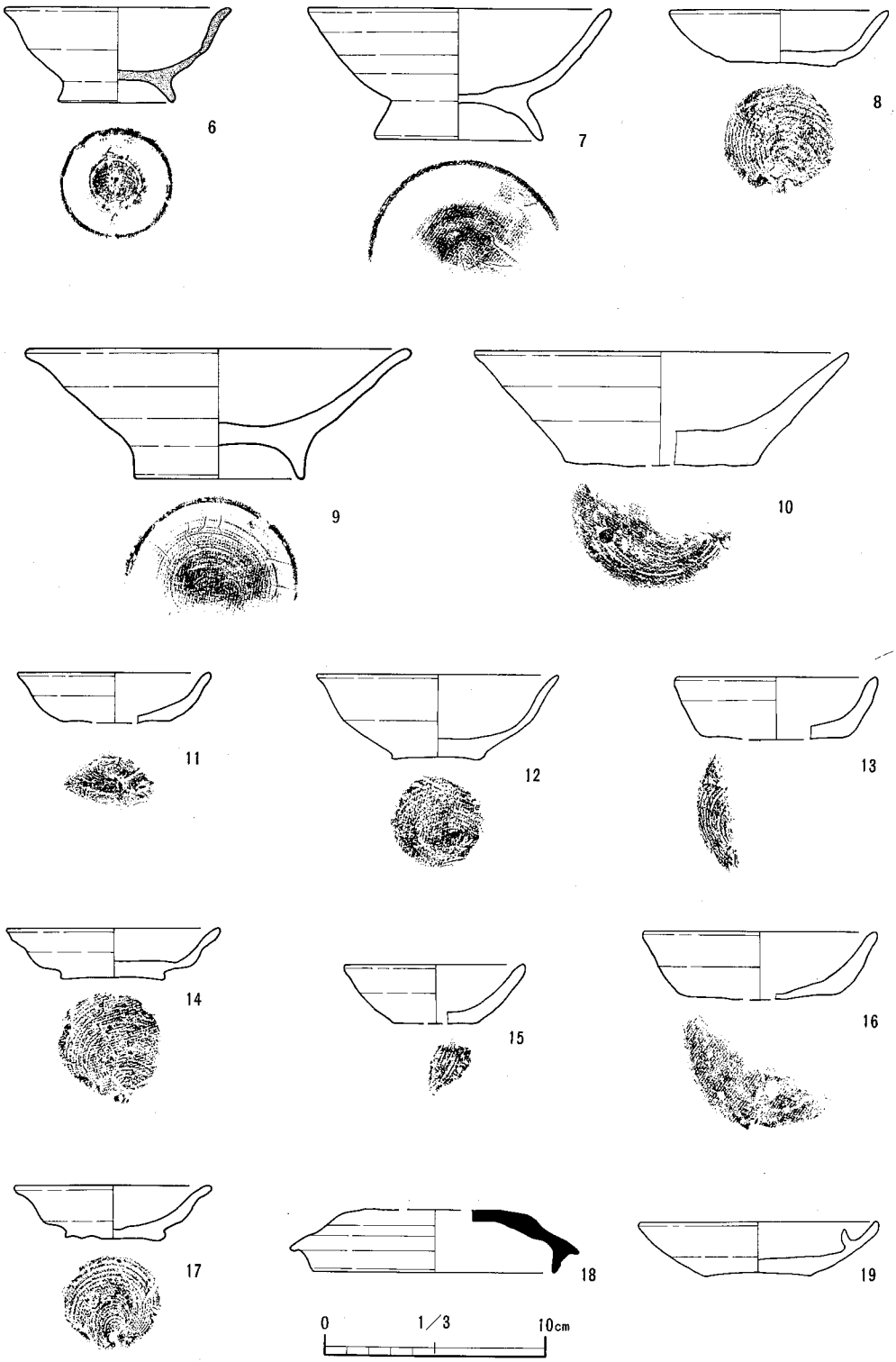


Fig.20　30トレンチ出土遺物

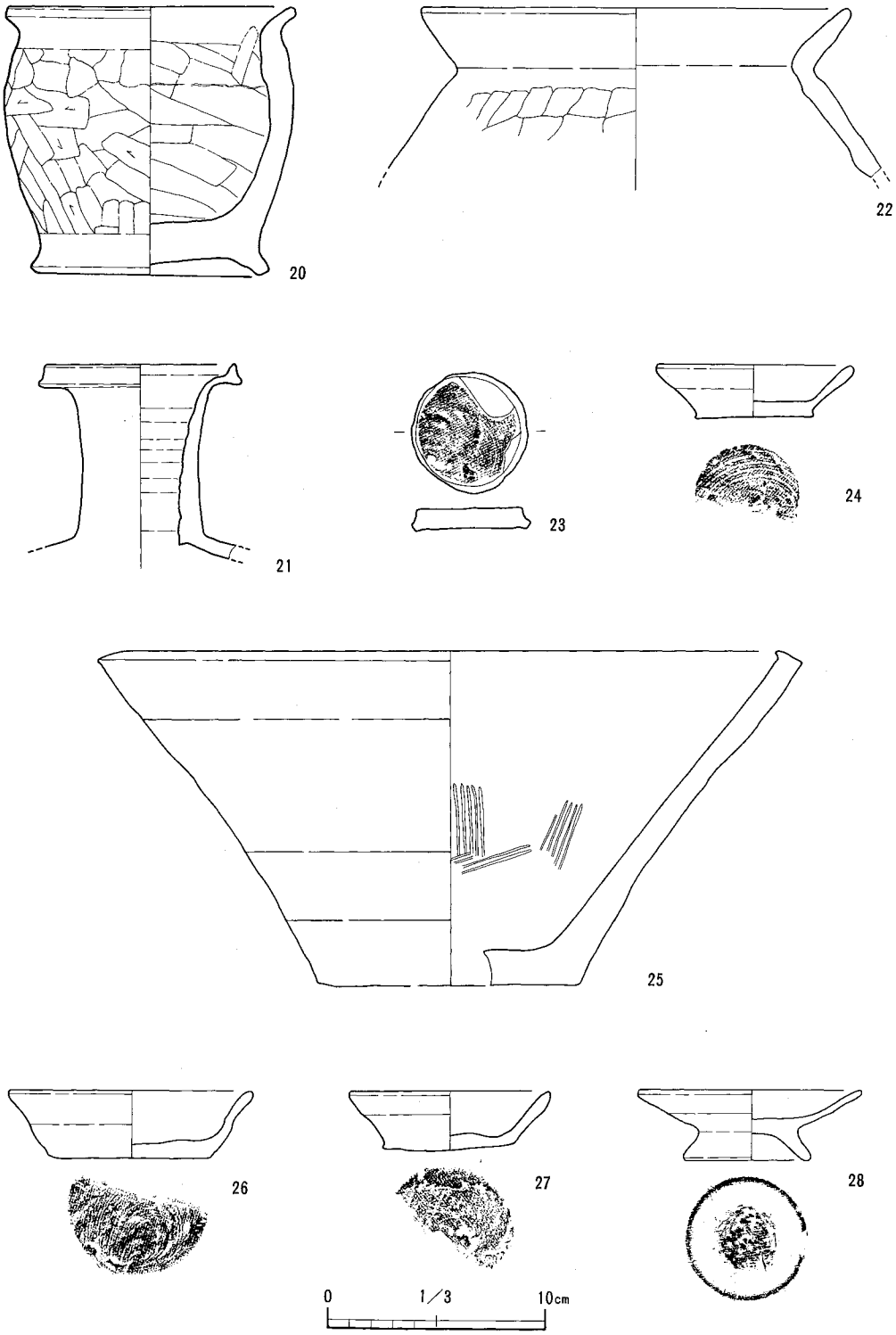


Fig.21　30・31トレンチ出土遺物

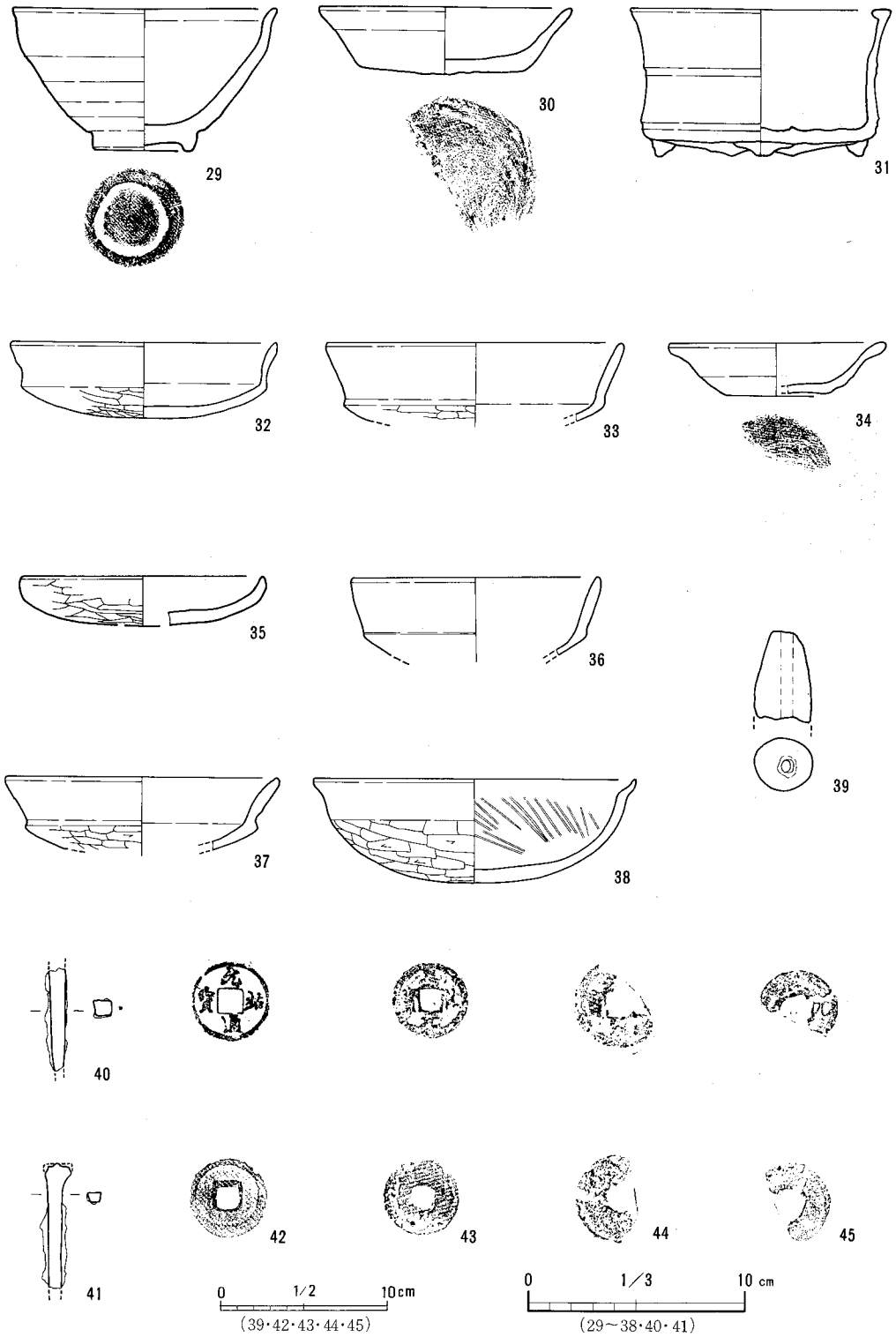


Fig.22　31トレンチ出土遺物

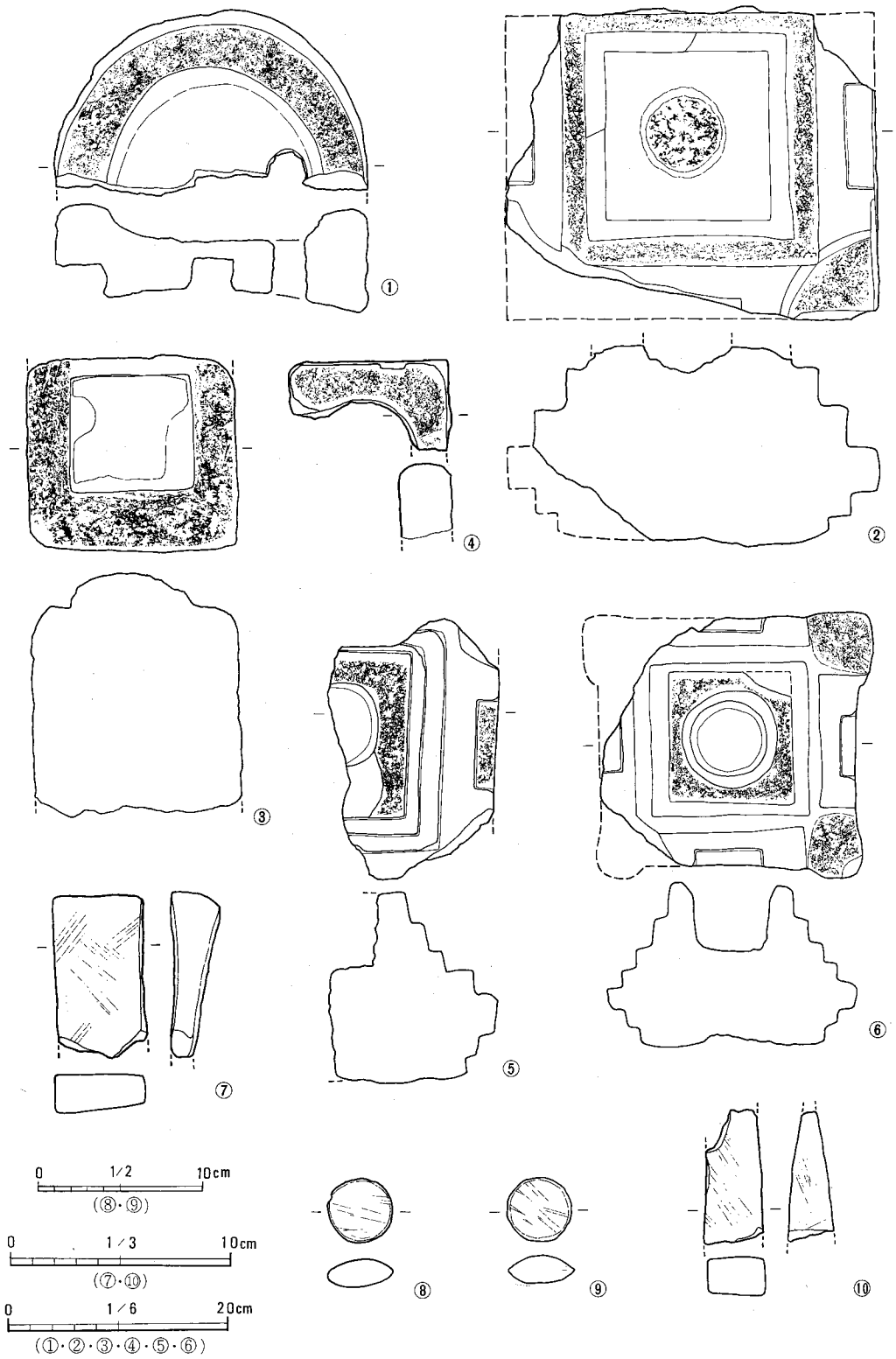


Fig. 23 28・30トレンチ石製品・土製品

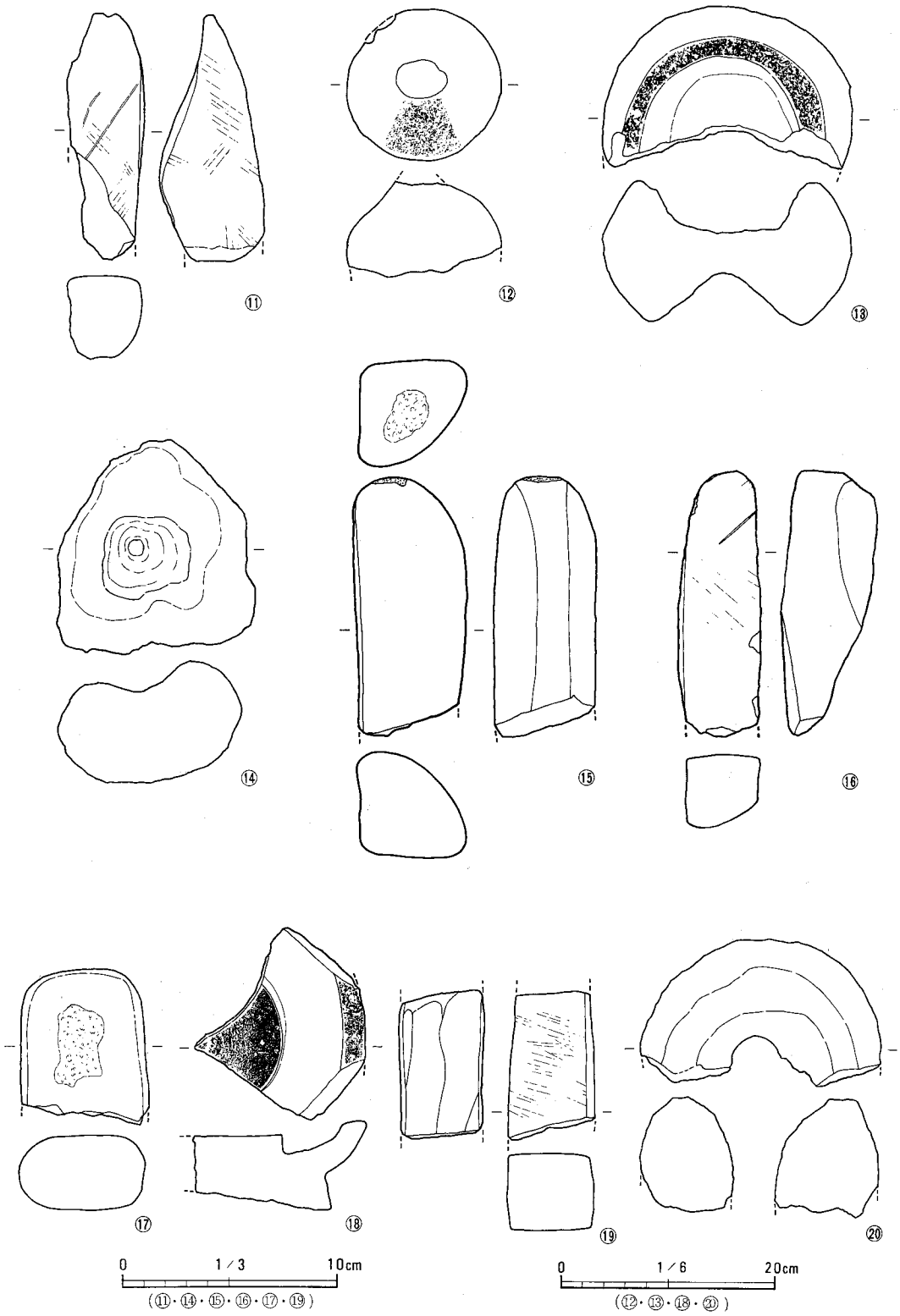


Fig.24　31トレンチ石製品

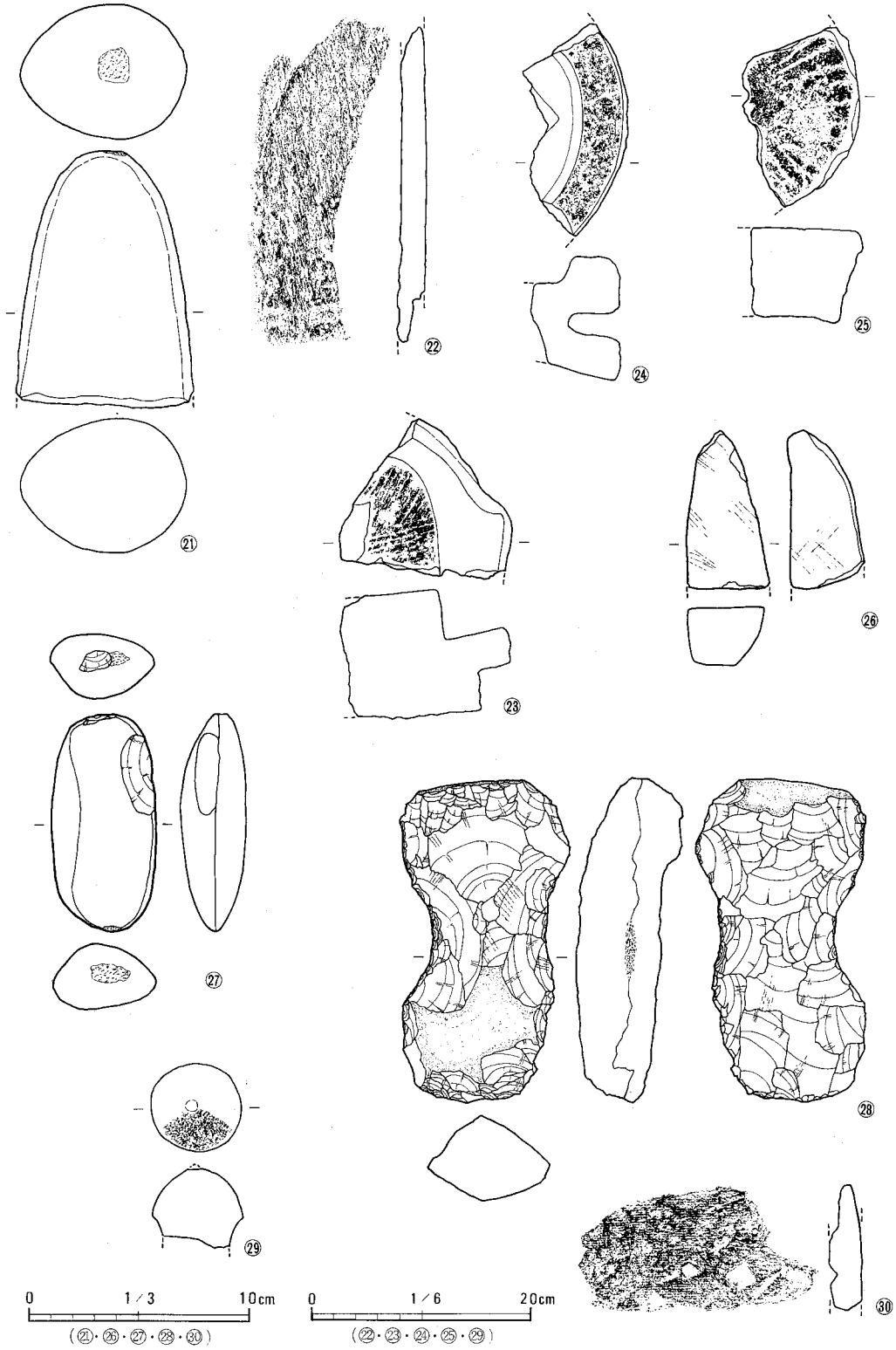


Fig.25 31トレンチ石製品・石器

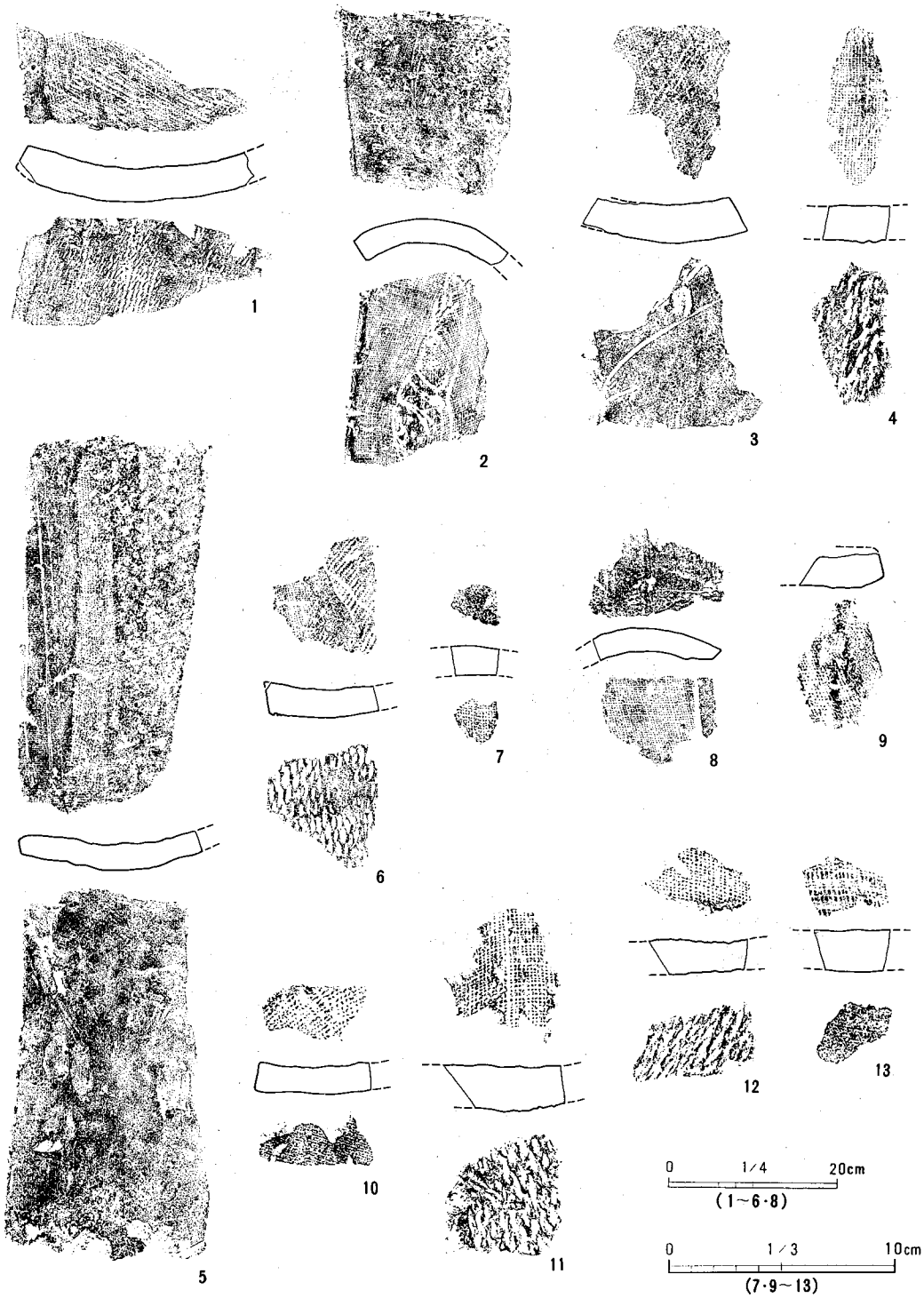


Fig. 26　元総社明神遺跡出土瓦(1)

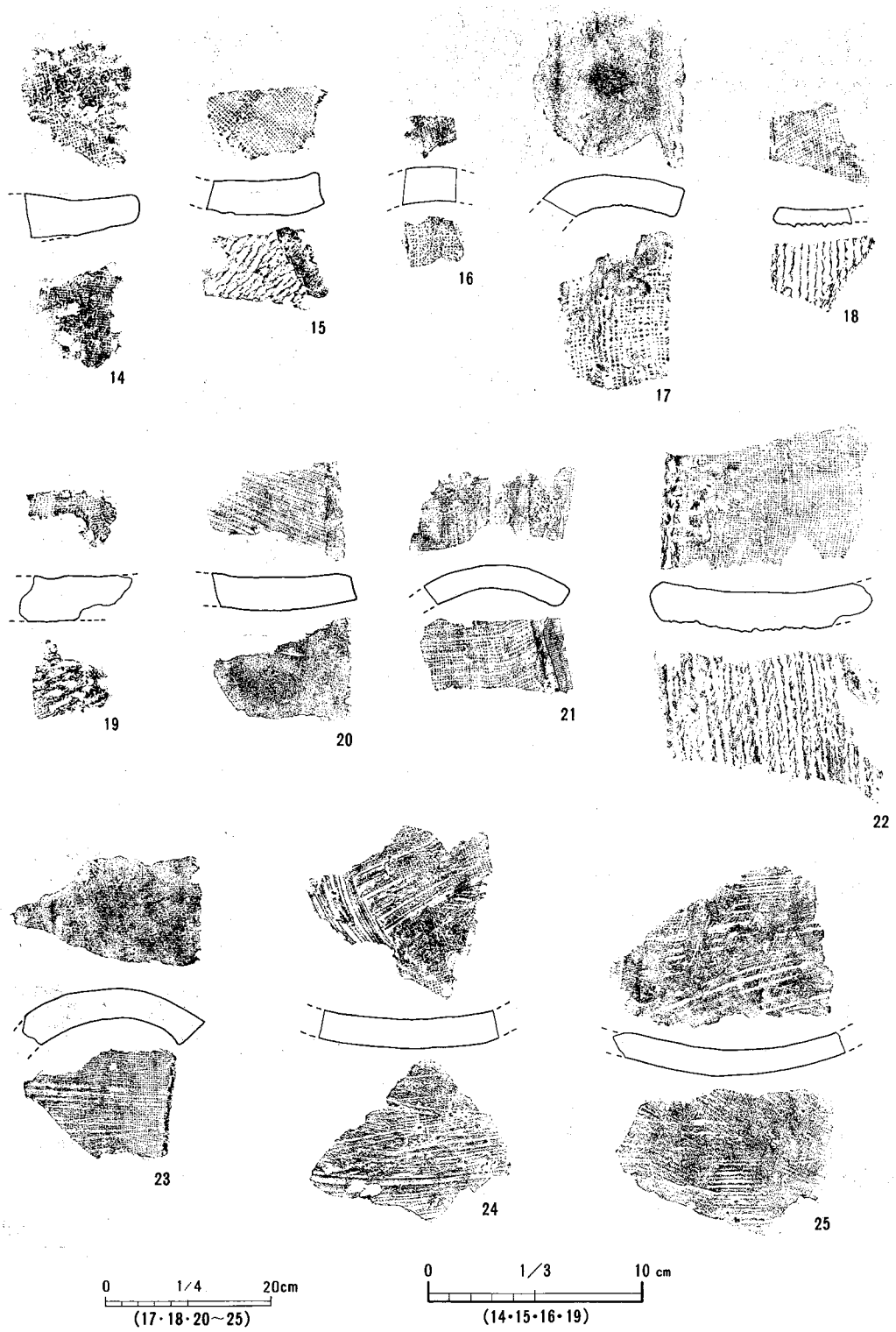


Fig. 27　元総社明神遺跡出土瓦(2)

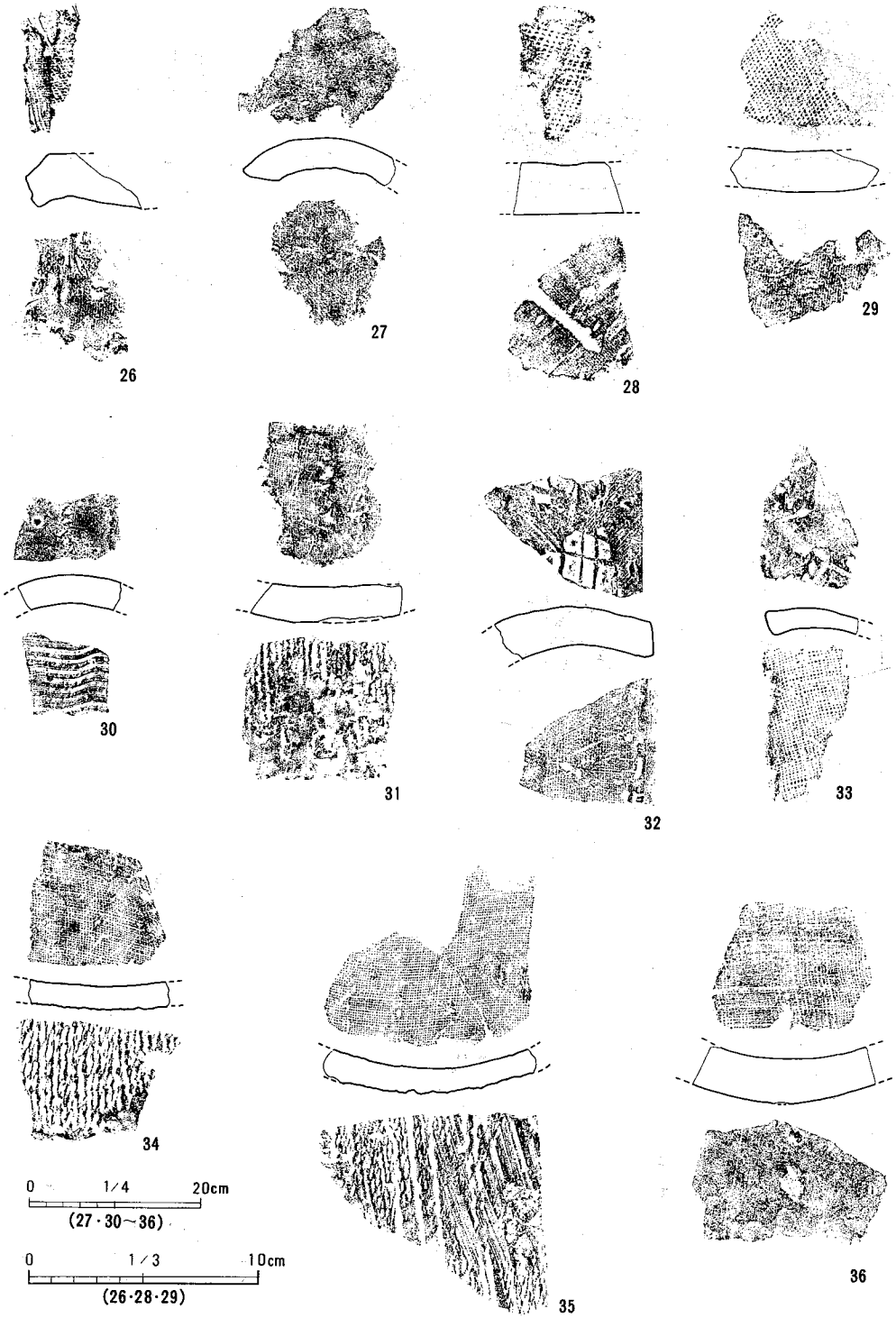


Fig. 28　元総社明神遺跡出土瓦(3)

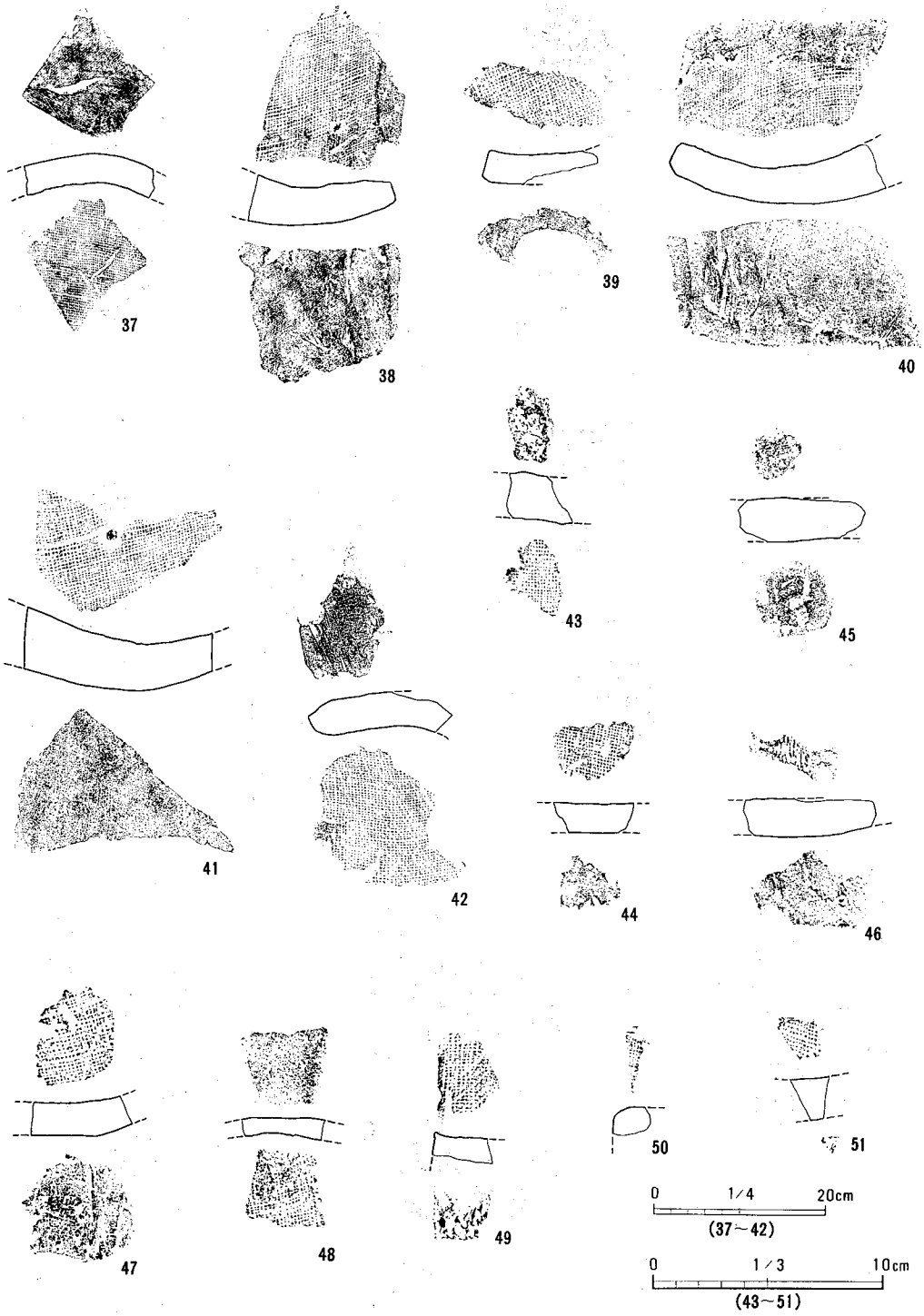


Fig. 29 元総社明神遺跡出土瓦(4)

1. 28トレンチ全景（東から）

2. W-1号溝址（東から）

3. W-1号溝址南北セクション（東から）

4. I-1号井戸址（東から）

5. 安全対策の様子（西から）

1. 30トレンチ全景（西から）

2. 30トレンチ東側部分（西から）

3. H-1号住居址（北から）

4. W-2号溝址（北西から）

5. D-1号土坑（西から）

1. H-2号住居址, D-3号, D-5号土坑（西から）

2. H-2号住居址カマド（西から）

3. I-1号井戸址（西から）

4. D-3号, D-5号土坑（南から）

5. H-2号住居址遺物出土状態（南から）

6. H-2号住居址カマド内遺物出土状態（南から）

7. トレンチ内遺物出土状態（南から）

8. I-1号井戸址遺物出土状態（西から）

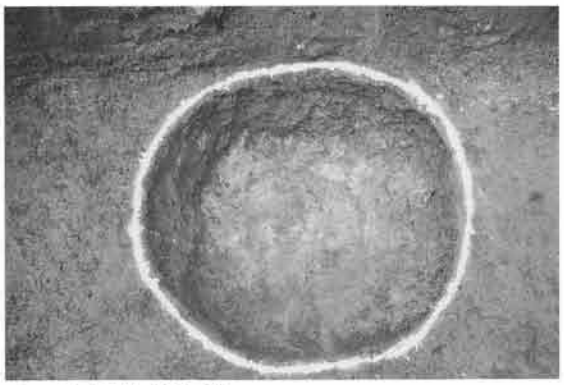
1. I-1号井戸址東西セクション（北から）

2. D-3号土坑遺物出土状態（北から）

3. トレンチ内遺物出土状態（南から）

4. トレンチ内遺物出土状態（西から）

5. D-9号土坑（南から）



6. D-10土坑（南から）

7. 30トレンチ西側部分（東から）

8. 30トレンチ全景（西から）

1. 31トレンチ全景（西から）

2. 31トレンチ西側部分（南西から）

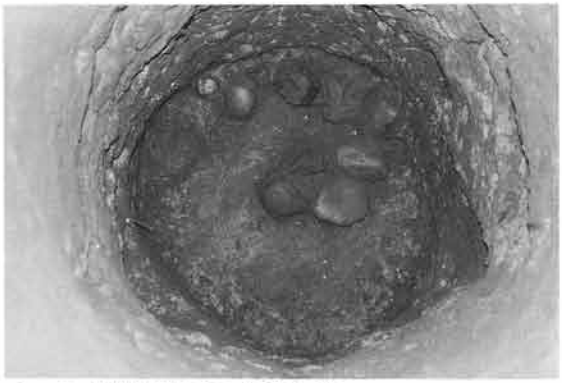
1. 31トレンチ深掘（南から）

2. W-1号溝址，I-1号，I-2号井戸址（南から）

3. 土坑群（東から）

4. 土坑群（東から）

5. I-1号井戸址（南東から）



6. I-1号井戸址底部分（南東から）

7. I-2号井戸址（西から）

8. I-3号井戸址（南から）

1. Ⅰ-4号井戸址（東から）

2. Ⅰ-4号井戸址（北から）

3. Ⅰ-4号井戸址天目茶碗出土状態（南東から）

4. Ⅰ-4号井戸址香炉出土状態（東から）

5. 31トレンチ東側部分（西から）

1. W-2号溝址西側部分（西から）

2. W-2号溝址東側部分（東から）

3. W-2号溝址南北セクション（西から）

4. W-2号溝址およびI-5号井戸址（南から）

5. W-2号溝址（西から）

28・2

28・5

30・6

30・7

30・9

30・10

30・8

30・11

30・12

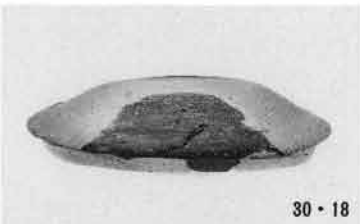
30・13

30・14

30・15

30・16

30・17


30・18

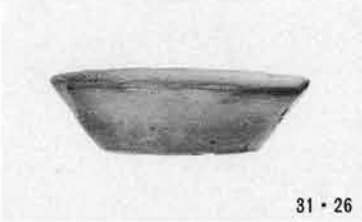
30・19

31・24

30・20

30・21

31・22


31・26

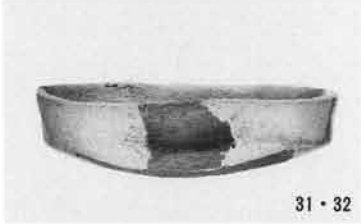
31・27

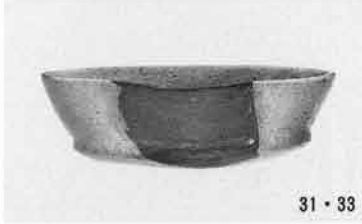
31・28

31・29

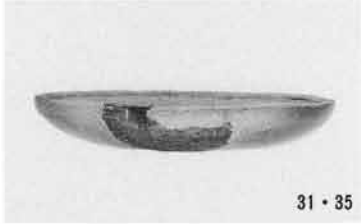
31・30

31・31


31・32


31・33

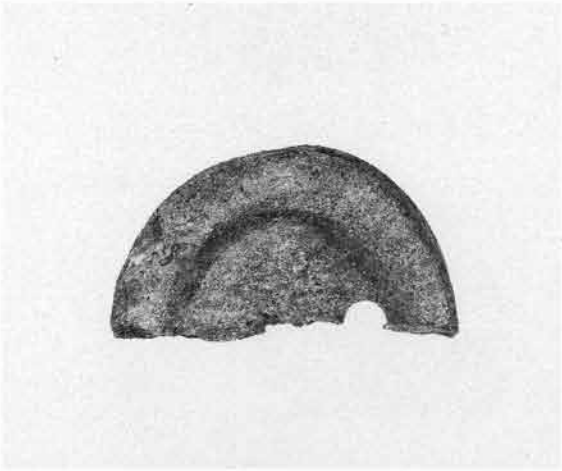
31・34

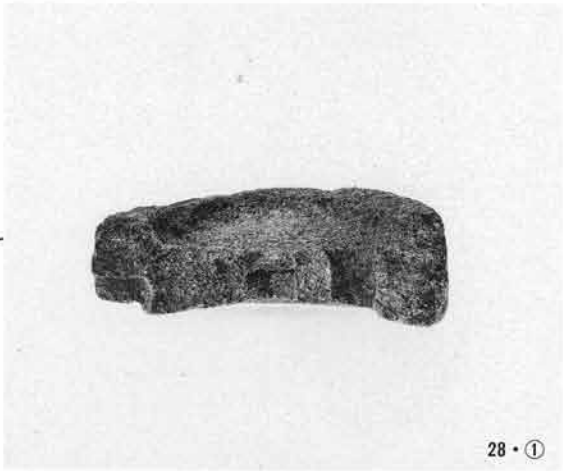

31・35

31・36

31・37

31・38





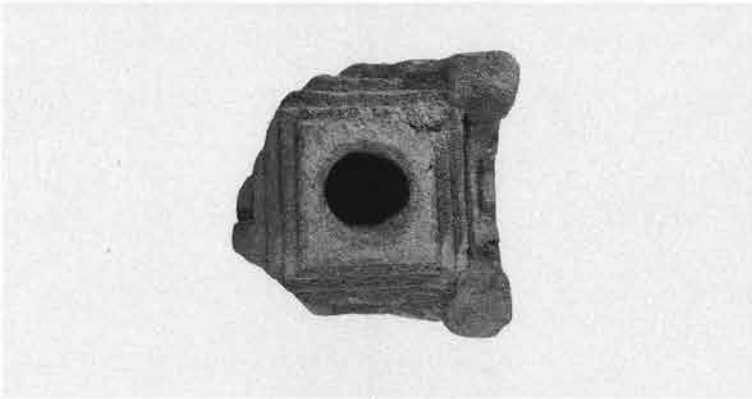
28・①

28・②

28・③

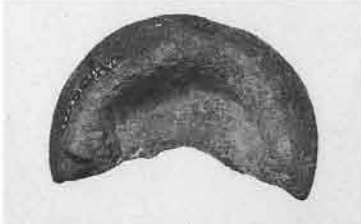
28・④

PL. 12



30・⑤

30・⑥

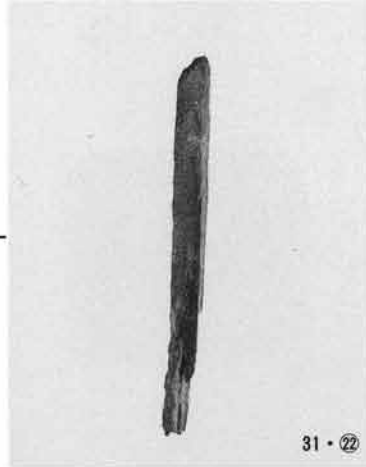


31・⑫

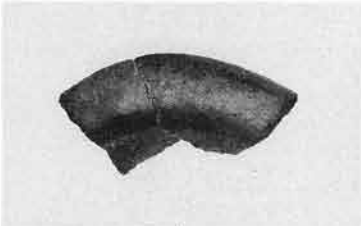
31・⑬

31・⑱

31・⑳



31・㉒



31・㉓

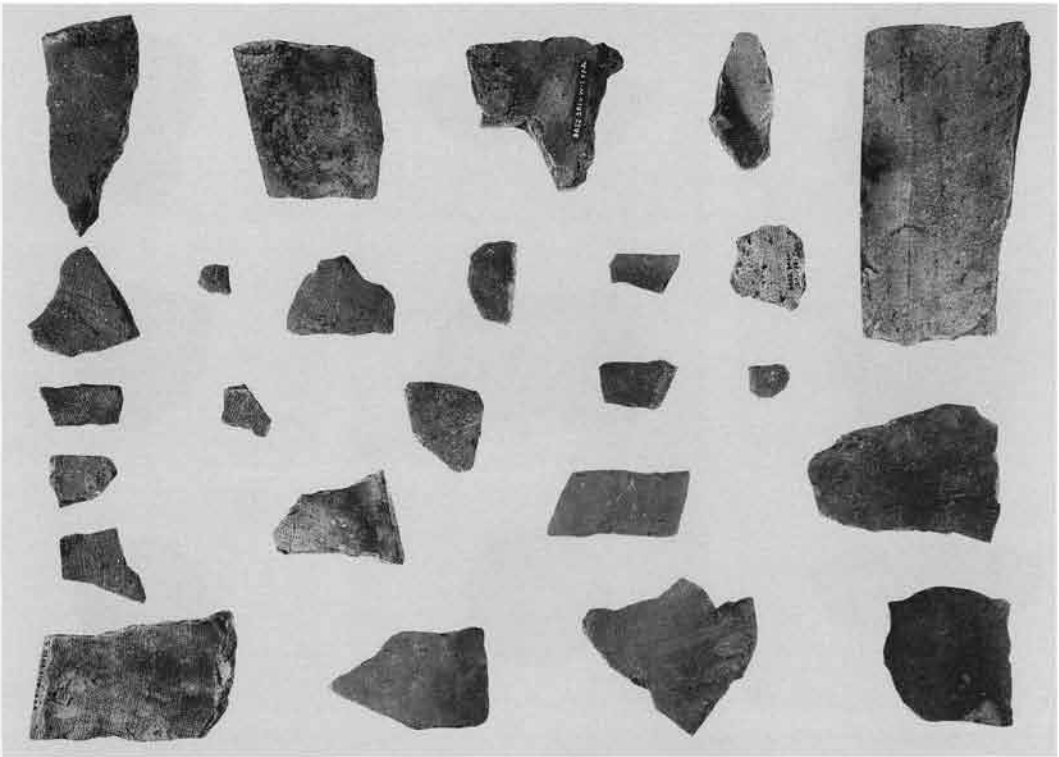
31・㉔

31・㉕

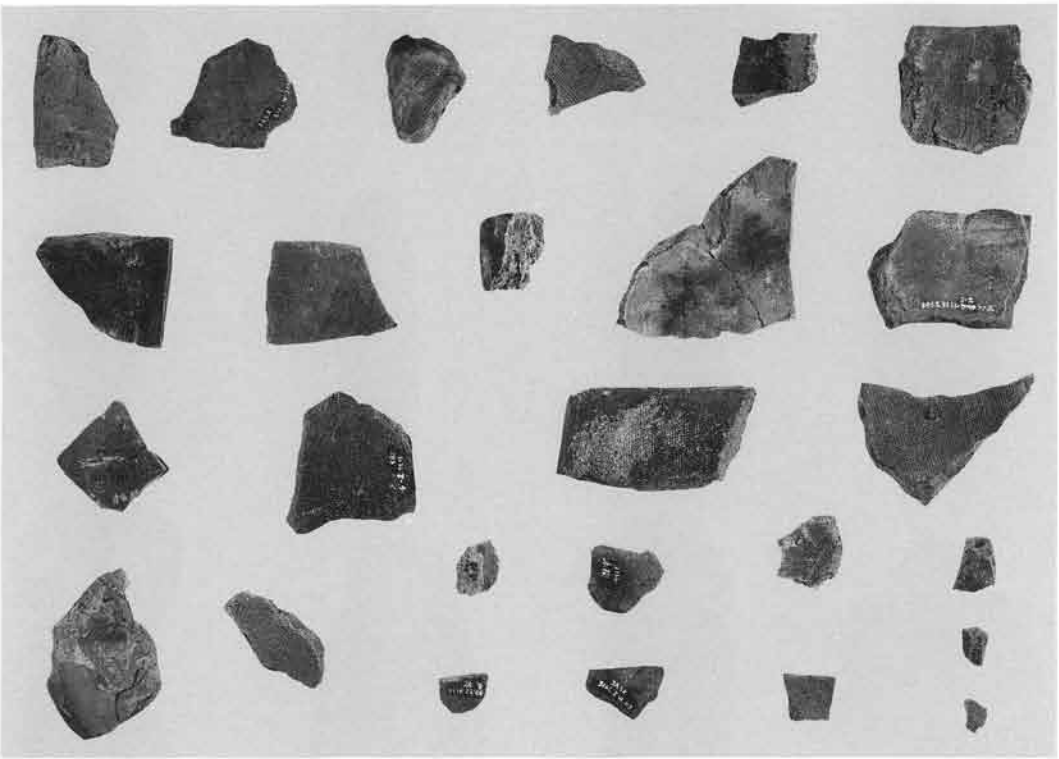
31・㉚

31・㉙

砥石・凹石・敲石・打製石斧



瓦（1～25）



瓦（26～51）

調　査　要　項

遺跡名称	元総社明神遺跡（もとそうじゃみょうじんいせき）
遺跡記号	3A52
遺跡所在地	群馬県前橋市元総社町3,643番地ほか
調査期間	平成3年6月25日～平成3年11月8日
調査面積	調　査　面　積：1,173㎡
	30トレンチ　498㎡
	31トレンチ　460㎡
	28トレンチ　215㎡
開発面積	275,000㎡
調査原因	土地区画整理事業
調査依頼者	前橋市都市計画事業元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業
	施工者　前橋市　代表者　前橋市長　藤嶋　清多
調査主体者	前橋市埋蔵文化財発掘調査団　団長　遠藤　次也
事務局	事務局長　福田　紀雄　事務局次長　遠藤　和夫
	財政係員　高橋　賢靖　井上　敏夫
	庶務担当　須田みずほ　古川真喜子
調査担当者	鈴木　雅浩　狩野　吉弘
調査参加者	岩木　佳代　岩木　操　大田　一郎　岸　フクエ　住谷　文彦
	渡木　秋子　湯浅たま江　湯浅　政夫　湯浅　道子
調査協力	群馬県教育委員会文化財保護課　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　区画整理1課
	愛知県陶磁資料館　大阪市立東洋陶磁美術館
	飯島　静男　井上喜久男　大江　正行　大西　雅広　加部　二生
	木津　博明　柴垣　勇夫　早田　勉　土岐　阜三　出川　哲朗
	真下　高幸　茂木　渉
	井上測量株式会社　有限会社古環境研究所　たつみ写真スタジオ　宮下工業

（五十音順　敬称略）

元総社明神遺跡 X

平成4年3月20日　印　刷
平成4年3月30日　発　行

編集発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664－4
TEL　0272-31-9531

印　　刷　株式会社　開文社印刷所